小屋　はひまつ　三角點　槍岳　すみれ
蘭　蜜蜂　しなのきんばい　みやまきんぽうげ　はくさんいちげ　べにばないちご　穂高　飛騨山脈　三俣蓮華　鷲羽・水晶・野口五郎　高瀬川　御影石　富士・浅間・白馬・立山

7　默讀。
▽次々と展開する壯大な景觀に傾倒させて。

8　指名讀。
▽適宜に句切つて、數名に。

9　挿畫と文とを照合させる。
▽文の何處を見せたものか、讀本に何う出て居るか等。
百二十頁右上　なゝかまど。
同　左下　いはかどみ。
百二十四頁左上　はくさんいちげ。

10　同　右下　しなのきんばい。
百二十六、七頁　燕岳頂上の展望。

11　低音讀。
ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　輪讀。
▽適宜に句切つて、座席順に。

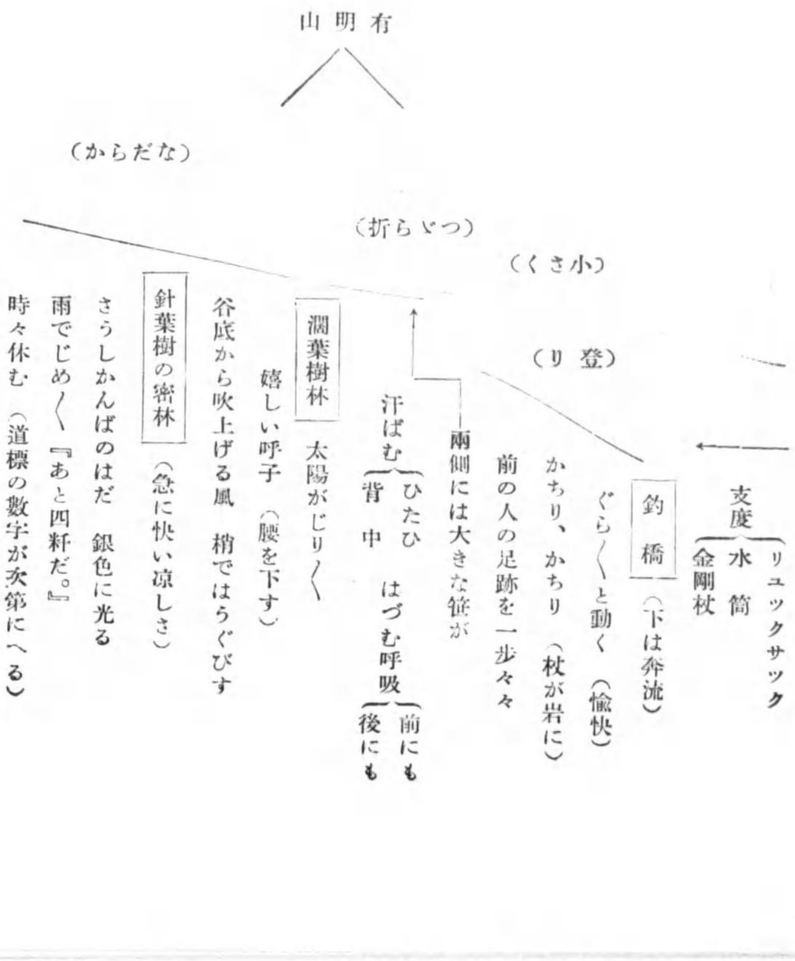
2　範讀。
▽文の要所に注意させて。

3　質疑應答。
▽再應不明の箇所を質問させる。

4　默讀。
▽文意の所在を考へさせて。

5　逐次研究。
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

（午前七時）
出發　中房溫泉
（山田先生）



（からだな）

（急）

高山植物

なゝかまど
さるをがせ
いはかゞみ

さま〳〵な小鳥　遠く近く

合戰小屋　午前十一時（こゝまで四時間）

辨當（そのおいしいこと）

霧　だん〳〵深く『天氣は大丈夫です。』

さうしかんばの林が續く

笹が珍しく花をつけて

丈の低い細い木

それも遂になくなつて

眼界が急に開けて

はひまつ　波のやう

わい〳〵歡聲をあげた

（尾根傳ひ）

三角點（胸がをどる）

やゝ廣く平（三角點を示す石）

中房溫泉から四・一粁

絶頂まで一粁

天地がすてきに明るい

晴れてゐれば（燕の絶頂も　槍岳其の他も）見える

お花畑

こいはかゞみ
すみれ　すき通る程（鮮か）

蘭

櫻　今を盛り

蜜蜂　花から花へ　『山は今春なのだ。』

滿天の星

黃色（しなのきんばい）
黃色（みやまきんぽうげ）
白（はくさんいちげ）
深紅（べにばないちご）
入亂れて

殘雪　ところ〴〵

大きな雪渓　足下に

（縦　走）

先頭はもう鞍部に　帽子を振りながら

すばらしい景色　西の方

左端の穂高　續いて槍　（天を突く）

更に右へ　飛騨山脈　（三俣蓮華・鷲羽・水晶・野口五郎）　屏風のやう

大自然の景觀　向ふの山脈の間　千尋の溪谷

一種の興奮　其の底に　高瀬川

峯傳ひの道　馬の背のやう

くづれようとする岩と砂の間　はひまつにすがり

右下から吹上げる風　もう〳〵と雲を

左は急な斜面が　神祕な谷底へ

燕の絶頂　二千七百六十三米の最高點

大空の一角　御影石の岩塊

最頂　十人とは乘れない程　（狹い）

槍　『こゝまでお出で。』（嚴然と）

あの絶頂へ　傾斜は四十五度以上

『あんな山へ登れる人があるのかなあ。』

『もう二三年たつたら、君たちも……。』

東も北も　雲がとざして　（僕等の村はもとより富士・淺間・白馬・立山等の委）　見ない（殘念）

下山　（午後二時）

『山は廣い。』　僕はつく〴〵

何年か後　きつとあの槍へ

第三次指導

1 通讀練習。
▽反覆通讀してノートを整理させる。

2 文の觀點を言はせて見る。
▽途中の苦しさ・景色の展開する珍らしさ・頂上の雄大壯嚴な展望・山の雰圍氣や高山植物等。

3 展開描寫の絶妙な箇所を拾はせる。
▽讀合せと共に新しい描寫の手法を呑込ませる。

4 話方練習。
▽登山氣分に浸らせ話材を各自に選ばせて。

6 話合。
▽配付した文圖を前にして。

7 文意の檢證。
▽表現面に即して文意を確める。

8 話合。
▽前項の文意や感想を中心に。

9 指名讀。
▽適宜に句切つて、輪讀式に。

10 味讀。
▽文の感觸を嚙締め山肌に觸れる快味に浸らせて。

11 ノートを纏めて提出させる。

例へば頂上の展望・登山趣味・山容の變化・氣象の變轉・高山植物・山へのあこがれ等。

5　演習。

▽文に即して說明入の山岳地圖を作製させる。

6　學習事項の整理

▽內容方面では高山に關する各種の理科的知識を、形式方面では展開描寫の手法等を箇條書に整理する。

テスト問題

一、次の漢字は何劃か正確に數へて記入しなさい。

1　溪（　　）　2　奔（　　）　3　狹（　　）

4　刻（　　）　5　紺（　　）　6　鳴（　　）

7　塊（　　）　8　紫（　　）　9　溫（　　）

10　界（　　）

二、次の語句を組合せて下に番號を入れなさい。

（1）　さつき出發した溫泉宿が（　　）急に快い涼しさを覺える

（2）　針葉樹の密林へはいると（　　）小鳥のさへづりが聞かれる

（3）　遠く近くさま〴〵の（　　）歡聲をあげた

7　補充說話。

▽國立公園としての中部山岳・槍穗高の威容等。

8　朗讀練習。

9　視寫・聽寫練習。

10　新出文字の書取。

11　語句の應用練習。

12　テスト

（4）　みんながわい〳〵（　　）背中を溫める

（5）　薄日がぼか〳〵と（　　）だん〳〵小さくなつて行つた

三、次の箇所を讀上げて書取らせる。

1　ふとはひまつの間に、高さ一米にも足らぬ櫻が今を盛りと咲いてゐるのを見た。眞夏に櫻の滿開である。

2　所々に白雲がたゞよつて、中腹をおほひ、峯をかくし、谷々の雪溪と相映じて、山々を奧深く見せる。

3　右下から吹上げる風は、もう〳〵と雲を卷上げて、それが此の尾根を界に消散する。それは不思議に思へる程はつきりとしてゐた。

4　昨日の雨でじめ〳〵して、うつかりすると足が滑る。木の根・岩角を數へるやうに、踏みしめ踏みしめ登つた。

第二十　蟲の聲

鬼貫と言ひ芭蕉と言ひ、又蕪村と言ひ德川時代の俳人として堂々たる大家である。其の吟句の中で當該學年の兒童にも比較的理會し易い七句が選ばれて居る。日本文化の源流を辿り藝術日本の由來する所を知らしめんとした編者の苦心を多とせねばならぬ。斯く兒童や素人にも分り易い句で有り乍ら內容的にも勝れた句を選ぶのは、容易な樣で實際は頗る至難の業で有る事を思はずには居られない。

前卷にも童心豐かな一茶の俳句が取入れられたが、本課では芭蕉の句として名高い名月の句に於ける〝や〟蕪村の有名な春の海の句に於ける〝かな〟等、何れも句特有の所謂切字が初めて現れ、稍進んだ俳句の姿態を兒童に鑑賞させようと言ふ編者の意圖が窺はれる。

明治畫壇の巨匠川端玉章も蕪村の春の海を繪筆に表現しようと試みたが、遂に筆を投げ是程大きな海の景色は到底繪には描けぬと嘆息したと言ふ話を聞いたが、玉章こそ此の句を眞に味到し得た一人では有るまいか。此の春の海と言ひ五月雨の句と言ひ、共に大自然の雄大な姿が斯くも力强く表現されたかと思ふと全く驚異をさへ感じさせられる。日本の春を象徵した菜の花の句も良い。之なら玉章も縱橫に才筆を揮つたで有らうと思はれる一幅の繪である。

鬼貫の行水の句には自然の音樂が奏でられ、芭蕉の名月は餘りにも適切巧妙な表現に頭が下る。秋の暮の句は無雜作に吐いた中に無限の深さがあり、すみれ草には旅人の旋愁に深　印せられた一輪の花の薰り高く

吟じられ、七吟七種、詩境の豐かさに唯感歎の外は無い。

文字語句

新出文字

ナシ

語句と其の解說

行水のすて所なし　こゝの行水は湯あみ等して汗などを洗ひ淸めること。今は多く風呂に入るが、昔は夏から秋にかけて夕方には皆行水をしたものである。湯をたらひなどに入れて、さつと浴びに氣持は全く淸涼其の物である。今でも田舍では此の習慣を維持して居る所が少く無いから、田舍の兒童には理解が容易であらう。此の句の觀點は中七字の『すて所なし』の措辭にある。之で行水をして居る人の心持も讚めれば、庭さきにすだく蟲の聲も想像される。すて所なしと言ふから庭一面に鳴いて居たであらう事も想像に難くない。句の出所は鬼貫句選。

鬼貫　姓は上島、別號槿花翁・驪々哩・犬居士・佛兄(サトエ)。寛文元年攝津伊丹に生る。壯年の頃二三の諸侯に仕官したが、致仕して大阪に定住した。俳諧は八歲既に〝來い來いといへど螢は飛んで行く〟の吟があつたと自らいふ。重賴に學び談林風に傾いたが、貞享二年(二十五歲)〝まことの外に俳諧なし〟と悟り、蕉風に近い一家を成し、宗丹の俳風を進めて伊丹風を大成。天明の蕪村は理想とする五俳家の一人に數へた。元文三年七十八歲を以て歿。

名月や泡をめぐりて　此の句の觀點は『夜もすがら』の詩境に在る。夜もすが

らは終夜。よどほし。よすがら。即ち暮方から曉迄をいふ。名月の夜、月の景色が良いのに乘じて、外面を歩き廻つて居たら池があつた。其の池水に美しい月が映つて、一入靜かで清く、どうも其處を立ち去る事が出來ず、其の池を幾度と無く廻つて、つい〳〵夜明迄浮かれ興じ、世の中の事は凡て打ち忘れて、十分に良夜を賞玩し詩興を逞うしたと言ふので、芭蕉の好尙の程が思はれる。此の句は叙景にも涉つて居るが、其の主想は作者が名月に浮かれた點にある。"葛の松原"に此の句は芭蕉の句では無く、素堂の句だと言ふ。現に大魯の"俳諧五千稿"には明かに素堂の句としてある。然し一般には芭蕉の句として知られて居る。

枯枝に烏のとまりけり　芭蕉の句と言へば古池の句と此の枯枝の句が誰の頭にも浮び出る。それ程名高い芭蕉獨特の句境を見せたものである。枯枝にションボリとまつた烏に晩秋のさびしみを思はせた邊りに此の句のよさがある。烏は勿論一羽であらう。萬目蕭條の間に孤影悄然たる烏の姿が一段と蕭索の感を深うする。或人は此の句を哲學的に解釋して居るが、それは兎に角實際此の句のさびしさが兒童に分らせ得るかどうか。俳句は有の儘を極致とする。從つて此の句の取扱も唯是丈の事で滿足すべきで、態と難しく解釋して童心を困惑させる事は絶對に避くべきである。芭蕉自身も言つて居る通り、何の巧も無く其の儘を吟ずる事が今後の俳句の歩むべき正しい道でもある。彼は又斯かる閑寂の趣こそ俳句の生命であるべきを語つた。閑寂趣味と其の儘の叙寫と言ふことが、此の句に依つて初めて體現されたと言ふことが何よりも芭蕉の滿足する所であつて、彼自身も此の句を以て初めて悟りを開いた樣に考へたのであらう。柳絲花紅が佛者の悟りである樣に敢て物を遠きに求めるわけでも無く、實情・實景其の儘を朴直に叙する所に俳句の新生命はある

と大悟して、それ以來今日に至る迄所謂芭蕉文學たる俳句は展開されて來たものとすれば、此の句の取扱も自ら明瞭と成るであらう。此の句は芭蕉一代集にも出て居れば曠野集にも出て居る。

來て何やらゆかし　此の句の前書には"大津に出る道山路を越えて"とある。此の句の觀點も中七字の『何やらゆかし』に在る。何やらはたゞ何となく。何といふこと無しに。たゞわけも無く。"ゆかし"はしたはしい。なかしい。おくゆかしいの意で、知りたく思ふ。案じられる等の意も含めて居る。此處の"すみれ草"は山野に自生するコマヒキグサ・スモウトリバナ・ヒトヨグサ等いふさゝやかな花を咲かせる草であらう。芭蕉の風格を思はせる最も勝れた句の一つで、彼は小さい自然の現象にも絶對的な存在の理由があるとして、萬物を無差別に見て愚な比較の觀念で眺めて居ない。山間に頭を擡げた草草は極めて小さい一存在に過ぎぬが、然し太陽は宇宙の中心として其の周圍を廻つて居る。芭蕉はどんな大きな自然の現象でも、又どんな小さな自然の現象でも同じ尊敬の念を以て一視同仁に眺めた。彼は"佐渡に横たふ天の川"に對し、"五月雨をあつめて早し最上川"に對して拂つたと同樣の尊敬を此の山路に咲くすみれ草に拂ふのである。彼は自然の現象に價値の相違を見たことが無い。理知に煩はされて自然を鑑賞したことが無い。彼の自然を凝視する眼は僞りが無い。明瞭である。直接である。單純である。故にまつしぐらに自然に面接して、自己をそれに結合して仕舞ふ。彼は素朴無邪氣であるが、極めて敏感である。彼は空間の廣さに對し、時間の深さに對し、循環極まり無き宇宙の法則に對し最も適確な了解を持つた詩人である。そして彼は十七文字の祈禱をあげて彼の生命を更新せしめた。芭蕉は單純だが幼稚でない。彼は無邪氣であるが、子供じみた詩人で無い。彼は人間

の原始性の根源に歸つて生きた人である。彼が眞實に生きた人であるから、眞實な詩の存在を見る事が出來たのである。理窟や議論の力で、彼は詩に生きる要諦を學んだ人で無い。彼は自己を詩的思想に集中して初めて自然禮讃の道に就いた人である。彼が"何やらゆかし"と歌つた時、彼は自分自身を禮讃して、太陽が自分を中心として廻ることを感謝したのである。そして彼は自分の魂に暴君の臙をあて乍ら、でこぼこのない人生の中道を歩き無駄な不平一つも語らなかつた詩人である。彼は反省の心で自分の寂しい影を地上に見出した眞實の詩人である。

芭蕉（バセウ）　蕉風の祖。正保元年伊賀の上柘植（カミツゲ）に生る。（後同國上野に移る）姓は松尾、通稱は甚七郎、名は宗房、芭蕉は芭蕉庵の略稱である。自ら貞門・談林の風體を經て、俳諧藝術の正風を拓く。元祿七年十月十二日"旅に病んで夢は枯野を駈けめぐる"を辭世として歿、年五十一。芭蕉は痩軀多病、年四十の頃既に白髮で六十歳位に見えたと言ひ、三十五六歳の頃もはや翁（オキナ）と尊稱された。西行・宗祇の風雅を慕ひ、旅を好んで各地に漂泊吟行し、一生を風雅に殉じ門人の扶助に依つて生活した。杜詩を愛し其の影響が多い。蕉風の特色は寂（サビ）と細味を目標としたが、豪放な趣に於ても彼の如き俳人は絶無である。殊に連句に於けるウツリ・響・匂・位等の附け方は、總て趣致・風韻を以て附けたもので、其の緊密精巧なる芭蕉歿後之に及ぶものが無い。彼の俳諧行脚は其の詩境に多くの影響を持つて居るが、又各地に蕉風の傳播を助け、蕉風の隆盛を來した一大因と成つた。門下に集まる者數千、其の中其角・嵐雪・去來・凡兆・丈草・支考・杉風・許六・野坡・越人・惟然・涼菟・荷兮・嵐蘭・酒堂・園女・路通・智月尼等が最も著れて居る。

春の海（ハル ウミ）ひねもすのたりのたりかな　靜かな春の海の氣持を詠

んだもので、"のたりのたり"の一語が此の句の中心と成つて居る。"のたり"はのたるさま。うねるさま。又垂れ下るさまにいふ。のたりのたりはのたりの重言、のたるさま、うねり行くさまにいふ。印象の頗る鮮かな句で、見る限り一面の海である。然も其の色は藍の樣に濃いが、秋のそれに見る樣な清澄と冷さは無い。どんよりとした青さで、如何にも靜かな海である。波が一上一下、宛然巨象が其の長い鼻をのたぐる樣な鈍重さで、重つては離れ、離れては又重り、のたりのたりと打寄せて居るのである。"春の海"で切り"のたりのたり"で受けた邊り、ちやうど撞き捨てた梵鐘の餘韻の樣に長く遠く響を傳へる樣な思ひがある。俳句は十七字で纏つた思想を表さなければならぬ。だから一字一句が靈活に働いて居らねばならぬ。從つて名詞や動詞等が省略されても、前後の措辭の上から其の意味が通りさへすればそれで良い。助詞や助動詞等は句意の通ずる限り省略變更されるのが常である。俳句の面白味は措辭の如何で、僅か十七字の文字が夫々生きて働いて居る所に言ひ知れぬ味がある。句の出所は俳諧古選、蕪村一代集にも出て居る。

菜の花（ナノハナ）や月は東（ヒガシ）に　此の句も蕪村一代集に出て居る。印象の頗る鮮かな句で、日本の春郊の美風景は此の一句に盡きて居る。黄色の濃く西に沈み掛ける太陽は黄金色である。さうしてそれに對する東天の月は正に之れ圓かに上る一個の銀鏡である。此の月と太陽の中間に廣く展開される田野は黄金の菜の花で彩つた花毛氈を敷いた樣な情景だ。濃艶と言ふよりも寧ろ長閑かで、然もどこかに寂しみがあり、ひんやりとした感觸をも伴つて居る。季は春、時は夕暮、場所は廣々とした田圃、春の夕暮の光景を其の儘寫生したもの。日が西に落ちて雲の間に夕陽かまだ殘つて居る頃に、月はもう東の空に上つて居る。其の下の地上には菜の花が

遠く一面に咲き續いて居る。日が全く落ちて仕舞はぬ故に、日の光が強いのは勿論であるけれども、月の色も暫くハッキリと空に形を現し掛けて來たと言ふ樣な日暮方の光景で、其の下にある地上の色は菜の花で黃いろい。其の黃いろい色が日の光の弱つて來るに連れて幾らかさめて來る樣な感じもあり、同時に空の月が段々と光を增して來る事も聯想される。其の夕陽が菜の花の色を夕暮らしく染めつゝあると言ふ樣な、色彩から言つても極めて複雜な景色を、極めて自然に、極めて巧に句にした點が面白い。"月は東に日は西に"は勿論對照的な叙法ではあらうが、殆どそれが對照的である事を忘れしめる迄に自然である。寧ろ其の大膽な詠法が鮮明に其の光景を描き出して、同時に此の句を力强くして居る。尙玆で一應說明して置き度いのは『や』と『かな』の切字に就てゞある。此の句では『菜の花や』と置き、前句では『かな』と抑へてある。此の『や』と『かな』は俳句に附物の樣に能く使はれる手法であるが、『や』『かな』を一句の中に入れるのは絕對に忌むべき事とされて居る。そこで先づ『や』の場合であるが、此の『や』は別段感嘆とか疑問とか言ふ意味がある譯では無く、『菜の花』と言ふ或る事象の感じを殊更に强く讀者の頭に印象せしめる働きを持つて居る。此の場合『菜の花に』だとか『菜の花を』だとかしたら、唯それ丈の事に成つて仕舞ふが、『菜の花や』と持ち掛けると『菜の花』と言ふ感じが强く浮き出て、廣々とした菜の花畑の有樣が躍如として眼前に展開される。それから『かな』の働きであるが、此の『かな』も『や』と同樣に別段感嘆とか嗟嘆とか言ふ意味を持つて居る譯では無い。『春の海がひねもすのたりのたり』と言へばそれでも意味は通るが、それではちつとも餘韻が伴はない。唯それ丈の事で何の感じも起きない。だからそれ『かな』で

ピタリと押へると、餘韻ができ餘情が起きて其の際の光景を自由に且つ十分に聯想させる事が出來る。切字はまだ外に幾らもあるが、兎に角此の『や』『かな』の二つは俳句として最も進步した切字であつて、同時に最も莊重な、最も典雅な調子を有つ俳句獨特の切字と言つて良い。

さみだれや大河(タイガ)を前(マエ)に　之も印象の鮮明な句だ。『さみだれや』の『や』の切字が能く利けて居る。さみだれは陰曆の五月頃に降り續く長雨で、梅雨とも又つゆとも言ふ。每日雨ばかりで陰鬱な日が續く。河と言ふ河は水嵩が增して、濁流渦卷く物凄い光景を呈する。此の句は其の五月雨の降る頃、雨で水嵩の增して居る大河を前に控へ、家が唯二軒あるといふ實景其の儘を句にしたものである。此の『家二軒』が此の句の觀點で、其處から聯想の絲が手繰られる。卽ち物凄い程水嵩が增して轟々と濁水が漲り流れて居る其の堤に、澤山の家もある事か小さい藁葺の家が唯二軒有るのみだといふ。其の川の壯大な物凄い感じと、それを控へて平氣な顏をして居る二軒の家の心細い樣な、然もそれに堪へて何と無く氣强い樣な所が此の句の力と成つて居る。之が大きな家が澤山並んで居ると心丈夫ではあるが、それでは却つて此の川の勢が弱められる。然しそれがたつた二軒の家である爲に、此の强大な力を其の二軒の家でジッと耐へて居る所に內に籠つて外に發せぬ强大な力を認めるのである。五月雨の句は數多いが、蕪村は流石に大景を捉へて居る。其の點が元祿の芭蕉と併稱される所以で、彼が俳句の王者と言はれる資格の一つであらう。此の句も蕪村一代集に出て居る名句である。

蕪村(ブソン)　蕪村は姓を谷口と言ひ、攝津東成郡毛馬村の人。後天王寺村に移り、中年は江戶に出で、晩年京都室町に住んだ。又丹後與謝郡に住み、其の風光を愛して與謝蕪村と稱した。俳諧を江戶の內田沽山・早野巴人に學び、

其の高雅絢爛な俳風に材を廣く人・事・物に取り、漢調を加味して最も積極美を歌ふに得意で、芭蕉以來次第に衰頽した俳壇に中興の實績を擧げ天明の盛時を招來した。宗鑑を俳句の始祖とし芭蕉を俳句の開祖とすれば、蕪村は正に中興の俳聖と言ふべきである。蕪村の句は芭蕉の消極的な寂しみに對して、頗る積極的で雄渾の氣が横溢して居る。此の點に於て蕪村は芭蕉が開拓し得なかつた未開の天地に鍬を入れ、俳句の振幅を一段と增大し得たものと言へる。彼は又畫人として其の技は元・明諸家の風を得て頗る達し、盛名池大雅と竝ぶ。俳諧も雅趣に富むものが多い。天明三年十二月二十四日〝白梅に明くる夜ばかりとなりにけり〟を辭世として歿。年六十八。

指導精神

見渡せばの和歌が萬葉と並稱される我が國最高の古今集を以てしたのに對し、本課は鬼貫・芭蕉・蕪村に依る俳句の金字塔を見せて居る。俳句は和歌と共に世界に誇る我が國特有の文學形式で、和歌の（五）（七）（五）（七）（七）、俳句の（五）（七）（五）、僅々三十字足らずで無量億の想を盛つて居る。世界最短の詩形として異國に喧傳されるのも所以なき事では無い。程子が論語を讀んで頗自三十七八一、讀二論語一、當時已曉二文義一。讀レ之愈久、但覺二意味深長一と言つたのは、恰も我が和歌や俳句にピッタリする。此の點全く神祕と言へる。此の平明・素朴で然も意味深長の和歌や俳句を味ふには、先づ其の詩柄を知り、之が解釋の呼吸を辨へねばならぬ。

鳴雪俳話に據ると、俳句が文學の系統に屬して其の一部分である事は改めて言ふに及ばぬ。卽ち俳句は十

七字の文學、詳しく言へば十七字の美的文學であつて、讀むものに感興を起さしめるやうに成つて居らねばならぬものである。一體廣義に言ふ文學は凡そ二種に分れ、一は其の事實を明らかにし、其の意志を達するを以て目的とし、必ずしも興の有ると無いとを問はぬ。之は達意を主とする文學である。他は之に反して感興を興へ趣味を感せしめるを以て主とし、必ずしも事實の明瞭と意志の通達とを問はぬ。勿論それらの條件を具備して居れば一層良い譯だが、それは必須の要件とはしないのである。否時としては其の不明瞭・不通達なるが故に、却て感興を惹く場合がある。之れ卽ち美文學の性質で、其のうち又自から二つに分れ、字數の限られぬ散文と、字數が極つて調子を取つて諷詠に適する韻文とがある。俳句は此の後者の中で、字數の十七字に限られたものである。それで必ずしも事實の明瞭と意志の通達とを要しないが、元來作者自身が感興を覺えて詠出したものであるから、其の感興丈は讀む者に十分解らせねばならぬ。然るに俳句の詩形は極めて短い。字數の多いものなら其の目的も達し易いが、僅に十七字では中々容易でない。だから豫め十分の研究もし熟練も積んで置かねばならぬ。恰も澤山の金があれば道具も十分に整へられ、働きもしよく、立派にも見せられるが、僅少の金で多く働き、同樣の見えを人に示さうとするのが難しいのと同じ事である。從つて是等兩者の美の現し方が自然と違ふやうになる。一方は濃厚・複雜に傾き、他方は淡白・簡單に傾く。素より美其の物は一つであるが、其の味ひの方向に差異が生する譯である。だが既に等しく美である以上、其の價値が同じである事は言を俟たぬ。然も斯樣な美を僅々十七字で現さうと言ふのだから、文字の經濟を考へて無駄を言はず、必要なもののみを詠み込んで行かねばならぬ。

さて美を現はす方法は如何。之は其の事柄と情態とに依つて異同はあるが、大略二つに分れる。一は其の

全體を總括して概念的に歌ふもので、他は其の一部分を擧げてそれのみを歌ひ、其の餘は聯想せしめるのである。だが前者は動もすれば抽象的に成り易く、感興を起し難い。例へば景色が好いと言つても、別れが悲しいと言つても、又友達に逢つて樂しいと言つても、それ丈では唯表面の言葉で、如何に樂しいのか、悲しいのか、好いのか分らぬ。然るに一部分を取つて他を現す事にすると、其の位置の關係なり、動いて行く順序なり、さては何ういふ風に嬉しいとか悲しいとかも能く分つて、感興を起させ易い。元來人は聯想する智識を持つて居るから、全體を概括して歌ふよりは、寧ろ一部分を歌つて他を現し、餘韻・餘情を籠めた方が一入感興を深うする。殊に俳句は詩形が短小であるから、此の種のものが頗る多い。

然らば感興を與へる手段は如何。第一は着想で、第二は言葉である。着想のみ如何に良くとも、言葉が整つて居らねば感興を與へる妨害となる。之では完全な美文とは言はれない。さればと言つて言葉のみ吟味しても、着想が俗で有つたり平凡で有つては感興が起らぬ。だから此の二つは必ず相伴うて行かねばならぬ。けれども時としては極く平凡な事でも、言ひ廻し一つ、言葉のあや一つで働きを持つ事がある。例へば古い歴史に使はれた言葉を借りて來るとか、或緣語を用ひるとか、其の他種々奇警な言葉を入れるとかすれば着想が生きて來る。着想が奇拔・斬新であれば、言葉はよし平凡であつても感興を起す事がある。だから一概に兩方共完全で無ければ駄目だとも言へない。隨分一方丈が面白い爲に珍重されて居る例は澤山ある。又其の言葉も元來十七字きりで甚だ乏しいのだから、出來る丈巧みに使つて、假令名詞や動詞は省略されて有らうとも、前後の措辭の上から其の意味さへ徹底すれば差支無い事になる。況してテニヲハなどは着想の解る限りに於いて、省略變更されるのが常である。

右の次第で、一般に達意を主とする文は、詳しく書いて、且つ註解を加へても良いのだから、世間の人にも分り易いが、美文は言葉を省略したり、前後上下を轉倒したり、表を言つて裏を現したりするから自然解り難くなる。殊に韻文は調子を主とするので形の上にも字數の上にも制限が有つて、愈々解り難くなる。だから之を讀んで直ぐ意味を取る迄には、相當の習練を經ねばならぬ事は明かである。從つて俳句の解釋も餘程の習練を必要とする。だが俳句にも一種の文法や慣例があるから、一度それを心得て仕舞へば、後は決して分り悪いものではない。世には俳句を分り易くしようとして、元來一字々々靈活に働いて居らねばならぬものを、だら〳〵と不手際に綴つたものがある。從つて事柄は誰にも解るが、美趣と言ふものが毫も無い。享保以後に生じた月並派の俳句は即ち之れである。又『や』とか『かな』とか言ふ切字などを是非入れねばならぬものと心得、其の爲それに束縛された弊も尠少では無かつた。畢竟俳句は一字々々靈活に働いて、且つ其の着想が十分に發揮されねばならぬ。本課に撰ばれた作品は、句の風格から言つても、作者の人柄から言つても、どれも一時代を劃した名句のみで有るから、單獨に句の趣を味はせる計りで無く、作者や時代等にも一通り觸れて、俳句の成立や沿革の大體を呑込ませる用意が肝要である。尙其の際適宜既習の一茶の句や千代の句と連絡させて取扱ふべきは勿論である。

指導形態

指導上の認識點

1　七つの俳句を通じて其處に表現されて居る日本的情調・自然美の種々相を味到させ、俳句が世界最短の詩形である事や素朴簡易の民

族性に適合せる點等を知らせて國民性の美化を圖る。

2　一茶や千代の句と連關させ、鬼貫・芭蕉・蕪村等、我が代表的の俳人に就いて最初多少の補説は勿論必要であるが、最初は散文同樣ぶつ附けに讀ませ、讀解の程合を見計つて俳句文學の大體を知らせる心構が肝要である。

3　讀調子は初五で切り、あと(七)(五)を續けて讀む樣指導して欲しい。

4　本課は補充説話も加へて大本二時間位で指導を終る樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽題目の出所を確め作品中の一部を取つて題目とする新しい樣式に注意させる。

2　全課の視寫。
▽先づ讀ませて一句づゝ一行置きに視寫させる。

3　視寫した句を反覆讀吟させる。

▽ゆつくり時間を與へて。

4　讀後の第一印象を話させる。
▽紙片を配付して書かせて見るのも面白い。

5　不明の箇所を質問させる。
▽句の要所は此方から指摘して確める。

行水　名月　夜もすがら　とまりけり
山路來て　ゆかし　すみれ草　ひねもす
のたり　さみだれ

6　指名讀。
▽一句づゝ、人を代へて。

7　範讀。
▽初五で息を切り、下の(五)(七)を一息に續けて讀む。

8　話合。
▽讀後の感想を中心に。

9　一句宛句意を摑ませて見る。
▽適否の判斷は後廻しにして。

10　低音讀。
▽一句づゝ反覆讀誦させる。

第二・三次指導

1　全課の聽寫。
▽一句づゝ、一行あきに。

2　會讀。
▽グループに分れ、一句づゝ吟味させる。

3　指名讀。
▽中・劣生を主として。

4　詩情の横溢した語句を拾はせる。

行水のすて所なし……(蟲の聲)
池をめぐりて……(名　月)
枯れ枝に鳥……(秋の暮)
何やらゆかし……(すみれ草)
ひねもすのたり……(春の海)
月は東に日は西に……(菜の花)
大河を前に……(さみだれ)

5　話合。
▽一茶や千代と連繫し、鬼貫・芭蕉・蕪村の俳句文學に於ける位置や經歷の大體に就いて。

6　輪讀。
▽一句づゝ、座席順に。

7　詩形の吟味。
▽(五)(七)(五)の旋律・(や)(かな)の切字等。

8　全課の視寫・聽寫。

9　句意を摑んで散文化させる。
▽讀合を兼ねて句意を確める。

10　詩境を繪畫化させる。
▽特に蕪村の句を主として。

11　演習。
▽既習の俳句を作例とし、詩心を唆つて試作させる。

12　全課の暗誦・暗寫。

13　文字語句の書取・應用練習。

14　テスト。

テスト問題

一、次の空所に適當の字を入れなさい。

1　名月や○をめぐりて○○○がら

2　山路來て○○○ゆかし○○○草

3　さみだれや○○を前に家○○

二、次の句を散文に直しなさい。

行水のすて所なし蟲の聲

春の海ひねもすのたりのたりかな

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

三、次の語句を解釋しなさい。

1　行水　　2　夜もすがら　　3　ひねもす

4　何やらゆかし。　　5　さみだれ

第二十一　十和田紀行

吉野を先陣に瀬戸内海・阿蘇・中部山岳と次々に頭を擡へた國立公園に、今又十和田湖の絢爛たる紀行文が掲げられた。奥入瀬の谿谷を經て十和田湖畔に至る絶景を知らずして風光に惠まれた日本を語るべからずとさへ言はれた程の景勝十和田で、新緑に良し紅葉に良し、花期は又格別、冬のスキーにも適し、温泉にも惠まれた同地方は、全く世界的の大公園と讃歎される。

乘合自動車の案内嬢を配して新時代の景物を添へ、主要な景觀の急所々々を捉へて、飽くを知らぬ筆致である。まだ同地に杖を曳いた事の無い人は、今直ぐにも其の仙境を探り度く成るで有らう。作者の筆はそれ程魅力的で、推賞惜く能はず　言ふ熱愛に燃盛つて居る。

地理學的には大雨にも氾濫せぬと言ふ奥入瀬川の特異性や、八甲田山系の火山脈に依る古代異變の跡が奇巖怪石を突出させて居る事等、此の地方獨特の郷土色も濃厚で遺憾が無い。

挿畫の印象と其の説明

百三十二頁の寫眞版は、奥入瀬川沿ひの十和田本道から清流を覗かせた夏向涼しい幽邃の風光である。岸を洗ひ岩を嚙む奥入瀬の渓流は、原始林を洩れる陽光に反映して銀白に輝き、水際の綠樹が風に戰ぐ樣は、涼風自から肌に迫るものがある。

百三十六頁は景勝中の景勝と言はれる中湖の景觀である。中湖は御倉半島と中山半島に擁せられて灣を成し、中山半島の樓現崎から見下すと、湖面は飽くまで澄んで碧水を湛へ、對岸に御倉半島の御倉山が望まれ、其の屋根越に大疊石・小疊石、さては名も床しい青撫山が遠望される。背を流れる汗も何時の間にか忘れ、幽邃境の飽く無き眺に恍惚として思はず時を過して仕舞ふ。

文字語句

新出文字

佳　透（トウ）

讀替文字

豐（トヨタカ）（新出は卷六、ホウ）　衖（ガイ）（新出は卷九、ガイ『重出』）　茂（モ）（新出は卷九、シゲリ）

語句と其の解說

十和田（トワダ）　青森縣の南部、奥羽山脈中に在る湖で、湖岸の一部は秋田縣に屬して居る。海拔四〇一米、深度は中の海の一部で四〇〇米に達して居る。湖の周圍には四五百米の切立つた急斜面を湖水に向けた山續きがあり、其の一部が低く成つて、其處から奥入瀨(オイラセ)川を吐出し、青森縣の東南部を貫流して太平洋に入つて居る。此の湖は風景の幽邃な事と、鱒の養殖が行はれて成功を示して居る事で知られて居る。十和田湖はホマーテ型の一大火山の頂上に在る大きなカルデラである。然も田澤湖の樣な單調なものでは無く、二重式であり其の第二次火山はカルデラの南方に偏して噴出したので、

湖岸に附着して半島の形を取るに至つたのである。周圍の山は湖水に向つて急峻な傾斜を成して下り、鬱蒼たる密林の箇所が多いから、深山幽邃の趣を遺憾なく具へて居る。十和田は東北地方に於ける國立公園として知られて居る。十和田國立公園は本州の北端に在つて我が國湖沼美の王座を占める十和田湖と北に聳える八甲田山と其の八峰、そして此處から流れる奥入瀨溪流を中心とする山岳・湖沼・森林・溪谷一帶の景勝地域四七九平方粁がそれである。中心を成す十和田湖は面積約六〇平方粁に及び、南方御倉・中山の兩半島が突出し、其の他の部分も湖面から約四百米程度の巒峰が四周し、其の中御子岳・御花部山・白地山等は一千米に達し、十和田湖を大觀する絶好の地點と成つて居る。然し十和田湖の眞價は其の奇趣極り無い湖岸の勝で、就中御倉半島と中山半島の風致は蓋し十和田勝景の壓卷である。此の地に遊ぶものは湖尻子ノ口から湖南休屋へ此の兩半島の沿岸を舟遊する便があるが、深度四〇〇米と言ふ此の湖特有の濃藍色の湖面を滑りつゝ、或は三〇〇米を超える絶壁を仰ぎ、或は鬱蒼たる原始林を戴く奇岩の間を縫ふ展望は眞に絶讃に値する。十和田の風景美を折半すると言はれる奥入瀨の溪流は幽邃玄妙で、殊に景色の優れた部分は湖尻子ノ口から下

江入の鳥半山中

流燒山に至る約一四粁、此の間激流・碧淵・瀑布・岩石・樹木の奇を極め、全く天下の絶勝である。特に此の渓流は古來洪水に禍され無かつた結果、河中の小さな飛石の樣な島にも悉く樹木・苔・羊齒の類が密生して居る。蔦温泉は燒山から約四粁の地點に在る。此の附近の密林中には蔦沼・月沼・鏡沼・長沼・瓢箪沼・赤沼等の沼があり、幽邃な風致を添へて居る。又十和田に遊ぶものは今尙活動を續ける八甲田群峰の雄大な活火山岳に杖を曳くべきである。此の公園に遊んで特に感じる事は樹木の美しさで、取わけ落葉闊葉樹の多い結果は、秋の紅葉の美に於て一層優れて居る。

十和田行（トワダユキ）　十和田湖の探勝路は幾つもある。其の主なるものを擧げると、(1)東北本線古間木（フルマキ）驛から十和田鐵道で三本木に至り、それより自動車で奥入瀬渓流美を探勝し乍ら燒山を經て湖畔（東北岸）の子ノ口に出る線。三本木・子ノ口間（三六粁）。(2)東北本線三戸驛から自動車で湖畔（東岸）の宇樽部に出る線。(3)花輪線毛馬内驛から省營バス十和田線で大湯温泉を經て湖畔（南岸）の生出に出る線。(4)黑石線の終點黑石驛から自動車で淺瀬石川に沿ひ、板留・温川兩温泉等を經て湖の西北岸瀧ノ澤に出る線。(5)青森市から省營バス十和田線で酸ケ湯・猿倉・谷地・蔦諸温泉を經て燒山に至り、それより奥入瀬川に沿うて湖岸の子ノ口に至る線等種々あるが、(1)の行程が由來十和田探勝の表口とされ、諸行路中の第一に擧げられて居る。本課は(5)の青森から入る行程に依つてある。

八甲田山（ハッカウダサン）　又ヤカウダサンとも言ふ。青森縣中部、東津輕郡と上北郡の境上に噴起する那須火山帶の火山彙。田茂萢（ヤツ）嶽（一、三二四米）赤倉嶽（一、五四八米）井戸嶽（一、五五〇米）前嶽（一、二五二米）大嶽・酸ケ湯嶽（一、五八五米）小嶽（一、四七六米）高田大嶽（一、五五一米）石倉嶽

（一、二四〇米）等の箇々に獨立した八峰の休火山群から成る。赤倉嶽は中央火口丘、最も高きは酸ケ湯嶽で、之には火口存し其直徑一四〇米、深さ五〇米を有する。山頂から下つた所に爆裂火口の跡と稱せられる小湖がある。酸ケ湯温泉附近には硫氣孔あり、直徑五〇米の圓形の窪地と成つて二箇存する。其の一は熱湯を湛へ大湯又は地獄沼と呼ばれる。酸ケ湯・猿倉・田代等の温泉も山中に分布。東北帝大の高山植物研究所が置かれる。北麓には明治三十五年一月二十三日青森歩兵聯隊の約一箇大隊が雪中行軍を行ひ吹雪に襲はれ、十二名を殘して凍死した記念碑がある。登路には青森口と蔦口があり、酸ケ湯から頂上迄約四粁、往復三時間半を要し、山頂の眺望頗る雄大。十和田國立公園地域の北部を占める。

沿道所々に温泉があつた（エンダウショショ　ワンセン）　青森側から下湯・酸ケ湯・猿倉・谷地・蔦など。

燒山（ヤケヤマ）　八甲田山（大嶽）の麓を廻り、谷地・蔦の温泉地を通つて十和田湖に向ふ街路と、東北本線古間木（フルマキ）驛から出る十和田鐵道の線路との交叉點にある。道は線路に沿ひ古間木驛から三本木町を經て自動車は坦々たる道路を馳驅する。燒山橋に來ると愈々奥入瀬渓谷の絶勝に近づいた事に心付く。兩岸の樹木鬱蒼として渓流のせゝらぎに和する所、道は渓に沿うて十和田湖へ。一は別れて葛温泉へ。

奥入瀬の渓流（オイラセ　ケイリウ）　奥入瀬の渓谷は十和田古間木口燒山橋から湖畔に至る一四粁の渓谷をいふ。奥入瀬川は十和田湖の東岸から出る自然の排水路で、普通の渓流と異り、滿々たる水が溢れん計りに壯快に流れて居る。谷川と言へば深い谷底を僅か計りの水が岩を嚙んで淙々と流れて居るのを想像する。然し奥入瀬はそれらと類を異にし、淺い小さな谷であり乍ら滿々として水の溢れて居る上に、闊葉樹林が厚く天日を蔽うて居る所は獨特の風景であつて、他に類を求められない。田澤湖から

溢れて出る湯尻（カタジリ）川も稍其の趣があるが、規模の雄大な點に於ては奥入瀬には及ばない。奥入瀬は全く闊葉樹林内に溢れる水であつて、それが瀧となり早瀬と化しつゝ、約一四粁の間、絶景の連續を見せて居る。蓋し奥入瀬の溪谷美は十和田風光の持つ大なる强味と言ふべく、其の清純な溪流と紅葉の美觀は天下一品である。

絶壁（ゼツペキ）　極めてけはしいがけ。きりきし。たてかべ。　**密生**（ミツセイ）　隙間もなく密集して生えること。幾重にも重つて生えること。　**女車掌**（ヂヨシヤシヤウ）　サービスガールである。乘り降りの世話もすれば案内役も務める。練習の結果でもあらうが、多くは頗る雄辯である。自動車は青森市からする十和田線省營バス。　**濁**（ニゴ）**つたことがない**　十和田湖の特色。（別項參照）　**瀨**（セ）　川の淺くて人が徒わたり等する所。淵の對。又水流の急な所。はやせ。　**淵**（フチ）　水の深く澱んで居る所。瀨の對。　**瀧**（タキ）　銚子瀧其の他を言ふ。奥入瀬の溪谷は銚子瀧以降原始林に覆はれた幽邃な幾多の勝地を作り、其の兩岸には懸崖瀉下する瀑布を見る。新綠によく紅葉によく、奥入瀬の溪流は近時著しく顯れ、四時來訪者の絶える事が無い。　**俗**（ゾク）**に九**（クジウク）**十九**（タウ）**島**　九十九は數が多いこと。實數では無い。湖中には惠比壽・大黑・兜・鎧・蓬萊等大小數多の島々が有つて、鳥瞰すると碁石を撒いた樣であるが、九十九は其の多きを形容して言つた俗說である。　**水位**（スヰヰ）**の變化**（ヘンクワ）**がありません**　之も十和田の特色（別項參照）湖の水位年中變化約四〇糎、一月に低く五月の融雪期に上昇し、八月の暴風季節に最高に達する。表面水溫（之も十和田の特色）瀨岸に於て年平均攝氏九度一分、最高二七度五分（八月）冬季は沿岸氷を結ぶ。中部は表面夏季二三度、冬季は風波の爲結氷せず。深層は四時四度五分、中湖の深層（一〇〇米以深）には攝氏五度の恒溫層がある。　**天壽**（テンジユ）　自然に定つて居る壽命。

天然の壽命。天年。定命。　**ぶな**　ソバグルミとも言ふ。北海道・本州・九州の山地に自生する落葉喬木。高さ二五米内外に達する。葉は短柄、互生、廣卵形、鋭頭、波狀齒牙緣、長さ六糎乃至十糎、側脈は九對又は十對あつて、兩面脈上及び葉柄には淡褐色の毛茸を生ずる。花は單性、雌雄同株、雄花は柔荑（ジユウテイ）狀を爲して葉腋に垂下し、雌花は稍頭に二箇乃至三箇聚り總苞に包まれ、五月頃開花。材は器具・薪炭料・種子は食用に供し、又油を搾る。　**しだ**　ウラジロ（裏白）の異名。種類頗る多くコケシノブ科の如き小さな草木から、マルハチ・ヘゴの如き巨大な喬木と成る木生羊齒に至る迄、形狀・大小には種々あるが、一般に形態よく發達して明瞭な根・莖・葉の三器官を具へ、且つ稚葉は渦卷狀を爲すか、或は鈎狀に屈曲する。　**佳境**（カキヤウ）　良き境地。面白いと思ふ境涯。此處のは好い眺め。　**瀧見街道**（タキミガイダウ）　全幅の水が飛躍する銚子ノ瀧を見て行けば、兩岸は懸崖と成り、其の上から白布を懸けた樣に淙々と落下する瀧は、兩岸を合せて十數條を數へ、アルプス風景の一要素として推賞される彼の氷河削剝の懸谷を彷彿せしめるものがある。それからは或は深淵と成り或は激湍と化し、或は幽谷の趣を見せ、或は洋々たる江河の姿と成つて、遂に燒山橋に至り絶景は終る。此處はそれを逆に遡るのである。　**子**（ネ）**の口**（クチ）　十和田の疏通口（ハケグチ）である。十和田湖の水は東岸の子ノ口から流れ出して奥入瀬川と成り、美觀極り無き溪谷の間を縫うて燒山に出で、坂藤・六戸・百石を經て太平洋に入る。此の排水口の下には銚子ノ瀧がある爲、古來一尾の魚も湖には居なかつた。然るに明治十七年以來和井内貞行（秋田縣鹿角郡毛馬内の人）夫妻の獻身的努力に依つて、今は潑剌たる幾多の魚類を見るに至り、特に姫鱒の如きは我が國有數の產地と成り、湖畔には漁

業を營む樂落も發生した。〝子の口の大瀧〟は卽ち此の銚子ノ瀧を言つたものである。　**遊覽船**　此の遊覽船はモーターボートである。一躍世界の勝地として現れた十和田湖は、其の水の美しいこと、湖畔を繞る原始林の四時趣を變へて人を迎へる外、殊に南岸の半島近くには幾多の岩嶼翠松を頂くあり、眞に絶勝の辭に反しない。子ノ口から時餘モーターボートでそれらの名勝は遺憾なく眺められる。

御倉半島　南岸に突出する牛島。其の西に突出する中山半島との間に中ノ湖を抱く。十和田湖の湖岸を見ると、凡そ北半分には著しい出入が無いが、南岸には御倉半島・中山半島が突出て居て、大きな灣が三つ出來て居る。東の灣を外湖（ソトノウミ）中央を中湖（ナカノウミ）西を內湖（ウチノウミ）と呼んで居る。　**水の色**　フオレル液（フオレル博士の標準液）第三號に當る。（別項參照）。

透明　すきとほること。通して物を見得ること。くもりのないこと。すんで居ること。　**清澄**　清らかにすんで居ること。すきとほる樣にきれいに澄んで居ること。　**中湖**　牛の角の樣に突き出た兩半島の間に抱かれた灣。御倉・中山の兩半島は第一次カルデラの中に噴出した中央火口丘であつて、其の中間に在る中湖は第二次カルデラである。中湖の中央は湖中の最深部で、四〇〇米の深度を示す。兩半島の中湖に向ふ側は高い崖を成して水中に下り、島は殆ど無い。御島半島の先端には御倉山といふ圓頂丘が附着して居るが、之は第二次中央火口丘であつて、恐らく中湖陷落以後の噴出にかゝるものので有らうといふ。　**中山半島**　御倉半島の西に突き出た牛の角の一つ。形細長く、數多の小さな島が附屬して居て、小舟に乘り其の間を廻遊するに適して居る。　**休屋**　休憩所。南岸にある。湖尻の子ノ口から湖南の此の休屋へ、御倉・中山の兩半島の沿岸を舟遊する便がある。　**島あり岬あり**

中山半島の西側御前ヶ浦に臨む所、大小の島々が趣深く浮んで居る。其の附近に一小灣が有つて自籠の入江といふ。巨巖直立幾十米、粗大な柱狀節理を示す安山岩は、直下直に深淵に臨んで風景絶佳、蓋し湖中第一の眺めであらう。十和田觀光の急所は、發荷峠から九〇三高地に至る間の大觀と、中山半島の船遊と、奥入瀨の溪谷美との三つである。これらは十和田湖風景の三大要素であつて、其の一を缺いでも完全なものとは言へない。

指導精神

本課で國立公園が五つ頭を擡へる事に成る。卽ち近畿地方では第一の吉野山が吉野熊野國立公園、中國地方は第九の瀨戸內海が瀨戸內海國立公園、北海道・樺太地方では第十四北海道の阿寒湖を中心とした地域が阿寒國立公園、北陸・信越方面では第十九の燕岳が中部山岳國立公園、本課の十和田が十和田國立公園として東北地方を代表して居る。風光日本の全貌は之で大體浮彫される譯である。

地域の中心を成す十和田湖は、夙に景勝を以て知られ、其の名は世界的と成つて居る。十和田は八甲田山の南方、太平洋斜面に屬する奥入瀨河の流域にある。秋田縣鹿角郡七瀧村と青森縣上北郡法奥澤村とに跨つて居るが、大部分は青森縣に屬して居る。湖面の海拔四〇一米、面積五九・五八平方粁で、本邦湖水中第十五位に相當する。湖岸線四六粁、最大深度四〇〇米（中の湖最も深く、他は凡そ八〇米前後である）田澤湖・支笏湖に亞ぎ、我が國第三位の深度に在る。八甲田火山彙が南方に陷落した大火山性盆地に水を湛へたもので、周壁は平均七〇〇米、御花部山に於て一、〇一一米に達する。陷落後南壁に輝石安山岩の中央火山噴出

が有り、多量の浮石を噴出し、其の後中央部が陥落して大火口を頂くに至つた。此の火口壁は西北に向ひ、二半島（御倉半島及中山半島）を東北に突出させ、湖の東南半を三部に分つ。内の湖（西部）中の湖（中部）外の湖（東部）がそれである。湖面は大體方形であるが、南部は稍複雜。南半島の延長部に御門岩があるが、之は御倉山（東半島）と共に中央火山噴出時代最後生成の圓頂丘であらうと言ふ。湖は注入河に乏しく、主に地下水で涵養され、東端子の口から排水される。（奥入瀬川）水量豐富、下流に瀑がある。（銚子瀧）湖の水位年中變化約四〇糎、一月に低く五月の融雪期に上昇し、八月の暴風季節に最高に達する。可視限界最大二一米、水色は藍色でフォーレル氏の標準液第三號に相當する。浮游生物饒産、水産養殖に適し、夙に北海道の支笏湖から姫鱒を移し人工孵化事業及漁業が盛である。西半島の密林の低丘岩嶼・東半島の熔岩絶壁は水際迄樹木を生じ、蘚苔蒸して藍色の水面に映ずる景趣は、落葉闊葉樹林中を流れる奥入瀬川の景觀と共に我が國風景の極致で他に求め得ない。西部の湖畔平地も雜花咲亂れ、孤立せる漁家と共に特殊の景趣がある。湖中には惠比壽・大黑・兜・鎧・蓬萊等大小數多の島々が有つて趣を添へ、湖畔の風色と相俟つて十和田の雄大な絶景を形作る。一帶は八甲田山と共に十和田國立公園の主部を爲し、湖畔には相當の施設が有つて湖上の遊覽に適し、新緑・紅葉の季節には持に杖を曳く者が多い。

本課の取扱に際し内容上指導者の留意すべきは、此の湖水が景勝に秀でた計りで無く、學問的にも貴重な存在として湖沼學者の間に喜ばれて居る點に在る。即ち

1　湖岸線が單調であること

2　湖岸が絶壁であること、

3　水深が大であること。

4　水位の變化が極めて少いこと。

5　水温が普通と異つて居ること。

等の諸點は此の湖水が他の湖沼と異る特色として、學者の指摘する顯著なものである。

十和田湖は周圍が總て山で圍まれ、湖岸線は概して頗る單調であるが、唯東南岸だけは二つの半島が長く突出して居る爲、稍複雜と成つて居る。東から出て居るのは御倉半島、西から突出たのは中山半島で、北の兩半島に依つて湖は東湖（又外湖）中湖・西湖（又内湖）に分れて居る。水深は兩半島に挾まれた中湖が一番深くて、其の最深部は四〇〇米に及んで居る。深さに於ては秋田縣の田澤湖・北海道の支笏湖を除くと、我が國の湖沼中之に勝るものは無い。湖岸が絶壁を爲すのは、此の湖が複雜な形の二重式火山性陥落盆地（御倉・中山の兩半島は第一次の陥落盆地の中に噴出した火口丘であり、先端の圓頂丘御倉山は第二次中央火口丘であつて、恐らく中湖陥落以後に噴出したもので有らうと言ふ）で有るからである。

次に水位であるが、之も此の湖の特色の一つである。十和田は陥落盆地に出來た火口湖であるから、周圍に火山岩が多く、且つ絶壁が多い。受水區域は他の湖に比べて極めて小さく。周圍の山の湖に向つた斜面に限られて居る。從つて湖に注ぐ川としては取立てゝ言ふものも無い。湖水は東岸から奥入瀬川と成つて流出して居るが、一年を通じて水位の變化は極めて少く、水位の高い五月と最低の一月との差は僅に四〇糎に過ぎない。之は受水區域が狹いのと（火口湖である爲）其の全部が森林に成つて居て能く水量を調節するが故である。深度の深い湖沼では最深層の水温は四度、年中變らぬのが普通で、夏は上層程温度が高く、冬は全

く其の反對である。然るに此の十和田湖は最深層が五度で普通より一度高く、四度の層は其の上に在る。然も此の兩層は季節に依つて厚さは變るが溫度は變らない。（恒溫層）此の不思議な現象は、最深層の水が固形物を多量に含んで居る故に起るのであらうと言はれて居る。

十和田湖の勝は景勝の奇に非ずして湖水の色に在る。其の澄んだ物凄い樣な異樣の光を發する湖水が人を魅するのだと或消息通は言つて居る。此の景勝の十和田をして更に一段の光彩を添へるものは、和井內（貞行）夫妻の獻身的な養魚美談である。十和田湖の水は東岸の子の口から流出して奧入瀨川と成り、終に太平洋に流れ込むのであるが、子の口から十餘町下つた所に高さ約八米の銚子瀧がある爲、魚類の湖中に溯る事が出來ない。其の上昔から魚と云ふ言葉を口にしても忽ち湖神の怒に觸れると怖ぢ恐れて居た關係から魚を放す人も無く、爲に魚類は一匹も棲んで居なかつたのである。然るに今や十和田湖は日光の中禪寺と並び稱せられる鱒の養殖池と成り、十和田の姫鱒（又は和井內鱒）の名が遠く海外に迄聞える樣に成つて居る。それは全く和井內夫妻の奮鬪努力・苦心經營の賜で、永久不滅の美談である。適宜附說の要があらう。

本課は雄勁暢達の文、景あり情あり趣あり、然も實感味豊かに身覩しく實境・實景に臨んで居るかに思はせられる。殊に女車掌の口上を配した邊り、如何にも能く景色を捉へ氣分を表して居る。文壇的の文章と違つて自然の儘で然も力强い。紀行文の範例としても大きな存在であらねばならぬ。

指導形態

指導上の認識點

1　本課指標は自然美に秀でた十和田一帶の景觀を紙上に鑑賞させ、自然愛好の國民的性情を陶冶するにある。

2　歩々進むに連れて變化する展開描寫の絶妙さを味はせ、既習の紀行文と關聯させつゝ表現態度を養ふ事も本課に於ける着眼の一つである。

3　尙既習の吉野・瀨戸內海・阿寒・燕（中部山岳）等と連絡させ、此の地一帶が國立公園として世界的に顯著である事を知らせ、祖國愛護の性情を培ふ事も忘れてはならぬ。

5　本課は大體四時間見當で指導を終る樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽紀行の意味を確め地圖を示して位置や地域の大體を話合ふ。

2　全課の通課。
▽第一印象其の他を記帳させる。

3　コースの大體を摑ませる。
▽地圖と照し合はせて。

4　新出文字の指導。
▽字書の引方を輔導して其の都度索引させる。
　豐　佳　街　透　茂

5　再讀させて不明の箇所を摘出させる。

6　難語句の指導。
▽質問を待つて隨所に指導する。
　郊外　展望　高原美　心をとらへる
　曲折　沿道　溪流　絶壁　密生　女車掌
　瀨　淵　九十九島　水位　太古其のまゝ
　原始林　天壽を全うした　ぶなの密林
　下草のしだ　佳境　街道　うなづく
　眼界　遊覽船　藍　透明　淸澄　繁茂
　自然の姿　風光　多彩　火口壁　あらは
　水深　神祕の淵　入江

7　地理的個有名詞の取扱。
▽地圖や寫眞・繪葉書等を利用して入念に指導する。
　靑森縣　十和田行　八甲田山　靑森平野
　陸奥灣　燒山　奧入瀨　子の口　御倉半
　島　中湖　金屛風　五色岩　中山半島
　休屋

8　默讀。

▽文の觀點に注意させて。

9 指名讀。

▽適當に句切つて、何人かに。

10 挿畫と文とを照合させる。

▽何處を寫眞にしたものか、文に何う出て居るか等。

11 低音讀。

▽一帶の景觀を想像に描かせて。

12 ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1 輪讀。

▽適宜に句切つて、座席順に。

2 範讀。

▽文の要所に注意させて。

3 自由音讀。

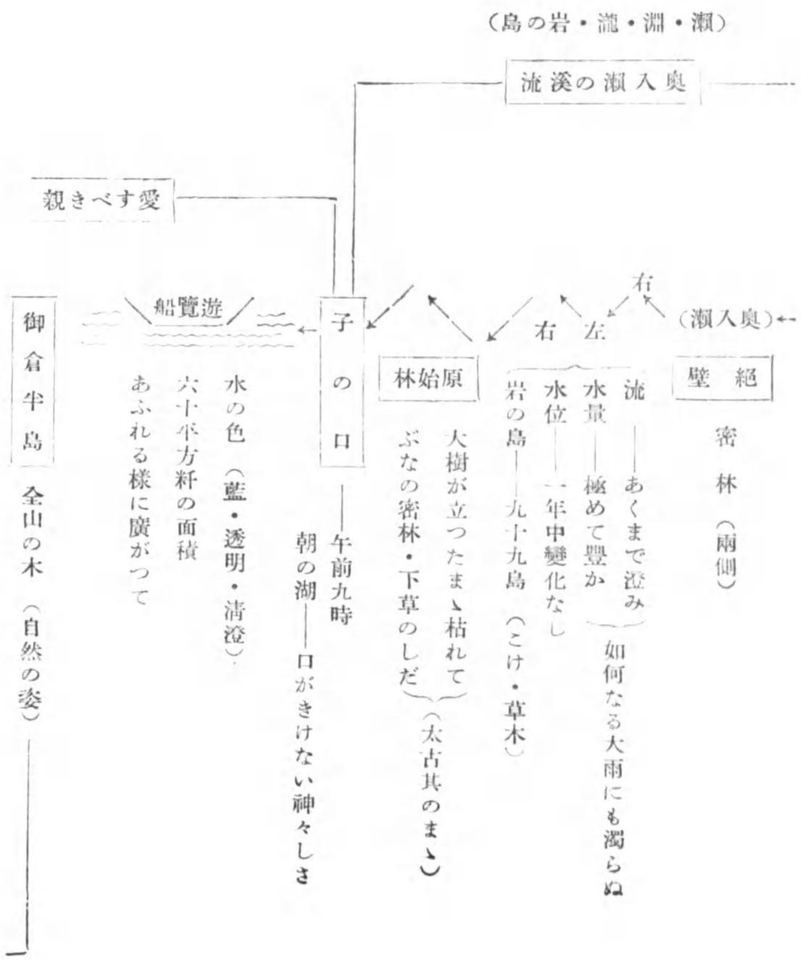
▽再度不明の箇所は質問させる。

4 指名讀。

▽出來の良い兒童に指名して

5 逐次研究。

▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。



6 グループ學習。
▽グループに分れ配付した文圖とノートを比較對照させて研究させる。

7 文意の所在を確める。
▽表現面を辿り最後の〝愛すべき親しむべき風光〟に至つて成程と頷かせる。

8 話合。
▽前項の文意や感想を中心に。

9 默讀。

光風きべむし

中湖
- 風光一變
- 大岩石（高さ二百米）
- 金屏風
- 五色岩
- 多彩な火口壁
- 水深四百米（すごい程美しい）

休屋
- 中山半島の西（湖岸）
- 島あり
- 岬あり
- 入江もあつて
- 釣するによく
- 遊ぶにもよい

神秘の淵

▽文の觀點や紀行の絶妙さを味はせて。

10 低音讀。
▽感興の波に乘せ文の滋味に浸らせて。

11 ノートを纒めて提出させる。

第三次指導

1 指名讀。
▽中・劣生を主として。

2 文意の所在や文の觀點を言はせて見る。

▽文の中心は何處か・既習の紀行文と比較して何うか等。

青森驛
- （車動自）
- （道の原高）
- 八甲田
- 高原美
- 所々に溫泉

焼山（午前八時）
- 奥入瀬溪流
- 絶壁
- 瀬・淵・滝・岩島
- 原始林

子の口（午前九時）
- 自動車
- 十和田湖
- 船
- 多彩な火口壁
- すごい程美しい

休屋

4 話方練習。
▽觸發した旅行氣分を實感的に。

3 樣相の吟味。
▽文脈を辿つて展開描寫の樣式を吟味させる。

5　學習事項の整理。
▽特に形式美に着目して。
6　補充談話。
▽我が國立公園と指定地の大體に就いて。
7　朗讀練習。
8　視寫・聽寫練習。
▽景觀の特に勝れた箇所を選んで。
9　新出文字の書取。
10　語句の應用練習。
11　テスト。

テスト問題

一、次の箇所を聽寫させる。

1　進むに從つて佳境は盡きない。溪流の左岸の絶壁に瀧を見、又右岸にそれを望む。どれもこれも、見事なものばかりである。

2　手の口の大瀧を過ぎると、やがて眼界が開けて、前方に十和田の水面が現れた。まだ九時である。始めて下り立つた朝の湖は、殆ど口をきく氣もしない程、靜かで神々しい。

3　太古其のまゝの原始林には、所々天壽を全うした大樹が、立つたまゝ枯れてゐるのがあり、溪流に横たはつてゐるのがある。

二、次の語句を解釋しなさい。

1　男性的　2　原始林　3　高原美　4　密林　5　太古
6　繁茂　7　清澄　8　透明　9　神祕の淵　10　自然の委

三、次の文にあやまちがあつたら正しなさい。

1　校外を出ると、自働車は八甲田山を目ざして辿んだ。

2　樹木の蜜生する谷低の道を、流れを右にし、又左にして返むのだ。

3　しかし、半島を近つて中湖を出ると、風光が一變した。

第二十二　歐洲航路

前卷から繼續して居た世界一周の旅は、本課に至つて愈々地中海へと歩を進めた。日本からヨーロッパに達する航路は、殆ど地球を半轉する程長い旅で、其の間實に無慮一ヶ月餘、各地を見聞するにも各種各樣の思ひ出が錯綜するにも拘らず、作者は巧に其の要點を摑んで次から次へと轉換する手腕は、さながら映畫の實寫を見る樣で、髣髴として珍奇の景觀が浮び出るのを覺える。卽ち映畫なら撮影技師の手腕に依つて場面の轉換が巧に安排される樣に、本課の作者も種々の角度から之を眺め之を取捨して、是丈の長篇物を息をもつかせず一氣に讀了させて仕舞ふ。然も單なる異鄕の印象記のみで無く、船の進むに連れ刻々と移り變る氣象の變化や國際的關係等にも話題を捉へ、イギリスの殖民地政策や又はカイロの歷史等にも言及し、蘊蓄を傾け興味津々として盡くる所を知らぬ有樣である。

全文が書簡の形式丈に讀者にも親しく觸れ、あゝ何んなにか愉快であらう、珍奇であらうと想像もし、我等も亦嘗ては世に出で、世界歷遊の出來る樣な身分に成つて見度いものだと、遊心勃々、小さき胸を躍らす事で有らう。

挿畫の印象と其の說明

百三十八・九頁の寫眞版は浦東側から黃浦江を挾んで上海市街を望んだ景觀である。此の邊は上海事變に

も今次の事變にも殆ど其の儘に殘されて居る。尤も此の寫眞はずつと以前に撮影されたものらしく、現在は此の寫眞に見える外に高層建築が增築されて居る。向つて左から主要な建物を拾ひ上げると、左端に高い塔の見える高層建築が上海稅關、其の右の少し低い建物が工部局、住友・三井兩銀行支店等が肩を並べ、次に高い尖塔の見える十二階建がカセイホテルである。事變當初支那の飛行機が爆彈を落して逃走した時此のホテルに大損害を與へ、支那人や西洋人を多數殺したので全世界に有名と成つたホテルである。之と隣接した左側の少し低い建物がパレスホテル、右方海岸の建物が横濱正金銀行支店、それから百三十八頁に移つて三四階建がずらりと立並び、英國領事館・中國郵便局・右端の海岸に見える森が公家花園と稱する公園。此の寫眞には見えないが、之から右へ橋を渡ると米國領事館と日本領事館とが直ぐ近くに在る。川を距てゝ此方に見えるのは浦東で、突き出た岬の尖端は隆家嘴である。

百四十一頁は九龍から海を距てゝ香港ウィクトリアの市街を眺めた景色で、大體の地形は我が函館に似通つたものがある。海岸からウィクトリア峯（紅香爐山）の山腹にかけ、堂々たる白壁の洋館が綠樹の間に櫛比して頗る美觀を呈して居る。山上にケーブルカーや電軍を通じて坂路の交通を便にし、港には內外の船舶が常に輻輳して殷賑を極める。此の地が英領であり其の東洋に於ける根據地であるのは周知の事であらう。

百四十三頁の寫眞版はシンガポールのプレイン公園で、北から南を眺めたものである。海岸に面した高い塔はシンガポールの市廳舍、其の北寄には椰子其の他の熱帶植物が見える。市廳舍の向ふに總督府其の他の建物があるが、此の寫眞では能く見えない。彎曲した海岸の彼方には郵便局・取引所・天文臺等の大きな建物が見える。

百四十五頁はアデン港を遠望した寫生畫で、本文の「灣とはいへ、見た所はやはり果なき大海原ですが、水は油のやうに滑らかです」の情景を見せたもの。此の地も英國の保護領植民地で天然の要害を成し、紅海の入口を守るに極めて重要な位置に在る。アデンはスエズ運河の開通以來俄かに發展し、今日では歐印間の航路に無くてならぬ給炭所と成り、定期船の主要な寄港地として益々發展する計りである。スエズ運河開通以前は全くの不毛地で、人の住める樣な所では無つた。飲料水に乏しい上に非常な酷暑の爲僅に土民が牧畜をやる位の僻村であつたものが、國際的にも地理的にも重要な役目を果す樣に成り、今日の繁榮を來し今や人口五萬九千と算せられる。

百四十九頁の寫眞版はエジプトの首都カイロの市街を小高い屋上から鳥瞰したものである。建物は總て石造で、中に突兀として鉛筆を削つて立てたやうな塔の見える大きな建物がスルタン・ハサン回教寺院である。カイロには細長い塔と圓頂の屋根を持つた大建築物が彼方にも此方にも見られる。平均氣溫夏は八五度・冬は五八度と言ふ健康に適した常夏の地で、地中海から年中吹寄せる涼風で如何にも凌ぎ易く、さればこそ五千年の昔から開けたエジプト王國の中心を成したのであつた。古代建築も少くないが、又觀光客の爲の電車の便やホテル・商店等の近代樣式建築も相當に多く、殊にカイロ博物館は名高くエジプトやギリシヤ時代の文化を鑑賞するに一日や二日では見盡す事が出來ない。彫刻や工藝品の數實に一萬餘點に及ぶと言はれる。

百五十一頁は世界の一大奇觀でありエジプトの大建造物たるピラミッド（金字塔）及スフィンクス（人面獅身像）である。ギリシヤの史家ヘロドトスの記錄に依ると、クフ王が一基の金字塔を造營する爲には約十萬人の人夫を使役し、每年三ケ月間働かせて十年間を要し、四〇呎の大石約三百三十萬箇を用ひたと言ふ。

此の驚嘆すべき大事業を完成したのは實に西曆紀元前二千八百年の頃である。即ち四千七百三十數年前の事で、然も之がエジプト王朝に於ける歴代王族の陵墓であると言に至つては感慨更に無量である。向つて右の一番大きいのがクフ王の金字塔で底邊が七五五呎・高さ四八一呎、巍然として大空に聳える樣は偉觀である。前面に顔を突出した人面獅身像はギゼーのスフインクスである。スフインクスは元來ギリシヤ神話に於ける女性の怪魔であるが、エジプトに轉じて男性と成り、上半身は人體・下半身は獅子の形を成して居る。此のスフインクスは一九二九年に發掘したもので、高さ二〇米・長さ六〇米の巨像、發掘の際鼻を缺いだのは惜しみても尙餘りが有らう。

百五十二頁の銅像はポートサイドに建てられて居るスエズ運河開鑿の恩人フェルジナンド・レセップス（一八〇五生・一八九四歿）の表彰立像である。一八五六年自ら進んで運河工事を監督し、一八六九年八月此の大業を完成した。彼は實に西洋と東洋を繫ぐ交通上に一新紀元を劃した世界の恩人である。地圖を左手に持ち臺座高く立つて"さあいらつしやい"と言つた恰好をして東洋への道を指差して居る。銅像の臺石に花環が見えるが、之は實物では無く鑄銅製の花環を定着したものである。

文字語句

新出文字

象（ヒキウ）　倉（ソウ）　慰（オダヤカ）　昇（ノボル）　遺（ヤ）

讀替文字

印（イン）（新出は卷十、シルシ）　拭（ヌグフ）（新出は本卷、フク）　握（ニギル）（新出は卷九、ニギル）　海原（ウナバラ）

滑（ナメラカ）（新出は卷八、スベリ）　池（ヤ）（新出は卷三、イケ）　類（タグヒ）（新出は卷九、ルヰ）　陰（カゲ）（新出は本卷、イン）　便（ヨスガ）（新出は卷十、ビン）

語句と其の解說

歐洲航路（オウシウカウロ）　巧妙な逆說法を用ひ、全篇が思出の形に出來て居る。筆者であらう井上監修官の『祖國を出でて』の感觸が能く現れて居る。其の『地中海を航して』の一節に"心に歐洲の地圖を描いて、今自分のゐる處を想像して見る。あの長靴の先のやうな伊太利の南端も過ぎて、晉に聞いたナポリの沖も既に近からう。やがてサルジニア・コルシカの島を過ぎれば、マルセイユはつい鼻の先だ。夢にも見ようと思はなかつた南歐の國々が、今眼にこそ見えね、此の周圍に實在すると思ふと、心は子供のやうにときめき、胸の中がくすぐつたい程躍つてやまぬ。序に日本を心の中に描いてみると、それはやはり地圖として現れた。それも遠い〳〵界に存在する小さい島國であつた。心は日本を既に全く客觀視してゐた"とある。本課も之と全く同一氣分に成つて居る。

地中海（チチウカイ）　歐・阿・亞の三大陸間に挾まれる大內海で、アルプス造山帶一部の陷沒に依り成生したもの。北緯三十度二十分から四十五度五十分、西經五度三十分から東經三十六度。面積二九七萬平方粁、日本海の約三倍に達し、東西三、五二〇粁、南北一、六八〇粁（ヴェネツィア・シドラ灣間）深さ平均一、四三一米、最大深度四、四〇四米。表面平均水溫攝氏一三度三五、表面鹽分三・四八五%大西洋とは幅一四粁乃至二〇粁のジブラルタル海峽で連る。地中海は比較的高緯度に在るが、アフリカ及アラビヤの暑熱乾燥氣候の影響

を受け亞熱帶氣候を呈する。所謂地中海式氣候で天氣晴朗、夏季は高溫寡雨、冬季は溫暖多雨、沿岸には亞熱帶植物が繁茂する。

ナポリ イタリヤの南部、ティレニヤ海岸に位し、此の國屈指の大都市、且つジェノヴァに次ぐ海港。繁盛なカンパニヤ地方の首都。ナポリとは新市の意、古代希臘の植民地として名附けられた。又昔のシシリー王國の首府たりし所。鍋狀陷落に依るナポリ灣の北角に位置し、東方に有名なヴェスヴィオ活火山を望み、風光明媚の地として世界に知られる。

ナポリの景觀

印象 物の面に印した痕の意で、現在直接に物に觸れて得た感情が深く心に銘じて生々せる心の有樣。今日心理學上に於ては右の如き心の狀態を言はずに寧ろ他物の刺戟を受け感覺を生ずるに當り、感覺機官・神經組織等に起る生理的作用を言ふ。

走馬燈 廻燈籠（マハリドウロウ）に同じ。外框には薄い紙を張り、中框には物の形を張り又は畫き、中框だけ廻る樣にした燈籠。かげどうろう。

熱誠 熱烈なまごころ。熱情から發した至誠。

七月二日の午後 暑い夏の旅である事に注意させて欲しい。

楊子江 長江・大江又は單に江とも言ふ。源をチベット高原（青海省）の當拉（タラン）山脈の北麓、海拔四、八〇〇米の雪山に發し中部支那を流れて東支那海に注ぐ世界有數の大河。流程五、一五〇粁、流域面積一九六萬平方粁。支那本部に於ける楊子江流域の面積は一五五萬平方粁。其の人口一億八千萬を超える。アジヤ大

陸第一の內陸水路で、支那第一の商港上海は其の江口附近で江に注ぐ黃浦江の下流に位し、楊子江流域に於ける貿易の大部を司る。其の他鎭江・南京・蕪湖・九江・漢江・岳州・長沙・宜昌・重慶等各一地方の中心市場を爲す。重慶は上海を距る二、六四三粁に在つて尙二千噸級の船を通じ、小汽船は更に叙州・屏山・成都附近に至る。本流の外、岷江・嘉陵江・烏江・洞庭湖・漢水・鄱陽湖等も夫々汽船又は民船を通じ、下流には運河も多く連絡し、二千噸苞の汽船を通ずる所二、七〇〇粁、小汽艇を通ずる所九、一〇〇粁、民船のみを通ずる所一九、五〇〇粁、總計三〇、三〇〇粁に達する大水路網を爲す。四川・湖廣の如き大陸の中心部に在る奥地が外國貿易を爲し、外國文化に沃する事が出來るのは全く此の水路に依る。上海より重慶まで上航一二日で達する。

吳淞 吳淞クリークで知られて居る。黃浦江口に在つて上海の前港を爲し、もと別の開港場であつたが、今は上海市に編入。江口を扼して砲臺があり、又附近には各種の工場があり、尙近年無線電信局も置かれた。『祖國を出で』に〝……船は又進行を始めた。殆ど要領を得ぬ程に廣い楊子江の右岸（船の左舷）に當つて、何時の間にか別境が開けて船は其處へ向ひつゝある。これが黃浦江の長江に注ぐ所であらう。やがて右舷に當つて高い無線電信塔を持つ市街を望見するのは普に聞く吳淞の街であつた。吳淞を過ぎて、當支那の民屋村舍を兩岸緣樹の間に見ながら黃浦江を遡行すること一時間餘、郵船棧橋から約一浬といふ所で×××は錨を下した〟とある。

上海 滬上とも言ふ。江蘇省に在る同國第一の大都會且つ貿易港で又經濟上の首都。楊子江の支流黃浦江に沿ひ、楊子江口から約五〇浬。附近は豐沃な平野で米・棉花・茶・大豆・繭の產が多い。且つ廣大な楊子江流域の門戶を成すので古くから商業盛。宋

の時提舉市舶司（稅關）を置き、元以來縣治と成り、最近の革命後特別市として省政府の管轄外に置く。西暦一八四二年開港場と成り、爾來支那第一の貿易港として常に全貿易額の四〇％以上を獨占。昭和七年の上海事變や今次の事變に我が軍將士が奮戰激闘、現在其の保護の下に在るのは今更言ふ迄もない。

何といふ騷しい町　上海の町は此の一語に盡きて居る。『祖國を出でて』に〝始めて異國に著いた心あはたゞしさ、ランチに乘つても上海のたゝずまひを靜かに眺めるだけの餘裕はない。唯見るものは江上幾千の船と、幾百の埠頭と、江畔に連なる工場倉庫と、それらが互に移動して行く走馬燈の繪。最近南支一帶の暴動に對して、警備もの〳〵しく、米艦・伊艦・佛艦がそれ〴〵部署に就いてゐる中に、旭日旗勇ましき我が驅逐艦の姿も見える。例によつて謹嚴なT君はうや〳〵しく脱帽したが、皆もつりこまれて、暫し敬意を表せずにはゐられなかつた。おゝそれよ、江上に連なる美しき洋館の列――其處にかねて日本郵船會社や日本總領事館や横濱正金銀行や、各國の領事館・會社・銀行などが並んでゐると聞いた、さうして上海の繪葉書などで屢々見たことのある――は今我が眼前に展開して來た。人口二百幾十萬、東洋貿易港の第一と誇る今日の文明大都市の面影を見て、誰かそのかみの滬城を偲ぶであらうぞ。午前十時、郵船棧橋に上陸する。と、今までの美しい幻想的な空想は忽ち破れてしまつた。見よ、埠頭の紛然雜然たる混亂を。其處には色の眞黑な印度人がゐる、白色の歐洲人もゐるが、わけてもけたゝましい叫聲の持主である支那勞働者が氣狂のやうに叫びながら右往左往してゐる。何たる騷がしさ、何たる五月蠅さであらう。思へばこれが孔孟の禮儀を傳へた國であらうか。嘆せんばかりの彼等の叫喚に思はず顔をしかめ耳を掩ひたくな

る。云々〟とある。

租界　專管居留地の俗稱。支那に其の例を見る。佛租界・英租界・共同租界等。

スコール　突然に吹き起る强風。時に依ると旋風の最低氣壓線の中心に起り、かゝる場合には風と共に雨を伴ふことがある。スコールは元來北歐の語であるが、我が國では南洋委任統治領・蘭領印度諸島等で一日一回定時的に降る雨を呼ぶものとして知られて居る。『祖國を出でて』に〝豫定の三時を過ぎても、日ざす香港はまだそれらしい姿を見せない。船客は大方デッキの欄によりながら、船の行手をひたすら凝視して、誰も心を焦らし氣味である。とかくする間に雲の徂徠が何時に似ずあわたゞしいと思ふ間もなく、妖魔のやうな黑雲が空一面に擴がり、海を壓し四面暗憺としてまことにものすごい光景となつた。すると忽ち瀧津瀨のやうな激雨が咫尺を辨ぜぬくらゐ降注ぐ。もう空もなかつた、唯あるものは我が船と、篠突く雨ばかりであつた。人も我も皆額を見合はせて此の變幻倏忽の光景に畏怖し、且つ稱歎した。云々〟とある。

ぱう然　茫然。あつけにとられたさま。ぼんやりしたさまにいふ。惘然。呆然〟

香港　南支那廣東灣口に在る英領の島。廣東の東南一七〇粁。本島の面積八十三平方粁、其の對岸九龍半島の小地域八平方粁、合計九十一平方粁は英領。九龍半島の全部、南丫島（また大嶼・ランタオともいふ）ランマ島（東澳島）は九十九年間の租借地。此の面積九二二平方粁、これらを合せて香港植民地の面積一、〇一三平方粁。支那人以外の人口（軍人を除き）二一、〇〇〇。支那人は首邑ヴィクトリアに三七三、〇〇〇、首邑以外の香港島に四七、〇〇〇、九龍に三〇萬、租借地（新領土）の陸上一〇三、〇〇〇、水上一〇〇、〇〇〇。總計九四四、〇〇〇。英領は南支那の山塊の一部で、花崗岩及古期岩層から成り、東北乃至西南及西北乃至東南の多

くは坼裂線で分裂して幾多の島嶼・半島と成る。だから海岸線極めて不規律、其の間に多くの良港がある。香港島は東西に長く、全く山地で、中央の峰はヴィクトリヤ峰（海拔五四一米）と言ひ、其の四所に在るヴィクトリヤギャップ迄ケーブルカーで登れる。此の高所には別莊が多い。ヴィクトリア市は島の北岸に在つて、背面にヴィクトリア峯を負ひ、港内からの夜景は特に美しい。ヴィクトリア市と對岸の九龍市との間の海峽が卽ち香港の港で、水深く、面積二六平方粁。幅の最も狹い所は鯉魚門と言つて八〇〇米、眞に天然の良港。氣候は熱帶性で七月平均氣溫攝氏二七度八、二月一四度三。年中東風が多く、雨は夏の季節風に伴ひ、特に六月に多い。年雨量二、二八六粍。秋には屢々颱風がある。

美しい建物を以て　香港の印象である。此の邊『祖國を出でて』に〝海峽の兩岸が次第に轉ずると共に、左舷の島には岸といはず、中腹といはず、折々は山頂にまで、美しい洋館の點在するのを見るやうになつた。此處彼處天嶮に據つて構へられた砲臺らしいものを認めたのも强ち僻目ではなかつた。港に入るに隨つて歐風建築は愈多く、遂にはそれが水面から、そゝり立つ島山の中腹まで、ぎつしりと美々しく立並ぶヴィクトリア市街となつて我が前に展開した。晩餐後デッキに立つて眺めやる香港の美觀よ。海といはず山といはず、麓といはず中腹といはず、幾百萬の電燈に彩られた市街のイルミネーションは、燦たる寶石を列ね、紅玉を點じ、碧玉をちりばめ、かの蒼天の星光をあつめ、地上に百花を一時に咲かせてもまだ之に及ばぬであらうと思はせる。云々〟と。

蘭科　單子葉植物の蘭科に屬する多年生草本。地上・樹上に生じ、**熱帶植物**　椰子・檳榔・棕櫚・芭蕉など。

莖は通稱分岐せず、根は肉質のものが多い。葉は互生又は對生し、概ね全緣で平行脈を有する。花は

兩性にして不整齊の花蓋を有し、頂生單立なるか、又は穗狀・總狀・複總狀花序等に排列。花蓋は六片から成り、三片づゝ內外二輪に竝び、內花蓋中花軸に對する一片は脣瓣と稱し、他の二片と異り大形で種々特異の形狀を呈し、往々距を具へ、又は囊狀の腔窩を形成する。種類極めて多く、熱帶・溫帶に約一七、〇〇〇種（熱帶及亞熱帶產約八五％）を產し、我が國內に自生するもの約九〇屬四三〇種に達す。

九龍　香港市街の對岸に位する町で、一八九八年北京條約に依り英國の租借地と成つた所。其の租借地は九龍半島一帶の地域及數多の島嶼を含み、面積九二五平方粁。深州灣から大鵬灣に通ずる半島の頸部を北端と成し、軍事上極めて重要の地で、九廣鐵道は九龍に發して北方に向ひ、西方廣東に達する。香港島と共に所謂香港植民地を形成する。

安南　佛國の保護を受ける王國。古の安南帝國の一部で佛領印度支那の中部海岸地帶を占む。面積一〇萬三千平方粁、人口五四〇萬。現在の國土は南支那海沿岸の狹長な地域を占め、西に近く安南山脈が連り、之より海岸に階段狀を成して傾き、小河流が此の山脈から流出して海に注ぐ。其の沿岸に僅少の平地がある。安南山脈は印度支那山系最東の山脈、最高山は標高二、五〇〇米。

シンガポール　マレー半島の南端に近いシンガポール島の南岸に位し、同名の海峽に臨む港市。英領マラヤの首都。北緯一度二〇分に位し、赤道無風帶氣候の特色を示し、夏は南西、冬は北東の季節風が吹くが、氣溫・雨量共季節的に著しく無く、年平均氣溫攝氏二六度七、雨量二、五二七粍。其の位置がアジア大陸とマレー群島・濠洲・太平洋・印度洋の間に在るので、南洋の政治・軍事・經濟の中心を成し、英國の强固な海軍の根據地として知らる。港內のプラニ島に世界最大の錫製錬所があり、其の他バインアップル罐詰・ゴム・鞣革の工場

がある。貿易の大部分は仲繼貿易。人口五二萬五千。

全人らしいインド人が出て來て　此の邊『祖國を出でて』に〝海岸通が盡きて立派な鐵橋を渡る。もうタンジョンパガーの埠頭にさして遠くはない。W氏が煙草欲しさに、とある煙草店の前を覗くやうに通り過ぎようとすると、すかさず奥なる黑顏の主人が〝ユー　ジャパン　ゼントルマン〟（貴方日本旦那）と呼ひかける。三人は好奇心から立止つて店頭を見る。W氏が煙草が欲しいといふと、『好い煙草がいくらもある。』と應ずる主人は印度人らしい。マライ人の手代に命じて種々の煙草を並べさせる。主人は煙草もそつち退けに頻りに愛嬌を蒔く。〝ユー　アール　ジャパン　アンド　アイアム　インディアン〟（貴君方は日本である、私は印度人である）語は文をなさぬが、しかし其の意はどうやら察せられる。日本を頻りに褒めたてやまぬ。繪葉書も賣つてゐるから、あれこれと選ぶ中に、ヴィクトリヤ女王の記念像があつたのを手にすると、彼は急に私の手から奪ひ取つて、〝ジス　イズ　ノット　グッド〟（これは好くない）と言ひながら、手を擧げて打つ眞似をして狡猾な笑ひを浮べる。英國に對する反感を我々に示さうとするのであらう。W氏がマライ美人の繪葉書を見て半分お世辭に『これは美しい。』といふと、今一人若いインディアンが巧みな日本語で、『そんなものより、此の方が餘つ程美しい。』といふのに私共三人はびつくりしながら、彼が差出す繪葉書を見れば、それは日本藝者の寫眞であつた。中々隅に置けない男だ。彼は數年前日本に來て暫く横濱に住んでゐたと語つた。最後に主人のインディアンが煙草を新聞にくるんで、W氏のポケットに突込みながら、『ジャパン（日本）とインディアン（印度人）と仲善くしなければならぬ。』といふ意味のことをしつこく述べ續けた。〟とある。之はそれに據つたもの

で、蓋し實說であらう。

スマトラ島　蘭領東インドのスンダ列島中の最大島。東南から西北に長く、長さ一、七〇六粁、幅最大四〇〇粁。赤道略中央を横斷、北緯五度三十九分乃至南緯五度五十七分、東經九十五度十六分乃至一〇六度四分に在り、本島のみで面積四三三、八〇〇平方粁、屬島（西岸のニアス・メンダウェー、東岸のリオ諸島）を加へ四五四、九一九平方粁即ち我が本州島の二倍、人口リオ諸島を除き七、六六一、四〇〇、密度一平方粁に一八。其の位置がマラッカ海峽及スンダ海峽に臨み、太平洋・印度洋交通の要路を扼するので、政治上重要視され、經濟の發達も蘭領中ジャヴァに次ぐ。

インド洋　アジア・オーストラリア・アフリカの各大陸と南極洲とに圍まれた海。其の北部に分れてベンガル灣・アラビヤ海と成り、アラビヤ海の一部は更にペルシャ灣・アデン灣・紅海等の內海と成る。

無邊際　限のないこと。廣大にしてはてのないこと。

セイロン島　印度の南方、印度洋中に在る英領の島。印度大陸とは淺いポーク海峽及マナール灣で隔てられ、此の二つの海の間にはマナール島及ヒンドゥー教徒の巡禮地なるラメスワラム島竝に砂岩及珊瑚礁から成るアダム橋が有つて、セイロン島と大陸とを殆ど連續させて居る。今鐵道がアダム橋を通じ（一部は渡船）兩者を連絡させる。面積六五、六一〇平方粁、人口五三一萬三千。密度一平方粁に八三人。

コロンボ　セイロン島西海岸の低地にある商港。且つセイロンの首邑。印度洋航路の重要港。輸出は茶・ココ椰子・ゴム。港は防波堤に圍まれ面積二五〇ヘクタール、日本郵船歐洲航路・ボンベイ航路、大阪商船南米航路の船寄港。氣候熱濕なるも健康に好適。街路清麗、西都のフォートは商業街で、又總督官邸がある。其の他博物館・動物園・植物園・ヴィクトリア公園・佛寺等もある。人口二

コロンボの波止場

八萬四千。

怒濤（ドタウ）　いかり狂ふなみ。烈しく打ち寄せる波。荒れたつなみ。怒浪。激浪。此の邊『祖國を出でて』に〝上陸の便宜を計つて今朝は八時に食堂が開かれる。丁度食事の最中に我が船は悠々として入港しつゝあつた。フォークを置いて暫しかの壯大な防波堤を眺める。十幾年の歳月と、二千五百萬圓の巨費とによつて作られた、此の防波堤に、茫洋たる印度洋の大うねりが打寄せる毎に幾丈の白波が逆卷き、濛々たる餘沫は堤を越えて港内に躍る壯觀、思はず快哉を叫ばずにはゐられない〟とある。

カンディーの古都（コト）　此の邊の詳細は『祖國を出でて』を見ればハッキリする。其の『カンディー行』の一節に〝午後二時カンディーの町に入つた。それは謂はゞ日本の京都である。傳へる所によると、カンディーは西曆第十四世紀以來の王都であつた。其の後ポルトガル人やオランダ人との戰に、町は幾度か兵火に

かゝつたといふが、それでも思ひなしか、何處となく典雅な古典的な匂が漂つてゐる。歐風都市にひきかへ、家並は主として支那式・日本式をこきまぜたやうな東洋家屋であつた。海拔一千六百呎の山峽都市は、吹く風も何となく冷かに感じられた。我々を乘せた自動車は、此の古雅の都邑に似つかはしからぬ歐風建築のクィーンホテルに停つた。云々〟とある。

アラビヤ海（カイ）　印度洋の一部で、印度・アラビヤ兩半島間に灣狀に入込んだ海。北部は更にペルシヤ灣・アデン灣・紅海と成つて陸地の間に灣入。南西（夏）北東の季節風が交代し、古來アラビヤ人は此の風を利用して印度・極東との貿易に往來。五月頃暑さ强く、水温攝氏二八度二九に上り、鹽分が强い。

アデン　アラビヤの西南隅、アデン灣の北岸に沿ふ英領の港。バベルマンデブ海峽の東方一八〇粁、火山性の小半島上に在り、其の西北岸のスティーマーポイントが海洋船の碇泊所で、町は其の東方八粁の東海岸火口底に在る。附近領地一九四平方粁、人口五萬五千、英印連絡の要地、又要塞地。日本郵船歐洲航路船寄港。又アラビヤ・アフリカ東岸諸港に至る航路の起點。コーヒー・アラビヤゴム・駝鳥の羽毛・眞珠・煙草等を輸出。附近は全く沙漠で飲料水の供給困難。一八三九年英人占領。附近二萬三千平方粁の地及ペリム島も英國に屬して居る。

まのあたり　めのまへ。眼前。目前。現前。或は親しく。うちつけ。直接。又さしあたり。目下。當座。

涙の瀨戸（ナミダ　ヒト）　バブエルマンデブ海峽卽ちバベルマンデブ海峽を言ふ。アフリカ大陸東北部の紅海と印度洋の一枝アラビヤ海とを通ずる海峽。其の名はアラビヤ語の〝歎きの門〟又は〝涙の瀨戸〟を意味し、紅海から印度洋へ出る最初の難所であつた。東岸アラビヤ側は火山性の岬突出の爲、最狹部幅二四粁に過ぎず。水深二六米乃至三三〇米。此の海峽は元陸地で

あつたが、洪積世前期に陷沒して生じたものと言はれる。此の邊『祖國を出でて』に〝いよ〳〵アデン灣が盡きて、午後二時に有名なバブ、エルマンデブ海峽にさしかゝつた。アラビヤは右舷に日近く迫つて來た。海中に斗出する丘陵の黑い岬はラス、エルマンデブである。左舷の方には何時の間にかアフリカを望んで、ラス、シャンが遙かに相應へてゐる。峽口二十五キロメートル（約六里）其の中間アラビヤに近く横たはるペリム島が黑繪のやうに浮んでゐる。我が船は頻りに面舵を取りながら刻々と方向を北に取出した。聞くならく『バブ、エルマンデブ』の名はアラビヤ語『涙の瀨戸』を意味する。昔アラビヤ人が紅海に船出して遠く印度方面へ向ふとき、此の瀨戸にさしかゝつては流石慓悍な彼等も、涙を流して故國に訣れを告げたといふ。これは果してさうであるか否かを私は知らない。リッピンコットなどによると、此の瀨戸の航行は頗る危險であるから『涙の門』といふのだと書いてある。前者が人情味にからんでゐるだけに、廣く人口に膾炙してゐる。しかも此の瀨戸は我々歐洲渡航者に取つての『涙の瀨戸』である。祖國日本を去つて約一月、望鄕の情は『涙』といふ言葉によつて著しくそゝられる。誰もが『遠くも來ぬるものかな』といふ心持にならずにはゐられない。涙の瀨戸はペリムの島によつて二つの水道に分かたれてゐる。向つて右は幅二三哩、左は十哩位もあらうか。我が船はペリム島の左側めがけて進んだ。島は火山性、不毛礁角の岩山である。島それ自身には殆ど何の價値もないであらう。しかも其の位置はバブ、エルマンデブの咽喉を扼する。凡そ世界各地の咽喉が英領である如く、此の岩塊も亦英領であつた。島上には燈臺があり、ロンドン、ロイド會社の信號所があり、ペリム石炭會社の炭庫があつた。信號所は日々此の海峽を通過する船名を記して

ンドンへ電報するといふ。ペリム島は船の右舷に現れた。西岸は彎入して港をなしてゐる。燒野原のやうな島上に幾多の洋館が見える。人影も動いてゐた。堪へ難きは此の島の氣候であらう。熱帶の日光は何の蔽もなく直射する。沙漠の熱風はいやが上に暑熱を增進する。聞けば島上水一滴も出ないさうである。人世はつらいものだと見るからに思はせられた。云々〟とある。

紅海（コウカイ）　アジア・アフリカ兩大陸間に介在する細長い內海で、バベルマンデブ海峽を通じて僅に外洋アデン灣に連る長さ二、三〇〇粁、幅三五五粁、面積約四五萬八千平方粁。成因は地域の陷沒に依るもので、アフリカの眞部より西南アジアのシリア地方に迄及ぶ一大陷沒地帶の一部を爲し、深度は海峽部に於て五〇〇米許り。メッカの西方に於ては二、一七七米に達する。沿岸には珊瑚礁の發達著しく、潮の色が紅なるは紅海獨特で、海中に棲息する小動物に基因する。スエズ運河の開鑿以來重要な世界交通路を爲す。海上權は殆ど英國が掌握する。

いるか　海豚。まいるか又はいるかうをともいふ。鯨目の哺乳類。體長大きなものは五米に達す。短吻性であるが、嘴は可なり延び、頭長の七〇%を占める。脊鰭は中央に在つて鎌形で大きい。前肢は狹く鋭い鰭に成つて居る。脊・吻及び鰭は青白色、腹部は白色、脊腹の界は稍不明瞭。印度洋から我が國近海にかけて棲息し、群を爲して游いで居、魚類を常食とする。怜悧で異音を聞くと忽ち逃れ去る。春季一仔を產む。幼仔は五〇糎內外、口邊に毛を有する。肉・皮・脂肪共に有用。此の邊『祖國を出でて』に〝午後ゴルフをやつてゐると突然「海豚！海豚。」と誰かゞ叫んだ。皆ゲームを中止して、其の指さす方を見つめた。美しいオルトラマリンの海の上に我が船が起す幾條のうねり、其のうねりに當つて、突如として黑い影が跳つた。黑い影は虛空

に半圓を描いて水に躍入つた。續いて又一疋が半圓を描いた。更に數疋が競爭するやうに半圓形に跳つた。丁度それは半分水に沒して廻る水車のやうに思はれた。彼等の此の動作には一種の愛嬌と滑稽味があつた。見てゐると自然と微笑まずにはゐられなかつた。「一體何の爲にあんなに跳ね廻るのかなあ。」と誰かゞ言つた。誰も答へるものがなかつた。人間の眼から見ると、彼等はどこまでも呑氣な競爭をやつてゐるやうにしか思はれなかつた。海豚の群は續々と現れた。みんなが一つづゝ空中で宙返りをしては、そゝくさと水に隱れた。澤山出れば出る程滑稽に見えた。丁度學校の生徒が順番に木馬を飛ぶのを、はたから見るやうな氣持で眺められた。云々〃とある。

スエズ　埃及の東北部、紅海のスエズ灣頭に在る港市。スエズ運河の南口イブラヒムに近い。スエズ運河の開鑿に依り復活した町で市街は埃及土人街と歐洲式市街とに分れる。人口四萬一千。

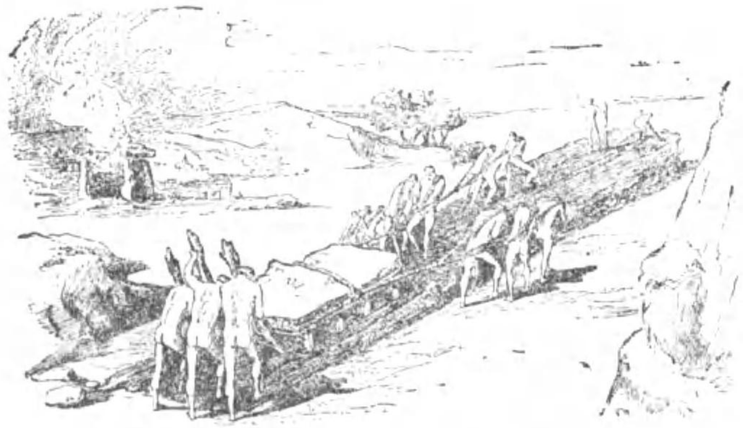
カイロの都（ミヤコ）　埃及の首府。ナイル河三角洲の頂點に位し、其の東方に座するモカッタムの山地と河岸との間に立ち、ナイル河並に市中を貫くイスマイリア運河の舟運に惠まれて早くから發達した。殊に六世紀に回教王カリフの政廳が置かれてからサラセン文化の一中心地と爲り、大學には回教研究學生二千を收容。現在市中に四〇〇以上の回教寺院を有し、之等寺院の尖塔天に冲し獨特の壯觀を呈する。有名な博物館もある。最も繁華なのはイスマイリア街で大商店・旅舍多く、カスルエッツバラ街も歐洲式近代風、且つ清楚。三角洲を經濟的に支配し、ナイル河並に鐵道に依つて中流・上流の物資をも呑吐し、商業極めて繁盛。西南アジア・ヨーロッパの各地から來遊の短期住居者が甚だ多い。人口一〇六萬五千。アラビヤ人・埃及人最も多く、トルコ人・ユダヤ人・希臘人・イタリヤ人共に雜居。土地の稱はミッスリ。

蜃氣（シンキ）

樓（ロウ）　廣義には一般に大氣中で光の異常に屈折する現象を總稱する。狹義には富山灣に於けるが如き幕狀、行列・橋・松林・城樓等の形を現す現象をいふ。依つて廣義の場合には便宜上之を蜃氣樓的現象と稱し、此の中で主なものは僞水面の現象と空中反映の現象と、狹義の蜃氣樓であり、其の他側方反映や異常遠近現象や異常日月等がある。

顯（クワン）　似寄つた性質のもの。種類の同じいこと。又其のもの。同類。なかま。るゐ。

金字塔（キンジ）（タウ）　ピラミッド。エジプトのナイル河右岸カイロから西方の沙漠地メンフィス地方に在る。アブローシュからメダムに至る間に約七五基現存。四邊形基底・三角形側面の五面角錐石造で、紀元前三千年乃至二千九百年代に國王・王族等の墓として多大の資財と勞役とを費して建造されたもの。今ギゼーに在るクフ王の大ピラミッド（其底一三エーカー・高さ四八一呎）を最大とする。外部の北面から通路を開き、內部に石棺室あり、換氣孔・採光孔がある。ピラミッドは元來底面三角形又は多角形を爲す錐狀體を言ふが、普通ピラミッドと言へば如上の角錐體狀墳墓をいふ。此の邊原文の『祖國を出でて』に據れば〝沙漠は波狀に高低起伏してゐた。さうして私たちは既に大小二基の金字塔を通過して、現存六十七基中の絕大といはれる大金字塔を仰いで立つ所まで來た。其の麓の左下に當つてスフィンクスの影をさへ認めた。私の心は跳つた。高さ四百八十一呎、底面積十三エーカーといふ金字塔は、一寸見にはさして大きく思はれなかつた。大きな沙漠といふ混沌世界の中に立つ人造物だからでもあらう。我々の豫想がいやが上にも過大であつたからでもあらう。或は又絕大の建造物は人工を超越して、比較を自然に取らうとするからでもあらう。私共はピラミッドを山岳の如く豫想してゐた。しかし如何なる大建築も山に比較されては渺たる人間の小さが憐



人始原ピラミッドの石材を運ぶ

まれる。ピラミッドも亦其の類であつた。　然も仔細に見、仔細に聞く程ピラミッドは大きかつた。紀元前三千七百年、埃及第四王朝のクーフ王が此の金字塔を作るに當つて、三十萬人の壯丁が毎年洪水の時期三箇月間（洪水の時期は農閑期であつた）徵發され、五十五箇年で完成されたと言ひ傳へられてゐる。之を今日の最新式の機械を利用し、毎日一千人の人夫を使役しても猶且つ百年の歳月を要するであらうと或人は計算したさうである。積上げた石塊の數が三百三十萬（一個重量二噸半）之を高さ四呎の石塀にすると、パリー市街の周圍を圍むことが出來るといふ話である。輪廻轉生の信仰がかくも大きな墳墓を作らせた。ミイラは人體を永久に保存するとしても、若し一朝墓場荒しが掠奪を恣にしたら、靈の復活が覺束なくなる。地位ある王者は地位が高いだけにそれが氣遣はれた。そこで墳墓は出來るだけ堅固にされた。ピラミッドが其の絶頂であり、ギゼーの大金字塔が更に其の絶頂であつた。帝王は即位と共に自分の墳墓を考へた。彼は全生涯を擧げて墳墓に力を盡した。金字塔の内部は實に一種の迷路だといふ。先づ入口が既に不明である上に、一度入れば闖入者を欺く爲に迷室が幾つも作つてある。眞の「帝王の間」が何れであるかは全く謎であるさうだ。ギゼーの大金字塔にも「帝王の間」は四方を磨き立てた花崗岩で張りつめ、天井から塔の表面まで穴を通じて換氣法まで施してあるが、しかも其の中に安置された石棺は空であるといふ。帝王一代の苦心も空しく、絶大のピラミッドも墓場荒しに闖入されたのであらう。しかも又此の「帝王の間」それ自身が既に一個の食はせものであつて、クーフ王は永へに此の大ピラミッドの何處かに安らけく眠つてゐるだらうとも考へられる。云々」と興味深く叙せられて居る。

スフィンクス　人面獅身の怪物の石像で、古代エジプト・アッシリヤ等で王宮・神殿・貴人の墳墓等の表口を飾つたもの。後にギリシヤにも行はれた。シリヤのは有翼で四肢を伸して立ち（ニムロド・コルサバード等の王宮正門に置かれる）エジプトでは男子の人面で前肢を伸ばし後肢を曲げて匍匐の姿を爲し、例へばギゼーの大ピラミッドの近くにある大スフィンクスと稱するもの〻如き）ギリシヤでは上半身が女で乳房を出し、下半身が獅身で翼がある事に成つて居る。神話學者はこれらを獅子崇拜から來たものと解して居るが、エジプトではスフィンクスが神殿・王宮・墳墓等の神祕的な保護者であると考へられ、其の頭面は神又は王を表して居る。例のギゼーの大スフィンクス（頭の高さ六五呎・軀身の長さ一八五呎・顏面廣さ一四呎）はカーフル王の面像であるといふ。然るにギリシヤでは有名なボイオチア神話が示す如く、人間の避け難い運命である死を寓するものとされる。此の神話から轉じてスフィンクスと言へば、大きな謎といふ義に解される事に成つた。世間で普通にスフ

インクス像と言へばギゼーのを指して言ふ事に成つて居る。原文には〝私共一行は大ピラミッドを過ぎて大スフィンクスの前に立つた。おゝスフィンクス！汝はギリシャ神話に現れてエディプスに「人間の謎」を提出した。之を解いたエディプスは嘗て人間が經驗し得た最も非業非慘な運命を擔はされた。ギリシャ人が既に汝を謎と見た如く、汝は實に永久に謎である。汝の存在が既に謎である。歴史家は汝の謎を說いて日の神ハルマチスの像であり、國王はハルマチスの地上に具現したものである故に、汝の建設者卽ち國王それ自身の像だと解釋してゐる。又其の人首は智德を、其の獸身は體力を表徵して國王の偉力を具現したものとも解釋してゐる。抑も汝大スフィンクスは何時から此處に存在したか。考古學者は此の謎を說いて、紀元前四千年には既に此處に在つたと解してゐる。しかも此の大スフィンクスは、長い間半ば砂に埋められた。マメリュック族は汝の首を射擊の的にした。近代發掘されて全身を露出した汝はかくて鼻もかけ、容貌もいたく衰へたが、尙依然としてかの蒼を凝視し、口に微笑を浮べて、六千年の謎を今日我々に投掛けてゐるのだ。一行はスフィンクスの前で、案內者の說明を聞いた。それから記念撮影をする。由來名所は乞食が多い。駱駝の御者がねだる酒手（バクシー）もそれであるが、其の他繪葉書賣や、スフィンクス・ピラミッドの小さな模型を賣る者が、我々の周圍に集まつた。中には「何分間でピラミッドへ登るから金を吳れ。」といふのがある。「ピラミッドの頂上へ、塔の中へ案內しよう。」といふのもあつた。塔內の見物は聊か食指も動くが、時間がないのと案內者の氣心の知れぬ不安とで誰も應じようとしなかつた。午後の太陽は沙漠を容赦なく照附ける。顏や手の甲に射す日光は痛みを感ずる程であつた。地上からの熱氣が輻射する。それでも不

思議に汗は少かつた。濕氣の多い日本に育つた我々には、これも珍しい經驗であつた。云々〟とある參考すべきであらう。

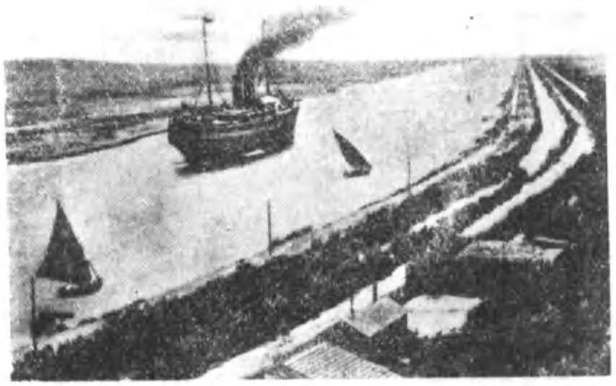
カイロ博物館（ハクブツカワン）　埃及カイロ市の西端ナイル河岸近くに位置し、建物は希臘・羅馬風、一八九七年着手一九〇二年完成。蒐藏はナイル沿岸各地に發見した古代埃及又は希臘の遺物。一八五七年佛國の埃及學者オーギュスト・マリエットの創建以來、政府當局や外來學者團の發掘作業及購入等に依つて所藏急速に增加しつゝあり（他國の發掘隊は要求された場合、得たる出土品の半部を此の館に提供する義務がある）現在此の種の博物館として世界に有數なもの、埃及古帝國の名作として喧傳される村長木像・貴公子レホテプ・其の妻ノフレの石像等も見られる。『祖國を出でて』に〝沙漠を走り拔けた東洋の客は、砂塵を浴びて帽子も白服も顏も手もハンケチもすべて眞黃色であつた。しかもみんなが疲勞困憊其の極に達してゐたから、到底自分の身裝など厭つてゐられたかつた。手拭を頰冠りのまゝ、ハンケチで鼻被ひ口被ひをしたまゝタオルを帽子の下に着込んだり、頸に卷いたりしたまゝ、東京の町中で發見するお上りさんもまさかと思はれる野趣滿々たる姿で、我々は素晴しく壯麗な大建築埃及博物館前に到着した。案內者に連れられて內に入れば、其處にはエジプト六千年の遺品が各室に所せまきまで、厖大な素樸な彫刻の手法が、大埃及帝國の氣宇と永久に新味をそゝつて止まぬナイヴを發揮してゐる。種々な物の陣列は、歴史家ならぬ私には知的に解釋されずして、徒に感情を動かさせる。何といつても素人には幾百のミイラが人氣を有する。大部分は帝王であり王妃である。ありし日の王者の氣宇は世界を呑んだであらう。幾百千萬の生民を驅使して國土も建設された。ピラミッドもスフィンクスも作られた。しかも人間の哀れさ、はかなき輪廻轉生に唯一

の永生を求めて、かゝるミイラとなつた。ミイラは幾千年の間空しく魂の復歸を待つてゐるのだ。英雄美人の靈が今若し此處で復活したとすれば、彼等は果して此の博物館を何と見るであらうぞ。しかも此の博物館の呼物は、かゝる王者のミイラよりも、千九百二十二年、カイロの上流四百哩、ルクソルに於て發掘されたツタンカーメン王の墳墓に發見された夥多しき珍寶什器であつた。それは實に三千年の昔に於て、人間の藝術が如何に精妙巧緻の域に達してゐたかを物語るものであつた。最近世界を風靡した埃及模様の流行は、實にこれら藝術品に刺戟されたのである。實に一個の盤、一個の壺、それらの相や紋様を仔細に點檢すれば、私共も亦後世三千年の人間の進歩があまりに遲々たるを歎ぜずにはゐられなかつた。我々一行はもう疲れ切つてゐた。博物館の夥多しき陳列は、とても細かく我々の眼に映ずるだけの餘裕がなかつた。先づ大體を直觀しただけで、正午過ぎ博物館を引上げ、待受けられたホテルに入つて晝食をする。云々"と。

ポートサイド　アフリカ、東北部の都市。メンザレー湖を地中海から分つ砂嘴の東端に位し、スエズ運河の北門に當つて石炭・石油の貯藏港の任を爲し、仲繼貿易繁盛。市は運河開鑿當時の埃及副王サイドパシアに因んで命名され、直交せる街路整然。二三〇〇クタールの外港は二つの防波堤に依つて擁され、其の西突堤上に建設者レセップスの巨像啤睨。八九〇クタールの内港は船舶輻湊、鐵道はカイロ・スエズに連絡。人口一〇萬五千。

スエズ運河（ウンガ）　地中海と紅海とを連絡する運河で、紅海の北岸スエズ港附近に起り、スエズ地峽を横ぎり、地中海岸のポートサイドに至る延長約一六〇粁。スエズ地峽の開鑿は既に古代に計畫、其の後歐洲諸國が東洋方面に發展の結果、アフリカ迂廻の不便を避ける爲、一八五九年遂に佛人レセップに依

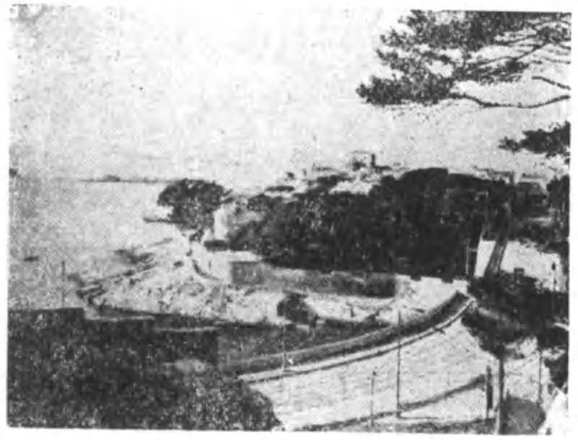
り開鑿に着手、十箇年の日子と一、七〇〇萬磅の巨費を要し、一八六九年十一月開通（六十九年前）。大小ビッター・チムサ・メンザレーの諸湖を連結、水面幅一〇〇米内外、深さ一一米（開通當時は八米）通過に一六時間を要する。此の運河は所謂水平式で途中一つも水閘を有せず、船は其の儘に通航が出來る。此の運河開通は世界交通貿易に重大な關係を有し、歐亞連絡航路の短縮・地中海諸港の復活を見た。運河會社の實權は英國が掌握し、一八八八年以來運河地帶は中立と成り各國船舶の通過は自由と成つた。此の運河を軍艦で一番乘したのは我が軍艦富士で、明治三十二年英國から廻航の途、此の運河を通過して世界を驚倒させたのが最初である。



スエズ運河

レセップス　フランスの人。外交官。ヴェルサイユに生る。（一八〇五年）各地領事館に轉勤、一時スペイン駐在公使と成り（一八四八年）次で外交官生活を放棄、埃及に赴き、埃及副王の許可を得て、スエズ運河を開鑿（一八五九年から一八六九年）パナマ運河開鑿にも從事したが、此の方は失敗に歸した。一八九四年歿。『祖國を出でて』に，海岸通を眞直に北へたどつて、私共はポートサイドの西北の一角に立つた。前は一面の地中海である。壯大な防波堤は倘遠く海中に突出して、運河の入

口を擁護してゐる。防波堤は立派なものであつた。それは寧ろ絶好の散歩道であつた。私共は此の堤防を更にたどつた。めざすソェルヂナンド、フォン、レセップスの銅像はもう目近に此の突堤の上に立つてゐる。高さ三丈に餘る石造の臺座の上に堂々たる偉丈夫は、南國の青空を衝いて立つてゐた。後年は野心家といはれ、山師と謗られても、スエズ運河の功業が永へに彼を理想化しないではおかない。銅像の溫和な風貌態度は、あつぱれ文化的偉人たるの風格を失はぬ。彼のまなざしは遠く、地中海から入り來る船を見詰め、左手には卷いた地圖を持ち、右手は右方やゝ斜下に開いて運河の行方を示してゐる。左脚を前に踏み出し、右脚を後方に引き、上體をやゝ右後にそらして立つてゐる。どう見ても「いざ此方へ。」といふ身振である。云々"と。　**マルセーユ**　フランスの東南部、ローヌ河口とトゥーロン軍港の間に好位置を占める佛國第一の港市、又最も重要な工業市の一。ローヌ河の三角洲分流に沿はないから土砂の堆積を受けず、自然の港として申分がない。北方に丘陵を負ひ氣候溫和、南國の植物景を呈し、風光絶佳。舊市街は



マルセイユの外濠

然もローヌにソーヌ地溝を交通路として北佛・中歐・北歐の商品乃至文化が此處で地中海に達し得、

商業殷賑、街路狹く、船員・イタリヤ人、其の他下層階級が住むに反し、新市部は現代的街路と壯麗な建造物を有し、殊にカンヌビエール街は美しい。人口は八〇萬、巴里に次ぐ大都市。イタリヤ人が人口の約六分の一を占める。

指導精神

横濱を出て（卷七）ハワイのホノルルに寄航し（卷八）目的地アメリカへ渡り（卷九）サンフランシスコからロスアンゼルス・シカゴ・ニューヨークと各地を巡遊したアメリカ般路に對して、之は神戸を船出して上海・香港・シンガポールと次々に寄港し、印度洋を渡りアラビヤ海を航してアデン灣に入り、紅海からスエズ運河を通過して地中海に入る歐洲航路である。形式は書簡文の形で、手紙の主は恐らく洋行の途にある校長か首席であらう。課末に『途中から、ちよいちよい葉書は出しておきましたが、船のなごりに今日は此の一箇月の思出を書いて見ました。』とあるので、發信の動機も分れば文の目的もハッキリする。堂々十八頁に亘る長篇ではあるが、嚙んで含む樣な潤ひのある筆致と情味溢れる計りの感觸の間に、送り迎へる港々の情景や思出深き船路のさまが實感豊かに描き出されて居る。

神戸の埠頭で見送つて下さつた皆さんの顏や、帽子・ハンケチの熱誠こめた動き、それは今でも目の前に浮んで見えます。私は、あの時次第に遠ざかつて行く皆さんの姿が、ともすると涙でぼつとするのを感じました。あれは七月二日の午後三時でしたね。

の情味、

岸に續く倉庫・洋館の列、江上にもやひする大小無數の船、其の船の間を縫ふやうに、私たちを乘せたランチが進んで、さて埠頭に下りると、そこはけたゝましい支那人の叫びで一ぱいです。

の雜閙、

『あなたは日本人、私はインド人。日本とインドと仲よくせねばならぬ。』と言つて、其の黑い大きな手で、私たちに堅い握手をしました。

のユーモラス、

紅海は、名に似合はぬ眞青な海でした。其の眞青な水上で、盛にいるかがをどつて見せました。勢よく飛出しては、半圓をえがいて水にをどり込みます。後から後から飛出して、大體同じ場所で半圓をえがくのですから、見てゐると、半分水上に現れた水車が廻つてでもゐるやうな感じです。全くあいきやう者でした。

の奇觀、

何千年の昔の人が、ミイラとなつて、今私たちの目の前にあるのです。其の魂を呼起して、古い歷史を聞いて見たいとは、誰でも思ふことです。

の低回味等、自然も、人情も、風俗も、身親しく現地を踏み現境に在るの感がある。全篇は思出の形で、一箇月に亘る追憶を演說した形も面白い。恐らく筆者會心の作であらう。北海道で千島の北端迄延び、樺太の旅で國境線を踏んだ讀本が本課に至つて一大躍進を試み、眼界は遠く地中海に迄及んだ。堂々十有八頁に亘る本卷第一の長篇、質に於ても量に於ても讀應へのする大教材である。心行く迄讀み渡らゝ度い。尙題材が

題材である丈に未だ學ばぬ地理事項も少く無いから、指導に際しては地圖や繪葉書・寫眞帖等を利用し、具體的に實感味を込めて取扱ふ心構が肝要であらう。

指導形態

指導上の認識點

1　神戸からマルセイユ迄の航路の大體、並に世界事情に就いて知らせ、氣宇を大にし海外發展の意氣を鼓舞するのが本課の眼目である。

2　世界的地理教材として各國各地の特色が能く發揮され、實感の頗る豐かな點と綿々たる情緒の紙幅に溢れた點とは、本課獨特の持味として他の企及し得ざる所、其の國際的觀念の明確なる、海外發展の意氣旺盛なる一讀何人をも魅了せずには置かない。

3　特に我が產業方面の進出目覺しき一面に英國勢力の侮り難き事を暗示し、今後の國民の決意を高めた點等、共に之れ本課の觀點たるを失はない。

4　形式方面では通信文の形式に依る表現機構の巧妙な點を味はせ、長篇文の讀解に慣れしめる心構が肝要である。

5　取扱は常に世界地圖を參照し、繪畫・繪葉書・寫眞帖等を隨所に觀察させ、具體的・直前的に認識せしめる方途に出づべきは言ふ迄もない。

6　本課は大體六時間見當で如上の指導を完了する樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。

▽課中の挿畫を一瞥させ洋行氣分を唆り學習動機を喚起する。

2　全課の通覽。

▽何頁あるか・挿畫が幾つあるか・どんな形に出來て居るか等。

3 全課の通讀。
▽第一印象は大切に記帳させて置く。

4 文の梗概を摑ませる。
▽誰が？　誰に？　何時？　何處から出した手紙か・どんな事が書いてあるか等。

5 新出文字の指導。
▽新出の都度字書を索引させる。

印象　倉　拭　慧　握　海原　滑　池
昇　類　陰　遣　便。

6 難語句の指導。
▽質問を待つて隨所に指導する。

一筒月　刻一刻　走馬燈　埠頭　熱誠　船窓　展開　倉庫　洋館　大小無數　租界　繁華　ぼう然　島影　熱帶植物　蘭科　葉ずれ　片言　あいきやう　握手　動搖　無邊際　防波堤　怒濤　古都　大海原　烈々たる　駱駝　輸送　英領　經營　一塊　貯水池　信號所　半圓　大洋同然　熱氣　入港　汐淚　水景　蜃氣樓　椰子の木陰　目的　三角帆　獅子　巨像　遺物　豪座　强烈　退屈　などり

7 人名・地名・其の他固有名詞の取扱。
▽地圖・挿畫・寫眞・標本等を利用し成るべく具體的印象的に指導する。

地中海　イタリヤ　ナポリ　楊子江　支那　吳淞　黃浦江　上海　ランチ　スコール　香港　九龍　安南　シンガポール　マレイ人　インド人　スマトラ島　モンスーン　インド洋　セイロン島　コロンボ　カンディーの古都　アラビヤ海　アデン灣　アデン港　アラビヤ人　淚の瀨戸　アジヤ　アフリカ　ペリム　紅海　いるか　スエズ運河　カイロ　ナイル川　エジプト王國　金字塔　スフインクス　カイロ博物館　ミイラ　ポートサイド　レセップス　ヨーロッパ　マルセーユ

8 更に讀ませ内容の大體を摑ませる。
▽略地圖を描いて航路や地名を記入させる。

9 指名讀。
▽一句切づゝ、何人かに。

10 默讀。
▽各地・各場面の特徵を記帳させる。

11 話合。
▽印象や感想を中心に。

12 低音讀。
▽文の觀點に着目させて。

13 ノートを整理して提出させる。

第二次指導

出發（神戸）
一箇月
ヨーロッパへ（明日はナポリ）

七月二日 午後三時 ← 七月五日 早朝

神戸の埠頭
皆さんの（顏や帽子ハンケチ）熱誠こめた動き
私は（遠ざかる皆さんの姿）淚で
見渡す限り濁つた水天まで續いてジヤンクが上靡に（楊子江）

長い航海の印象（走馬燈のやう殆ど果てしがない）

1 指名讀。
▽中・劣生を主として。

2 再度不明の箇所を質問させる。
▽質問の性質に依つては全級の問題として話合はせる。

3 通讀練習。
▽小聲で、全課を一氣に。

4 逐次研究。
▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

上海

上海を出て三日目

香港

南支那海

呉淞――右に見て
上海――黄浦江をさかのぼつて
岸に續く（倉庫　洋館の列　大小無數の船）

ランチ ←――私達

埠頭に ↑

支那人の叫び

租界内（多數の日本人を始め各國人が生活して）

新公園　日本の子供たち（仲よく）

洋上のスコール（空も海も眞暗　忽ち恐しい大雨　すさまじさ）――一時ぼう然

――やがて（拭つたやうに海上の一角に島影）

美しい建物――瀧から中腹まで

夜――幾十萬の電燈（寶石のやう）

畫――熱帶植物の綠

植物園――蘭科（あらゆる種類）

對岸――九龍（手に取るやう）

海――急に朗かな濃い青さ

安南の山――大きな戀

（七月十三日午後）

シンガポール

（七月十五日）

インド洋

（七月十九日）

コロンボ

アラビヤ海

アデン灣

廣い海岸――（散歩（風は絶えて　椰子の梢（葉ずれの音もない））
さすがに暑い
マレイ人――自動車に乘れ
意外にやさしい聲
インド人――あなた日本人
私はインド人（仲よく（握手、

熱帶の港々を尋ねながら
スマトラの北端を　はすと（船は動搖し始め　山のやうな大波　瀧のやうなしぶき）
インド洋モンスーン

私は元氣で（毎日食堂に）
十日間も（波に明け　波に暮れ

セイロン島（壯大な防波堤　數丈の怒濤）
百十五粁の山路
カンデイーの古都（日本の奈良）

海は全く一變
灣とはいへ大海原（水は油のやうに　寶石のやうな青さ

（七月二十六日夜明）

アデン港

見渡す限り（かみつくやうな岩山）一木一草もない

烈々たる太陽の下

アラビヤ人――駱駝を追つて

私たちの船――おびたゞしい荷物を下し

（日本の商品）

↓

涙の瀬戸

（右はアジヤ　左はアフリカ）二大陸（中間五十粁）

海峡の眞中（ペリムの小島）

香港・シンガポール・コロンボ・アデン　皆英國人の經營

↓

紅海

眞青な海（名に似合はぬ）

いるか――半分を水上に　全くあいきやう者

水車のやう

同じ場所で

地理で見れば――狹くて長い

船からは――大洋同然

一番暑い所

寒暖計――四十度を越え

船室の物――熱氣を吐いて

人港――これから運河

↓

（七月三十日）

スエズ

自動車（約百三十粁）

朝風――快い程冷え

行手――果なき砂の平原

↓

沙漠

↓

カイロ

左の山――全部岩と砂

日が昇ると――沙漠は熱を吐出し

顔や手足――いたいやう

沙漠の湖（蜃氣樓）

ナイル川に沿ふ――始めて綠の椰子

五千年の昔「エジプト王國」旅人の目的

文明の跡

ナイルの水の上（三角帆の船　長い橋　アカシヤの並木）

又沙漠（駱駝に乘つて）

一番大きいのは（高さ（百四十七米餘）　石の數（三百二十萬）　底の面積（五百二十六アール））

皆エジプトの（王様　王子の）墓

そばに（顔は人間　體は獅子）不思議な巨像

エジプトの古い文明）陳列され

遺物が何十と

一番目を引くのがミイラ（五千年前の人間）

（古い歴史を聞いて見たい）

↓

企宇塔

↓

スフィンクス

↓

カイロ博物館

↓

ポートサイド

汽車で着くと　港に船が

スエズ運河の北端

（七月三十一日）
地中海
（八月五日）
マルセーユ

レセップスの銅像　東洋への道を指して
私達の船は　それと反對に
三日目（空も海も朗かで）（秋になつた）
（溫度も下つて）
あと三日で　マルセーユ
退屈するいとまもない
途中からは葉書を出したが
今日は此の一筒月の思ひ出を

上陸したら　又各地から
どうぞ皆さん　御元氣に

5　話合。
▽前項の文圖と各自のノートを對照させて。
6　會讀。
▽グループに分れ文意や觀點を各自に講究させる。
7　難解の語句を確める。
▽懇談的に話合つて。
8　輪讀。
▽一句切づゝ、座席順に。
9　全課の文意を掴ませる。
▽ゆつくり默讀させて。
10　話合。
▽前項の文意を中心に。
11　低音讀。
▽洋行者氣取で、實感的に。
12　ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1　通讀練習。
▽全課を一氣に。

2　指名讀。
▽一句切づゝ、輪讀式に。
3　話合。
▽挿畫を中心とし印象や感想を自由に。
百三十八九頁　上海
百四十一頁　香港
百四十三頁　シンガポール
百四十六頁　アデン
百四十九頁　カイロ
百五十一頁　金字塔とスフィンクス
百五十二頁　ポートサイド
4　演習。
▽文の内容を取捨して航路日誌の形に改作させる。
5　話方練習。
▽前項の演習で作製した日誌に基き時間的・報告的に話させる。
6　學習事項の整理。
▽内容方面では各國各所の特色や國際的觀念等、形式方面では印象的紀行を内核とする書簡文の風格や情緒纏綿たる趣き等。
7　補充說話。
▽東亞の大勢・地中海問題・日英關係等。
8　朗讀練習。
▽適宜に範讀を交へて。
9　視寫・聽寫練習
▽重立つた箇所を選び、又選ばせて。
10　新出文字の書取。
11　語句の應用練習。
12　テスト。

テスト問題

一、次の假名を漢字に直しなさい。
1　コクイツコク　2　ネツセイ　3　ウナバラ

4 インシヤウ　5 サウコ　6 タイクツ
7 アクシュ　8 チヨスキチ　9 コカゲ
10 サブツ

二、次の熟語に振假名を附けて解釋しなさい。

1 走馬燈　2 租界　3 英領
4 無邊際　5 動搖　6 怒濤
7 駱駝　8 蜃氣樓　9 金字塔
10 沙漠

三、次の漢字を使つて熟語を作りなさい。

1 種（　）　2 最（　）　3 博（　）
4 五（　）　5 握（　）　6 寶（　）
7 輪（　）　8 印（　）　9 號（　）
10 經（　）

第二十三　月光の曲

本課では藝術家の眼に映じた月、次の課は科學的に見た月、共に秋の季節に相應しい絶好の題材であり、月二題として兩者の對照が興味を唆る。舊讀本の再錄では有るが、矢張世界的大藝術家の有名な逸話丈に、物語の中に永久的な力强さが籠つて居る。

本課の原據はベートーベンの實傳では無く單なる流說に過ぎぬが、生故鄉のドイツでも實說かの如く傳へられ、本課の內容と同樣の名畫さへ現れ、有名な逸話として全世界に喧傳されて居る。結局實說では無いが、ベートーベンとしては如何にもベートーベンらしい性格が能く現れて居る點から、一般には實說の如く信じられたものと思はれる。彼は非常な不遇の中に育ち貧苦と戰つて來た人丈に、純眞な幼兒や不具者等には人一倍の同情が有つた事は事實だし、作曲家の總てが卽興的・偶發的に想を產み出した事も共通であるから、ベートーベンにしても不圖した動機に曲想が浮んで、不朽の名作を生むに至つた事は想像に難く無い。卽ち本課では大藝術家の美しい一面が語られ、之に依つて藝術の至極境に陶醉させると共に音樂愛好の心を培はうと言ふ、人間味豐かな趣味教材であり、鑑賞教材でもある。此の意味に於て舊讀本から復活した丈の意義があり、存在價値が認められるわけである。

問題のムーンライトソナタは月光奏鳴曲とも譯される。ベートーベンの作品第二十七第二・嬰ハ短調のピアノ奏鳴曲と言ふのが音樂上の正しい曲名である。西曆一八〇一年頃（彼が三十一歲の頃）作曲されたもの

で、實說では彼とギッチァルディ伯爵令孃ユリエッタとの戀愛が動機と成つて此の曲が生れ彼は現に彼女へ此の曲の捧げて居る。曲は三樂章に分れ、第一樂章は嬰ハ短調の自由なソナタ形式、第二樂章はアレグレット變ニ長調のメヌエット形式、第三樂章はプレストアジタート嬰ハ短調のソナタ形式と成り、其の中第一樂章が月光の曲として世に持囃された部分で、幻想的な曲趣に富み聽く人をして恍惚たらしめるのである。然し月光の曲はベートーベンの作曲中最大の傑作では無い。此の曲が最も大衆に分り易く、冥想的な魅力を持つて居るから名高く成つたもの。從つてベートーベンの作曲と言へば、直に月光の曲を擧げるのは音樂に通ぜぬ人の素人考で、矢張彼の晩年の作が其の一代の精華だと爲れて居る。結局本課は其の逸話の一つとして語られたもので、彼の音樂全體に就て語られたものでは無い事を心得て置くべきである。

挿畫の印象と其の說明

百六十一頁の挿畫は勿論想像畫ではあるが、場面や雰圍氣、特にベートーヘンの天才的な風格等、宛然泰西名畫に接したかの感がある。後方に兩手を組んでじつと聽入つて居るのが盲の妹であり、其の後に立つて恍惚たるのは兄、窓際に立つて月光に見入つて居るのがベートーベンの友人である。ピアノは元より舊式で然も極めて粗末であり、樂譜臺に樂譜が無いのは本文にも明かである。四人が四人とも夫々の個性を現した點や、明暗を巧に配して部量一杯に月光の流れ込んだ氣持を見せた點等、一個の繪畫としても味ふべき點が尠くは無い。

文字語句

新出文字

式　盲　激

讀替文字

朽（新出は卷九　クチ）

語句と其の解說

月光の曲　曲名、ムーンライトソナタ（月光奏鳴曲）ベートーヴェン作のピアノ獨奏曲。OP.27 NO.2. 嬰ハ短調。同じ作者のパセティックソナタ（熱情ソナタ）と共に作者の代表的ピアノソナタの一に數へられ、同時に作者の樂器曲全作品中でも最も人口に膾炙したものゝ一（一八〇二年）。三樂章（アダジオソステヌート・アレグレット・プレストアジタート）から成る。盲目の少女の爲に卽興的に作られたと言ふのは後世の作爲で、ヅイメの詩に感激して作られた詩的なソナタ。"月光"の名は作者が全然與り知らぬ所。此の曲は曲首の註に（幻想曲の如きソナタ）とある如く、形式上より見るも內容上より見るも餘他のソナタと異つて居る。三樂章から構成されて居る其の第一樂章は、終始三連音符の緩續から成つて居る緩かに沈んだ調で同一の速度を以て進行して居る。之が普通のソナタであれば當然快速の調で始まるべきである。第二樂章は第一樂章の緩徐曲であるのに對して快速の調で極く短い。殊に『いはば奇怪な物の精が寄集つて夜の芝生にをどるやう』と言ふが如きは廿四小節間の極く

短い部分であつて、素人には一寸分りにくい。第三樂章は全曲中最も長大で且つ純然たるソナタ形式であつて終始極めて快速な調を以て進行して居る。全く『急流の岩に激し荒波の岸に碎けるやうな調べ』で、其の激越なる情調の表現は凄愴全く筆舌の形容外にある。ソナタは普通三樂章乃至四樂章から成つて居る。第一樂章は快速の調を以し進行するのが一般でソナタ全曲の主要な部分を現し、曲全體の曲想は此の第一樂章に依つて知る事が出來る。第二樂章は緩徐調を以て進み、第三樂章は拍子の快活急調なる舞踏曲の形式を用ひる。第四樂章は終曲で大體に於て第一樂章と同樣、極めて快活迅速なメロデーを以て進行するのが常である。

ベートーベン　病弱にして孤獨、然して其の產れた時から運命づけた樣に不幸は次から次へと襲うて來た。然も其の運命は其の不幸な彼に對して何等の障害ともならなかつた。彼は頻りに來る不幸の贈物として歡喜を創造したのであつた。愛を失つた彼、肉體的な不具と成つた彼、それは音樂者に取りては何よりの打擊であつたが、彼は決して之に克服されなかつた。凡ゆる不幸に堪へては新しい境地を開拓する所に彼の强さに對する自覺がある。實にベートーベンは苦惱を通しての歡喜を其の生涯とした人であつた。力强い智的な額、四方に逆立つて一度も櫛を入れた事が無い樣に見える髮、燒土の樣に赤い色をして大きく擴つた顏、小さいが猛烈な閃きを持つて居る眼、下唇が上唇よりもづッと前に突出て居る美しい優雅な口、胡桃を嚙む位は兒戲にも類するだらうと思はれる樣に强い顎、"何者も醫す事の出來ない悲哀"は其の表情である。實にベートーベンは斯かる容姿を備へた人なのであつた。然も其のピヤノの前に座するや、何人も驚愕せずには居られなかつた。『彼の顏面の筋肉は非常に顯に成つた。彼の血管は鞭紐の樣に逆立つた。彼の

眼の猛烈な輝きは一層の强度を增した。彼の唇は興奮に震へて居た。彼は恰度自ら嗅ひ出した總精靈（スピリット）に乘移られた魔術者の樣であつた。』シュリアスベネディクトは彼をリヤ王に擬したとロマンローランは言つて居る。彼は一七七〇年の十二月十六日ボン市の五一五番の貧しい家のみすぼらしい屋根裏の部屋に生れた。祖父はルードヰッヒ、ファン、ベートーベン、白耳義から來て此の市に宮廷樂長の地位を占めたのであるが、其の子卽ちベートーベンの父は大酒家で且つ娼も大酒家であつた爲、家庭的に非常の不幸であつたが、最後まで威嚴ある性格の强さを以て薄命と戰つた。其の性質は實に孫ベートーベンに依つてより强く維持されたのである。彼も祖父の名を襲うてルードヰッヒ、ファン、ベートーベンと言つたのであつた。飲酒家で懶惰で然も頑固であり乍らも宮廷樂手に迄進んだ彼の父は、それでも彼の才能を正當に認識し、之を育上げて大天才として衣食の資を得んとしたのであつた。四歲の時からピヤノの前に立たされた彼は友人との嬉戲をさへも許されず、打擲と叱責を以て其の技を磨かせられたのであつた。十一歲にして劇場の奏樂場に立たされ、十三歲にはオルガニスト（洋琴者）と成つた。世人の賞讃と讃歎を博しつゝもパンを得んが爲活動せねばならなかつた彼は、十七歲にして善良で溫雅であり全家庭に於ける唯一人の持愛者である母を失つた、然も二人の弟を殘して。彼は其の全力をパンを得んが爲に費さねはならなかつた。二人の弟は兄に凭掛つて生活するヤクザ者なのであつた。唯此の慘憺たる生活を慰めて呉れたのはブロイニング家の人々のみであつた。一七八七年彼は十七歲にしてウヰンに行き、樂界の巨星モツアルトに面接して其の技倆を認識された。一七九二年再びウヰンに行き彼は此處に永住する事に成つた。數々の名曲は一七九五年か

ら續々と發表されては世の喝采を博した。然も不幸はあく迄も彼につきまとうた。一七九六年の夏の頃彼は烈しい熱病におかされた。彼は扉や窓を開け、ズボン迄も脱いでもがいたが、其の結果は聽官の故障と成つたのであつた。病勢は日毎に進む。一八〇〇年には遂に其の善き友カール、アメシダを して聽覺の缺陷を宣告するの餘儀なきに至らしめた。彼の有名なる月光の曲は一八〇二年に作られたものである。月光の曲はギッチャルディ伯爵の娘ジュリエッタとの戀に於て彼に捧げたものと言はれて居る。然も彼女は男たらしの子供の樣な利己的な女であつた。殘酷にベートーベンを惱ました後一八〇三年の十一月にガレンベルグ伯と結婚して仕舞つた。又一説には（此の方が確からしい）ソイメの〝新れる少女〟と言ふ詩が此の曲を作るに至つた直接の動機と成つたと言はれる。一人白娘は死刑を宣告された潔白な父の爲に祈に身を悶えて居る。それは聽覺を奪はれた當時の彼の惱みでもあつた。彼は此の動機に出發して自己を擴張し、全體をもつと個人的な表現として居る。（眞否は何うでも宜い。我々は讀本にある樣な美しい傳説として取扱つて行かう）第二の戀も亦破れる。戀は去つた。歸は來つた。然も其の間に彼は尙二十五年の年月を生きて行かねばならなかつた。絶望すべき凡ゆる條件は十分に備つて來る。唯然し〝人間はまだ善事を爲し得る限り、自ら好んで生命を斷つ權利が無い〟と言ふ句に依つて喚びさまされた道德的公正の力に依つてのみ、彼は其の絶望と苦惱を克服して大藝術の創作に從つたのであつた。弟二人は兄の勞作の搾取者であつた。然も次の弟のカールは死んで、其の子卽ち甥のカールは彼の後見の下にあつた。彼は此の甥を非常に愛し立派な教育を與へようとしたが、あく迄も運命に飜弄された彼には、此の甥もゲウタラ者で果てはピストル自殺まで爲

ようとしたのであつた。歸は愈々進み、性質は益々奇矯を加へて、演奏の指揮者となる事が出來無くなつた。彼の死期は近づいた。一八二七年三月廿六日、前年から罹つて居た肋膜炎は遂に彼を死に導いた。友の二人は墓場を選ぶべく墓場へ行つた。枕頭に侍するは義妹と若い作曲家ヒュッテンブレンナーの二人のみである。激しい春の嵐は雹と雷とを伴つて猛り始めた。一つの電光が突然に家の中を激しく照らした。其の時ベートーベンは目を開いた。そして右手を擧げて數秒の間非常に嚴肅な、殆ど威迫する樣な顏の表情を以てジッと高い所を凝視した。それは死ぬ事を欲せざる魂の最後の反抗であつた。そして彼が擧げた手を床の上に横たへた時、彼は目を半は閉ぢた。呼吸が無く心臟の鼓動も無くなつて居た。ヒュッテンブレンナーは逝ける人の半ば開ける目を瞑らせた。斯くて此の樂壇の巨星は長へに此の世を去つたのである。

まだ若い時分　彼がまだボンに居た時の事であつたと考へて取扱はねばならぬ。實際は彼が此の曲を作つた一八〇二年にはウヰンに居た。然し此處では事實を超越して考へ度い。だが事實に近くしようとする人は當然ウヰンとするが良い。

月のさえた夜　とぎすましたやうな月が、一點の雲も無い大空にかゝつて、冷たい光を夜の大地に投げつゝ皎々と輝いて居る。それで無くともヒリツとする北歐の空、清冽水の如き月光は恰も明徹な哲人の沈默とも見えた。之から展開される殆ど神祕的な場面を叙する最初の物として、暗示的の此の語句は決して見逃してはならぬ。

みすぼらしい　破れいたんで見るかげもない粗末な家。其の夜の光景を想像させて見たい。それは異國的な、そして北歐的な石造の家の立並んで居る小さな町である。晴れ渡つた空には氷のやうな月が眞圓く輝き、二階三階の家の影が黑繪の樣に地面に落ちて居る。散歩する二人も

長い影法師を後にひく、之が小路の細民窟に這入ると四邊は薄暗くて物凄い。其の小路のみすぼらしい家である。〝みすぼらしい〟は姿形などのやつれてあはれ氣であること。心がひけて身のすぼまるやうな思がすることであるが、如何に見窄しく粗末な家でも、其の夜は清い月光に恐らく金殿玉樓の姿にも思はれたであらう。然も其の中からは照る月の精にピントを合はせた樣にピヤノの音がもれて居る。はて其の音の主は誰？　**たゞずんで**　しばらく立ち止ること。たゞずむは立ち休むの約である。ピヤノの音にひきつけられた二人は、散歩の足をピタリと止めたのである。其の小路のみすぼらしい家からは家の品位に不似合な美しいピヤノの音がもれる。然もそれは自分の作つた曲であつた。（ムーンライトではない別な曲）音樂家が自分の作つた曲を人が彈いて居るのを聽いた時、然もそれが巧みに彈かれた時の感じは何んなであらう。それは恰も畫家が自分の作品を他家の樹間に見出した時と同樣、如何に其の心が強く動かされる事であらう。彼も其のショックに打たれたのであつた。**耳を澄ましてい**　障害と成る總ての音を去つて、聽覺作用を純粹に極度に活動づけ、能率づけた狀態。非常な熱心と注意で聞き入つて居るさま。此の緊張した眞劍な態度を想像させて欲しい。**まあ、何といふよい曲なんでせう**　面と向つていふ御世辭ではなく、本當に心からの讃辭であつた。多感の彼は此の讃辭を得て如何に強く其の心を動かされた事であらう。　**演奏會**　多くの人が集つて音樂を奏する會合。演奏は衆人の前で音樂を奏すること。演奏會は其の會自體。　**情なささう**　情なきさま。情なき度合。〝情なし〟はつれない。つらひ。はかなくかなしい。〝一度でもよいから〟かうした切な願望も盲ひの彼女には背て果たされもせず、之からも果されさうな望みも無かつた。遺憾と言はん

か、無念と嘆かんか、然も嘆いて詮なき虐げられた境涯は若い彼女の胸を搔きむしつた事であらう。**はいつてみよう**　强いショックは遂に彼をして、何の躊躇もなく一曲ひいてやらうと中に入らしめたのであつた。此の邊に藝術家らしい氣分が横溢して居る。　**一曲**　曲は音樂・歌謠の調子。又は其のうた。ふし（節）曲節。從つて一曲は音樂の一曲節をいふ。だが此處ではそんな正確な意味では無く、單に彈いてやらうの意を强めて言ふ添へ言葉の樣なものである。〝一つ歌ひませう〟〝まあ一ぷく致しませう〟の一つ又は一と同じである。　**舊式**　ふるいかた。時代後れ。新式の對。　**釣込まれて**　釣込むはさそひいれる。おびきこむ。調子にのる。彼はもう禮儀を超越して居る。其處には何等の邪念もなく又何の下心もない。唯自分の作曲に對して最高級の讃辭を得た心の動きから餘儀無くされたのだ。〝御免下さい〟此の唐突さは大天才にのみ許された行動である。　**むつつり**　言葉少く愛嬌の乏しいさま。不愉快さうに默り込んで澁い顏をした樣子。　**當惑の樣子**　當惑の有樣。途方にくれる樣子。當惑は差當り施す手段に惑ふこと。思案に餘り手だてが盡きること。　**我ながら**　自分の事ではあるが。よそごとではないけれども。自分ながら。自分を反省して言つたもので、自分でさへもだしぬけが餘りに度を過して居たのに氣が付いたのである。　**口ごもり**　言葉が口の中に籠つて、よく聞取れぬこと。言葉がつかへて言へないこと。どもる。餘りの突然に羞恥に打たれた妹の顏はサツと赤くなつた。男性である兄は稍敵意を持つた顏に成つて、其の處置に當惑して居る。其處を理窟で行つたら場面は忽ち衝突といふ經過に成つて仕舞ふ。然しベートーベンには我乍ら餘りにも唐突だと思ふ所から來る心の餘裕があつた。彼には輕いユーモアがあつた。　**實はその、**

今ちよつと　口ごもつた調子で讀むべきである。そしてあの四角い顏を逆立つた髮が左右に動いて居る樣を想像して見るが良い。彼の言葉と行動とは今迄の緊張した場面を忽然として弛緩せしめたのである。其處に滑稽美が成り立つ。彼の此の輕いユーモアには、言ふ人も聞く人も思はず微笑まずに居られまい。　**思はずにつこり**　既に其の訪問が突拍子であるのに、其の口を切つた最初の言葉も圖はづれの突飛な、思ひ掛けないものだつたので、かうした貯へられたユーモアは皆を笑はせたのだつた。　**樂譜**　音樂の譜。譜は曲節を示した符號。盲目の彼女が樂譜が無いと言つた點に注意させて欲しい。　**異樣に輝いて**　異樣は異つた形樣。普通と違つたさま。相互の心が打解れば話は順調に進む。彼はピヤノの前に座するに至つた。此の時彼は靈感に打たれたのであつた。屋外に洩れるピヤノの音を聞いた事から、自分の曲を賞讃された事から觸發された心は鼓に藝術的躍動と成つて現れたのであつた。"雨眼は異樣に輝いて、彼の身には、にはかに何者かが乘移つたやう。"斯かる狀態は靈感に打たれ全身全能を込めて製作する藝術家にして初めて見られる境涯である。此の境地からする彈奏は"一音は一音より妙を加へ"人爲を絕した神技に入つて、自分が何を彈いて居るのか意識して居ない樣である。忘我の彼の前に在つては兄弟も友人も全く我を忘れて聞き入る。强い心の躍動を沈默の裏に潛め固唾を呑んで聽き入る。斯かる狀態に在る際には、燈火の"ゆらゆらと動いて"消えたのさへも何だか相應しい樣に思はれる。　**にはかに何物かが乘移つたやう**　雨眼の輝きといひ、其の動作といひ不斷の彼では無くて、急に何者かゞ彼とすり換へられて、彼の身體に乘移つた樣である。總て藝術家が其の神心を込めて事を爲す場合には、斯かる特異の靈感的な狀態に置かれるものである。

此の境地は全く其の强烈な藝術的の淸い興奮に基因するものであらねばならぬ。　**うつとり**　氣を喪つた樣に何の念慮もなく、ぼんやりとするさま。心身を空虛にして、すべてを奪はれ感興に浸り切つて居る狀態。恍惚。　**夢見る心地**　藝術の絕對妙境に陶醉し切つた觀照者の淸い心境を言つたもの。夢心地と藝術的心境とは一脈相通ずるものがある。忘我遊神の境地もそれである。　**そつと立つて窓の戸をあけると**　ベートーベンは彈く手を止めた。それは燈火が消えたからであらう。友人がそつと立つて窓の戸をあける。淸い月の光が流れる樣にさし込んだ。そして其の靑白い光はピヤノを半ば明るいものにし、彈手のベートーベンの頭半分を、顏半分を、彈く手の上を、何たる美しい情景であらう。我々は誰それを一幅の繪として想像する時にのみ、我々の心のカメラにあり〳〵と浮ぶ。四邊の情景は此の月の光に依つて、全く藝術的のものと成つて來た。彈かねども作らねども全身が卽ち聽覺である。純粹聽覺の創作境に立つた彼は、唯默然として項垂れて居るのみである。大天才が現す精神的の偉大さ、それは人に恐れをすら懷かしめるものであつた。兄は此の天才が現す神祕的な威力に打たれたのである。然も其の力の籠つた言葉にすら答へる程の餘間も無かつた。それ程彼の全身は藝術境に浸つて居たのだつた。　**うなだれて**　うなじを垂る。頭を前に垂れるの意で、物を思ふ狀にいふ。うつむく。低頭す。　**嫋がひいてゐた曲を又**　まあ待つて下さいと兄の質問を抑へ、さつき娘が彈いて居た自分の曲を彈き始めた。之でベートーベンである事が兄妹にも呑込めたのである。此の邊の移りの面白さを味はせて欲しい。　**月は、ます〳〵さえわたつて來る**　月は益々冴え、藝術的雰圍氣は愈々濃厚と成る。恍惚と夢心地に成つた三人は更に一曲を所望する。彼は顏を起して

月影限なく星疎らな大空を仰いだ時、忽然として全身聽覺の狀態に在り乍ら作り得ぬ精神の覆被は取去られた。彼は鍵板に向つたのだ。目は爛々として輝き、身體は萬軍を叱咤する將軍の如く緊張する。手が鍵に觸れたかと思ふと妙曲は其の手に依つて綴りなされた。やさしく沈んだ調子、物凄い調子、快速な調べ、總ては書物に依つて其の措辭の巧みさを味ふべきである。作の中心を爲すムーンライトソナタは、蓄音機のレコードを利用すべきは勿論である。　**奇怪な物の精**　奇怪は怪しむべきこと。不思議なこと。あやしい。物の精は物の精髓・根源たる玄妙不可知な或力、又は其の物。精は萬物生成の元氣。精氣。靈。精靈。靈魂。たましひ。　**ぼうつと**　ぼんやりと。ぼうと。ぼんのりと。此處のはうつとりのもつと度を進めた忘我脫魂の狀態を言つたものと解すべきである。　**彼は急いで家に歸つた**　感興に依り靈感に依り一曲を作り成した彼は、更に之を譜表の上に書き現さねばならなかつた。然し之も彼の樣に次から次へ感興の湧起る時に於てゞなければならなかつた。斯くて彼は其の夜まんじりともしないのであつた。此の境地も亦大天才にして初めて言へる事で、事務的であり又あらざるべからざる凡人の企て得ないことである。　**まんじりともせず**　まんじりはまどろむさまにいふ。暫時ねむる。うと〳〵と我知らず眠る。とろりとする。"せず"は其の否定。ちつとも眠らぬこと。非常に興奮して眠くも無ければ眠られもせぬこと。　**不朽の名聲**　不朽は永く世に殘り傳はること。名譽はほまれ。きこえ。評判。名譽。　**博した**　博すはひろくする。ひろめる。又は取る。占む。贏ち得る。彼は不朽の盛名を普くひろく得たのであつた。自國は勿論世界至る所、苟も音樂を知る者として月光の曲と言へば、ベートーベンの譽れを稱へ、樂聖の評判を讃嘆せぬ者の

無いのは、彼の博した聲名の不朽を力强く物語るものである。

資料

出所

Beethoven's Moonlight Sonata.

It happened at Bonn. One moonlight winter's evening I called upon Beethoven; for I wished him to take a walk, and afterward sup with me. In passing through some dark, narrow street, he suddenly paused. "Hush!" he said, "what sound is that? It is from my Sonat in F. Hark! how well it is played!"

It was a little, mean dwelling, and we paused outside and listened. The player went on; but, in the midst of the finale, there was a sudden break; then the voice of sobbing. "I can not play any more. It is so beautiful; it is utterly beyond my power to do it justice. O, what would I not give to go to the concert at Cologne!"

"Ah! my sister," said her companion; "why create regrets when there is no remedy? We can scarcely pay our rent."

"You are right, and yet I wish for once in my life to hear some really good music. But it is of no use."

Beethoven looked at me. "Let us go in," he said.

"Go in!" I exclaimed; "What can we go in for?"

"I will play to her," he said, in an excited tone. "Here is feeling-genius-under-standing! I will play to her, and she will understand it."

And, before I could prevent him, his hand was upon the door. It opened and we entered.

A pale young man was sitting by the table, making shoes; and near him, leaning sorrowfully upon an old-fashioned piano, sat a young girl, with a profusion of light hair falling over her face. Both were creanly but very poorly dressed, and both started and turned toward us as we entered.

"Pardon me," said Beethoven, "but I heard music and was tempted to enter. I am a musician."

The girl blushed, and the young man looked grave aud somewhat annoyed.

"I—I also overheard something of what you said," continued my friend. "You wish to hear—that is, you would like—that is—shall I play for you?"

There was something so odd in the whole affair, and nothing so comical and pleasant in the manner of the speaker, that the spell was broken in a moment, and all smiled involuntarily.

"Thank you," said the shoemaker; "but our piano is so wrecked, and we have no music."

"No music!" echoed my friend; "how, then, dose the young lady—" He paused, and colored; for, as he looked in the girl's face, he saw that she was blind. "I—I entreat you pardon," he stammered, "I had not perceived before. Then you play by car? But Where do you hear the music, since you frequent no concerts?"

"We lived at Bruhl for two years, and while there, I used to hear a lady practicing near us. During the summer evening, her windows were generally open, and I walked to and fro outside to listen to her."

She seemed so shy that Beethoven said no more, but seated himself quietly before the piano and began to play. He had no sooner struck the first chord than I knew what would follow—how grand he would be that night. And I was not mistaken. Never, during all the years I know him, did I hears him play as he then played to that blind girl and her brother. He seemed to be inspired; and, from the instant when his fingers began to wander along the keys, the very tone of the instrument seemed to grow sweeter and more equal.

The brother and sister were silent with wonder and rapture. The former laid aside his work; the latter, with her head bent slightly forward, and her hands pressed tightly over her breast, crouched downnear the end of the piano, as if fearful lest even the beating of heart should break the flow of those magical, sweet sound. It was as if we were all bound in a strange dream, and only feared to awake.

Suddenly the flame of the little candle wavered, sank, flickered, and went out. Beethoven paused, and I threw open the shutters, admitting a flood of brilliant moon light. The room was almost as light as before, the moon's rays falling strongest upon the piano and player. But the chain of his ideas seemed to have been broker by the accident. His head dropped upon his breast; his hands rested upon his knees; he seemed absorbed in deep thought. He remained thus for some time. At length the young shoemaker rose and approached him eagerly, yet reverently.

"Wonderful man!" he said, in a low tone. "Who and what are you?"

"Listen!" said Beetoven, and he played the opening bars of the Sonata in F. A cry of delight and recognition burst from them both, and exclaiming. "Then yon are Beetoven!" they covered

his hands with tears and kisses.

He rose to go, but we held him back with entreaties. "Play to us once more—only once more!"

He suffered himself to be led back to the instrument. The moon shone brightly in through the window, and lighted up his glorious, rugged head and massive figure. "I will improvise a sonata to the moonlight!" said he, looking up thoughtfully to the sky and stars. Then his hands dropped on the keys, and he began playing a sad and infinitely lovely movement, which crept gently over the instrument, like the calm flow of moonlight over the dark earth.

This was followed by a wild, elfin passage in triple time—a sort of grotesque interlude, like the dance of sprits upon the lawn. Then came a swift agitate finale—a breathless, hurrying, trembling movement, descriptive of flight, and uncertainty, and vague impulsive terror, which carried us away on its rusting wings, and left us all in emotion and wonder.

"Farewell to you!" said Beethoven, pushing back his chair, and turning towrd the door—"farewel to you!"

"You will come again?" asked they, in one breath.

He paused and looked compassionately, almost tenderly, at the face of the blind girl.

"Yes, yes," he said hurriedly, "I will come again, and give the young lady some lessons! Farewell! I will come again!"

Their looks followed us in silence more eloquent than words till we were out of sight.

"Let us make haste back," said Beetoven, "that I may write out that sonata while I can yet remember it."

We did so, and he sat over it until long past day dawn. And this was the origin of that Moonlight Sonata with which we are all so fondly acquainted.

指導精神

外國材料ではあるが藝術の至境を極めたベートーベンの功績は、現代日本の精神文化に影響する所が大である。それは恰も電話に於けるグラハムベルが物質文化に貢献する所大であるのと好一對である。本課はナショナルリーダーの Beethove'n Moonlight Sonata に據つたもので、原文の意味を損じない樣に書直したものである。ベートーベンのムーンライト（月光の曲）は、ベートーベンの作としては傑出したものでは無い。樂聖ベートーベンとしては之に勝る名曲が少く無いが、斯うした傳說が附隨して居る爲、餘り名作でも無いムーンライトが名高く成つて居る。所が此の傳說も實は疑はしいもので、實際はウキンの郊外の或別莊で作つたものとされて居る。さうして其の內容も月光の美しさを稱へたものでは無く、當時の彼が胸中の惱みを述べた幻想曲で、頗る陰鬱な曲である。曲名がムーンライト（月光）と言ふから一般には優美な曲と解して居る人も少く無いが、曲其の物は至つて陰鬱な幻想曲である。

ベートーベンは四歲頃からピアノの前に立たされ、一家の人々を餐ふ爲凡ゆる苦難を嘗め、苛酷な父の仕打に幾度か悲しい涙を流したが、之が轉て彼をして大音樂家たらしむる因であつた。彼は生れ乍らにして是丈の苦しみを通り越さなければならぬ運命に遭遇したのである。彼は年少にして懷しい母に別れ、母の死後は大なる希望を持ち乍ら一家の若き主人として家族を背負うて行かねばならなかつた。彼は此の生活の苦闘

の中に非凡の天才を發揮したのであるが、不幸にして音樂家として無くてならぬ耳を失ひ、彼が半生は聾としての苦しい一生を過さねばならなくなつた。彼は泣いて叫んだ。

『人間は總て斯うした運命に泣かなければならないのだ。夏の空が俄に掻曇り、浴せ掛ける樣な雨と共に鳴響く雷鳴に、旅人は慌てふためいて、皆其の宿るべく木蔭を見附けるだらう。然し其の際誰の宿つた木の上に落雷するか、それは何人も知らない筈だ。助けの神と思つて宿つた木は、自分の體を打倒く恐しい惡魔の巢だ。凉しい風に吹かれようとして却て大惡熱を喚び起し、遂に聾の悲慘に陷らなければならなかつたのは矢張運命だ。此の運命は却て幸福であつたかも知れぬ。然し斯んな運命に泣いて居る者は自分一人では無い。同じ悲しみに悶へて居る人が幾人あるであらう。』

ベートーベンは人間の苦しむべき苦しみを總て味ひ盡した。さうして自分の苦しみから萬人の苦しみを考へ、他人の悲しみを自分の悲しみとして悲んだ。此の苦惱と戰ふ爲に彼は其の全力を傾倒した。彼に取つての生活の困難は轉て全人類の生活の困難に同情し、彼の母の死に對する歎きは轉て凡ゆる人々の母を失つた悲しみと成り、自分の聾の惱みは一般不具者に對する憐みと成つて表れた。さうして其處に幾多の大作が產み出されたのである。月光の曲も斯うした彼の苦しい體驗から產み出された作品の一つである。

或町外れの貧しい家に一人の少女があつた。彼の父は或罪を犯したと言ふ名の下に死刑を言渡された。然し父は潔白の身であつた。か弱い一人の娘は父の死刑を聞いて、どんなにか歎いた事であらう。少女はそれを何うする事も出來無かつた。唯

『天に坐す神よ、我が愛しき父の爲に有難き惠を下し給へ。』

と神の前に禱り悶へるのみであつた。

此の場面を詩に作り出したのがソイメの『禱れる少女』であり、此の悲劇の音樂と成つて表れたのがベートーベンの『月光の曲』である。

澄み渡つた月夜、ベートーベンは此の美しい月の光を浴び乍ら、死刑の宣告よりも更に傷ましい自分の身の上を考へた。

『自分は今聾と言ふ息つても悲しい宣告を天から與へられたのだ。さうして最早以前の樣に美しいピアノの音も、可愛い鳥の聲も、又懷しい牧場を守る少女の唄も、戀しい友達の聲も聞く事は出來ないのだ。おゝ、神よ、我に今一度完全な耳を與へ給へ。聾の悲しみから救ひ給へ。』

と運命の神に對して、少女の力よりも尙一層弱い一人のベートーベンが、彼に宣告された傷ましい病氣の全快を禱る哀れな心が此の幻想曲と成つて表れ、人類の歷史が始つてから其の滅亡に至る迄の人々に與へられた運命の悲しさが、それに依つて表現されて居る。かやうにベートーベンの心の中にある喜怒哀樂が大きな人生、又は世界の喜怒哀樂として、然もそれが彼の音樂の才能に依つて表されたのだ。如何に困難な生活に在るとは言へ、彼は麵麭の爲に曲を作ることを好まなかつた。何處迄も心の內に在るものを表さなければ措かれない所から、自然に泉の湧き出る樣に彼の曲が生れた。

ベートーベンのムーンライト（月光の曲）は斯うして出來たものだが、それが此の敎材のやうに傳說化され全く違つた意味に解釋される事に成つた。此の傳說もナショナルリーダーに出て居る丈で、其の他の文獻には殆ど見當らない。だが此の傳說に依つて此の曲が世に紹介され、世界の人々に愛好されて居るので有る

から、本課も矢張其處を狙つて傳說を傳說の儘に取扱つて居る。指導者も此の意を體して傳說を傳說の儘に取扱ひ、何處迄も文に即して藝術家の藝術家らしい人間味豐かな點を味はせて欲しい。尙本課はムーンライトソナタ（月光奏鳴曲）の曲其の物が中心と成つて居るから、指導の際適宜演奏して聞かせ、曲の微妙な點を味はせると共に『指がピヤノにふれたと思ふと、やさしい沈んだ調べは、ちやうど東の空に上る月が云々』の比喩を具體化する用意が肝要である。ムーンライトソナタは難曲ではあるが、蓄音機のレコードにも入つて居るから、それを利用すれば專門家を煩さずとも取扱は容易であらう。

指導形態

指導上の認識點

1　ベートーベンが其の世界的名曲たる月光の曲を創作した前後の物語を讀ませ、彼の人間味豐かな事と、其の藝術的心境の透徹した點に感激せしめる。

2　藝術の胎は愛だと言ふ事も斯うした物語から合點させ、音樂の味ひ方に就ても自づと會得する所あらしめ度い。

3　尙ベートーベンに就いて多少の補說を加へ兒童の音樂性を啓培すると同時に偉大な樂聖の生涯からも何者かを學ばしめ度い。

4　指導に際して文中の核たる月光の曲のレコードは勿論、挿繪や肖像や樂譜等を活用して印象を具體的ならしめると共に、作の性質から自然劇化實演の指導へと發展させ、所謂行動學習・立體把捉の主張を實にする心構が肝要である。

5　本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽板書して讀ませ疑問符を附した儘直ちに讀みに入るが良い。此の際內容に觸れるのは絕對に慎むべきである。

2　一度靜に通讀させる。
▽何んな話か・何が感心なのか・話の中心點は何か等。

3　話の荒筋を摑ませる。
▽時？　處？　人物？　事件？　心の動き等

4　讀後の第一印象を記帳させる。
▽教師は机間を巡視して兒童の學習態度や動向を察知する。

5　質疑應答。
▽新出文字は其都度補導して字書を索引させる。

式　盲　激　朽
▽難語句は先づ類推させてから指導する。
音樂家　みすぼらしい　戸外　たゝずんで　家賃　舊式　不意の來客　釣込まれ　むつつり　當惑　だしぬけ　盲　異樣　一轉　奇怪　物の精　急流　岩に激し　調べ　感激　まんじり　不朽　名聲　博した

6　音樂的熟語の取扱。
▽音樂特有の名詞や術語は其の都度板書して入念に指導する。
音樂　ピヤノ　演奏　演奏會　一曲　樂譜　月光　の曲

7　指名讀。
▽適宜に句切つて、數名に。

8　文意の所在を探らせる。
▽把束した文意は記帳させて置く。

9　話合。
▽前項の文意や讀後の感想を中心に。

10　低音讀。
▽聲を出して反覆通讀させる。

11　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　輪讀。
▽座席順に、又尻取式に。
2　會讀。
▽グループ毎に問題を作製させて。
3　指名讀。
▽大きく句切つて、何人かに。

時　月のさえた夜
所　ドイツの或町
人　ペートーベン
　　其の友人
　　盲の少女
　　其の兄

（1）月夜の散歩

ピヤノの音↑みすぼらしい家↓

『あれは僕の作つた曲だ。』（耳を澄して）

4　質疑應答。
▽質疑は先づ級決に俟つて後指導する。
5　文意の檢討
▽前次に摑んだ文意を確める。
6　話合。
▽文の觀點を中心に。
7　逐次研究。
▽頃合を見て次の要領を謄寫して配付する。

（2）『何といふよい曲なんでせう。』（若い女の聲）

『はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。』

『そんなことを言つたつ仕方がない。』（兄の聲）

（さな情）

（3）薄暗いらうそくの火のもと

色の青い男　靴を縫つて

（不意の來客）

（驚いた）

舊式のピヤノ

妹　よりかゝつて

『御免下さい。私は音樂家ですが……』

妹の顏は……（さつと赤く）

餘りだしぬけだと（口ごもりながら）

兄はむつつり……（當惑の樣子）

（ペートーベン）

『實はその、今ちよつと……まあ一曲……』

『え、樂譜がない。』

（見ると、妹は盲である）

『いや、これでたくさんです。』

（少女の兄）

『有難うございます。しかし……それに樂譜も……』

（……）

（4）最初の一音——（すでに不思議）　きやうだい（うつとり

—兩眼は異様に輝き

ペートーベン—何物かゞ乘移つたやう

—一音は一音より—妙を加へ—神に入り—（自らも覺えない）

夢に夢見る心地

友人（我を忘れて）

—友人は窓の戸をあけると—月の光（流れるやう）

（5）燈火……（ぱつと消え）

—ペートーベンはひく手を止め—

『一體あなたは……』『兄は恐る〳〵』

『あゝ、あなたはペートーベン先生……』

『まあ待つて下さい。』（又ひき始めた）

（6）『どうかもう一曲。』『それでは、此の月の光を題に……』

—やさしい沈んだ調べ……（月がやみの世界を照らすやう）

指がビヤノにふれたと思ふと

—一轉すると、今度は……（ものすごい、奇怪な物の精）

—最後は又……（急流の岩に激し、荒波の岸に碎けるやう）

三人はぼうとつ

（7）（ペートーベン）

『さやうなら。』

『參りませう。』

（ふりかへつて盲の娘を）

急いで家に—月光の曲—（不朽の名聲）—まんじりともせず—此の曲

（きやうだい）

『先生、又お出でなさいませうか。』

7　話合。
▽前項の文圖を中心に。

8　文と挿畫を照合させる。
▽何處を畫にしたものか・書物に何う出て居るか・何う思ふか等。

9　默讀。
▽文の觀點に注意させて。

10　對話的朗讀。
▽箇所を分擔させて、劇的に。

11　ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1　通讀練習。
▽適宜に句切つて、輪讀式に。

2　指名讀。
▽中・劣生を主として。

3　話合。
▽文意や感想を中心に。

4　文意の檢討。
▽表現面に即して例證させる。

5　默讀。

▽前項の文意を體認させる意味で。
6　話方練習。
▽場面を生かし、劇的に。
7　演習。
▽學級總掛で脚本化させる。
8　劇化實演。

テスト問題

一、次の空所に適當の字を入れなさい。
1　にいさん、まあ、○といふよい○なんでせう。私には、もう○○○ひけません。ほんたうに○○でもよいから、○○○へ行つて聞いてみたい。
2　御○下さい。私は○○○ですが、おもしろさについ○○まれて參りました。
3　曲が一轉すると、今度は○○にものすごい、いはゞ○○な物の精が○集つて、夜の芝生に○○○やう。

二、次の語句を置換へて意味の通る文に直しなさい。
（1）急いで　其の夜は　家に歸つた　譜に　さうして
（2）若い男が　薄暗い　縫つてゐる　らふそくの　元氣の
（3）ございます　ございませんが　それに　しかし　まことに

▽背景其の他は工夫させて。
9　視寫・聽寫練習。
10　新出文字の書取。
11　語句の應用練習。
12　テスト

机に向かつて　靴を
彼は　色の青い
まんじりともせず　火のもとで
かの曲を　ささうな
書上げた

三、次の熟語に振假名を附けて解釋しなさい。
1　舊式　2　樂譜　3　一體　4　當惑　5　演奏
6　奇怪　7　異樣　8　物の精　9　名聲　10　不朽

教材の劇化

月光の曲

時　月のさえた夜
所　或さびしい町の小路
人　ベートーベン
其の友人
貧しい靴屋
其の妹（盲）
舞臺　靴を五六足臺（机）の上におき、兄がそれを直してゐる。わきに卓上ピアノかオルガン（ピアノ代用）でもあしらひ、そこへ盲の妹が坐つてゐる。あたりは張紙やら粗末な着物やらをあしらつて、貧しさを思はす。燈火がしよんぼりとともつてゐる。

ピヤノで
有難う
粗末な
樂譜も

（幕があくと、兄はせつせと靴を直してゐるし、盲の妹はピアノをひいてゐる。そこへ突然上手裏で聲がする）

ベー　あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聞き給へ。なか〳〵うまいではないか。

（聲は其のまゝとぎれる、此の時妹はピヤノの手を止めて）

妹　にいさん、まあ、何といふよい曲なんでせう。私には、もうとてもひけません。ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聞いてみたい。（と、情なささうに言ふ）

兄　そんなことを言つたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。

（と此の時、又上手裏で聲がする）

ベー　はいつて見よう。さうして一曲ひいてやらう。

（と、急に戸をあけてはいる。友人も續いてはいつて來る。二人は不意の來客にさも驚いたらしい樣子）

ベー　御免下さい。私は音樂家ですが、おもしろさについ釣込まれて參りました。

（餘りのだしぬけさに妹の顏はさつと赤くなる。兄はむつつりとしてやゝ當惑の樣子。ベートーベンも氣が附いたらしく、口ごもりながら）

ベー　實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが――あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふことでしたね。まあ一曲ひかせて頂きませう。

（とぶつきらぼうにいふ、其のをかしさに一同はにつこりする）

兄　有難うございます。しかし、まことに粗末なピヤノで、それに樂譜もございませんが。

ベー　え、樂譜がない。

（と言ひさして、ふと見ると、かはいさうに妹は盲である）

いや、これでたくさんです。（と、ピヤノの前に腰を下し、すぐひき始める。皆は目をみはる、だん〳〵ひいて行く、ベートーベンの兩眼は異樣に輝いて、彼の身にはにはかに何者かが乘移つたやう。一音は一音と妙を加へ神に入る。一同感に打たれる樣子）

（間）

（折しも燈火がぱつと消える。ベートーベンはひく手を止める。友人が立つてそつと窓の戸をあける、月光が流れ込む樣子、ベートーベンはだまつてうなだれてゐる）

（間）

兄　（恐る〳〵）一體あなたはどういふお方でございますか。

ベー　まあ待つて下さい。

（とおさへ、さつき娘のひいてゐた曲を又ひき始める）

兄妹　あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。（と思はず口を揃へて叫ぶ）

（ひき終るとベートーベンはつと立上る。三人はあわてゝ）

三人　どうか、もう一曲。

もう一曲お聞かせて下さい。

（せがまれてベートーベンは再びピヤノの前に腰を下す）

ベー　それでは、此の月の光を題に一曲。

（と、しばらく澄みきつた空を眺め、やがてピヤノをひき始める）

――此の時舞臺裏で月光の曲のレコードを掛ける――

（一同、たゞ感激してうつとりする）

ベー　さようなら。

（と、立つて出かける）

兄妹　八口を揃へて）先生、又お出で下さいませうか。

ペー　参りませう。

（とにつこりし、ちよつと振返つて盲の娘を見てほろりとする。表情よろしく）

――幕――

第二十四　月の世界

前に芭蕉の名句名月やの俳句を擧げ、尋いで月光を讃美した名曲を物語とし、本課では幻想的な過去の概念から蟬脱して現實的の月に直面させ、其の神秘極まる月球の科學的究明に今更の如く驚異の眼を見張らせて居る。

本課に依つて兒童の月に對する觀念が忽ち一變するに違ひない。是迄も月に對して神秘な謎を抱いて居た事であらうが、其の神秘さは單なる幻想でお伽噺の域を脱して居なかつたのが、忽ち一轉して科學的神秘の境に向けられる事であらう。尤も前にも"星の世界"を學んで宇宙と言ふ無限大の廣さの中に驚異の眼を向けるに至つたで有らうが、兎が餅を春くかに見えた月の斑點が實は火山の影だと知るに至つて、一瞬昨日迄の迷夢が醒め果てる事であらう。

地球と月との平均距離が 384403キロメートル と言ふ、微細な然も嚴密な數字迄究明された今日の天文知識に驚かざるを得まい。即ち本課に於ては月に對する科學的新智識が授けられるのみで無く、科學界と人智の深奥さとを暗示し、兒童の學究熱を愛り一種の宇宙觀を構成させる教材ではあるまいか。

挿畫の印象と其の説明

百六十七頁は月の半面が太陽の反射に輝いたウイルソン天文臺撮影の望遠鏡寫眞である。此の寫眞面で鼠

色した部分が窪地、地球ならば海洋に當るべき箇所である。月の寫眞撮影に成功した最初の人は、アメリカの天文學者ウィリアム・クランチ・ボンドであつた。彼は天體觀測用の樣々の器械を發明し、一八五〇年初めて月の寫眞撮影に成功した。其の後各天文臺で月の撮影が研究され、アメリカのウィルソン天文臺では百吋反射望遠鏡を用ひ、此の挿畫の樣な素晴しい寫眞が續々と撮影されるに至つた。極最近に於ける同天文臺の撮影法に依ると、假に月の表面にツェッペリン航空船位の大さのものが飛んで居るとしても、之を明瞭に撮影し得ると言ふから全く驚嘆の外はあるまい。

文字語句

新出文字

測（ソク）　觀

讀替文字

滴（シタタリ）（新出は卷十、テキ）　險（ケン）（新出は本卷、ケン）　常（ツネ）（新出は卷七、ジャウ）

語句と其の解說

月の世界（ツキノセカイ）　月は地球の衞星。太陰とも言ふ。直徑は八八七里（地球の約四倍）地球からの平均距離九七、八八〇里（三八四、四〇四粁）質量は地球の約1/81、比重は水を一として地球が五・五であるのに對し、月は三・四である。之が天空に畫く軌道を白道と言ふ。月には空氣殆ど無く、從つて水分も殆ど存在せぬ樣である。之は重力が小である爲、雰圍氣を拘束し得ないからであらう。其の表面は肉眼を以て觀るも多少の斑紋を認めるが、一たび望遠鏡を以て之を窺へば、其の面の頗る高低起伏に富むを

發見するであらう。之は水の浸蝕作用が無いから、高山深谷は依然として其の舊態を保つが故であらうといふ。概して連山は翠で、多くは各箇獨立の圓坑形山嶽である。これらの山嶽は多く學者の名を附せられて居る。例へばコペルニクス（月面の中央部に近く、直徑一八里）ガッセンヂ（東部に位置し、直徑二二里）チホ（東南に位置し、直徑二二里）プラトン（北部に位す、直徑二八里）プトレマイオス（中央部に位置し、直徑三四里）エウドクスス（北部に位す、直徑一四里）アリストテレス（北部に在り、直徑一九里）等がそれである。

天體望遠鏡（テンタイバウエンキャウ）　光の波動說の創說者ホイヘンスは彼の著書中に、近き將來偉大な天才に依つて光學の一應用として必ずや望遠鏡なる光學機械が發見されるであらうと豫言した。英・伊・蘭・獨等各國の發明家は此の名譽を獲得せんと相競つたが、終に一六〇八年オランダミッドルブルクの眼鏡商 Hans Lippershey が發明を完成し特許を請求した。其の後再び双眼鏡を發明し、之も特許を請求したが、二つ乍ら許可せられずに終つたけれども、時の政府の補助を得て彼は益々研究を積んだと言はれて居る。イタリヤの天文學者ガリレオは此の望遠鏡の發見を耳にしたが、其の詳細な構造を知る由も無かつたので苦心の結果、自ら工夫を凝して翌一六〇九年平凸レンズと平凹レンズから成る短い望遠鏡を發明した。之が後世に於てガリレオ型と稱せられるもので、フロレンスの科學博物館には今尙其の業績を偲ばせて居る。

觀測（クワンソク）　觀察して運行等を測量すること。天體觀測に用ひる望遠鏡には屈折式と反射式とがある。屈折式望遠鏡は凸レンズを以て光を集める型式で、之に亦ガリレオ式とケプラァ式の二種類がある。ガリレオ式は接眼部に凹レンズを用ひ、觀察者は物體の虛像を見る樣にしたものであり、ケプラァ式は接眼部の廓大裝置が凸レンズ

で、從つて觀察者は物體の實像を見る樣に成つて居る。此の兩種の區別は全く廓大部の差であつて、兩々相比較し得失を言へば、ガリレオ式は比較的小形であるから持運に輕便で自然にレンズ系の色收差を減ずる樣に成つて居る利益はあるが、像が虛像である爲焦點に測微尺を置いて測定用に使用する事が出來ない。之に反してケプラア式は實像を取扱つて居るから焦點に種々な特別裝置をして測量に使用する事が出來るが、色收差が免れ難いので個々のレンズを適當に選ぶ事が必要である。視野もケプラア式の方が廣い。だからガリレオ式のものは所謂オペラグラス等として一時可なり廣く用ひられたが、近年プリズム入りのオペラグラスが流行し、之は全くケプラア式の裝置を短小輕度にした構造であるから、漸次ガリレオ式は影を潛めるに至つた。從つて現在から將來は殆ど大小何れの屈折望遠鏡もケプラア式の全盛時代と思はれる。次に反射式望遠鏡であるが、之は凹面鏡で集光する望遠鏡で殆ど專ら天文用である。從つて構造も複雜で素人には一寸分りにくい。種類だけを言へば、(1)ニュートン式反射鏡、(2)グレゴリ式反射鏡、(3)カスグラン式反射鏡、(4)ハーシェル式反射鏡等がある。本課で言ふ手製の天體望遠鏡は、長さ一米ばかり、筒はボール紙・レンズは上等と言ふ丈で、レンズの種類や構造等の說明は無いか、前後の問答から想像して之は恐らくガリレオ式の屈折望遠鏡であらう。

視野（シヤ）　視力のとどく範圍。即ち眼を動かすこと無くして見得る範圍をいひ、視線を基準として角度を以て之を表す。健常視野は外方最も廣く、內方及上方が最も狹い。一眼の場合を隻眼視野、兩眼の場合を兩眼視野といふ。視野の範圍は視線と視野に入り來る限界印象との角度に依つて示され、視られる對象の色に依つて相違がある。

生々しい（イキイキ）　勢盛んで活動しようとするさま。氣生

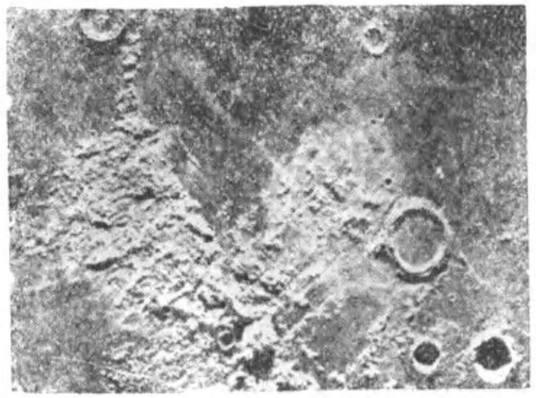
盛んなさま。後の死の世界と照應して居る。

あひづちを打つ　相槌は互に打ちあはせる槌。むかひづち。相槌を打つは人のことばに調子を合はせる。口を合はせる。

でこぼこ　物の表面が或は高く或は低く平かで無いさま。凹凸。でくぼく。

あばた　梵語、頗浮陁（アブタ）の轉。痘瘡のあと。じやんこ。いも。痘瘢。

噴火山（ンクワザン）　噴火する山。噴火は火山から熔岩又は水蒸氣等の噴出すること。月面上で最も興味があるのは俗に噴火口と呼ばれる輪狀山で、全數三千三百個を超え、概して非常に大きい直徑を持ち、二〇〇粁以上のものさへ一〇箇程もある。其の成因に就いては噴火と流星落下の兩說が唱へられて居る。此の山の高さの測定は日光に依つて生ずる陰影の長さから割出されたもので、それらの山々や海に當る凹地平原は、地球と同樣にボンテクーレル・ファネクウス・南の海・靜寂の海等と一々名稱が附せられて居る。



（アペニン山脈とアルキメデス山附近）

すつかり冷えてしまつて（ヒ）　月の溫度は西曆一九二七年六月、天文學者のニコルソンとプチーに依つて測定された。即ち月蝕の際に輻射計を以て測定したもので、それに依ると月蝕の直前に攝氏七〇度、皆既直後には氷點下六〇度に下り、皆既の終りには一二〇度に下つたと報告されて居る。此の點から見ても月の世界には絕對に生物の棲息が出來ないものとされる。

天體（テンタイ）　日月星辰など天空を

成す物體。卽ち太陽・惑星・慧星・流星・恒星等の總稱。　**死火山**　最早火煙をはかぬ火山。卽ち其の構造から言へば火山であるが、既に死滅して其の後殆ど活動を爲したこと無きもの。休火山。熄火山。　**斑點**　まだらに散在する點。まだら。ぶち。月の表面には水も空氣も殆ど無く、荒涼たる凸凹起伏の連續で、肉眼で見える暗色の部分は一般に海と呼ばれ、輝いた部分は陸と呼ばれて居る。然し之は古人が考へた樣に海では無く、たゞ岩石の色彩の黑いのが布置されて居るに過ぎない。だから本課も〝海といはれる部分ですが〟とある。注意して欲しい。　**熔岩**　岩石が地熱の爲にとけたもの。火山の地下岩漿から噴出する。最初は灼熱せる粘稠性の流動體で、其の中に多量の氣體を含んで居るから、それが冷却して凝固すると、水蒸氣其の他の氣體は逸出して多孔質の岩石と成り、外觀は一見鑛滓又は海綿に似た形を呈する。

（アルプス山脈とプラトン山附近）

氣象現象　空氣中に生ずる物理的變化の現象。寒暑・晴曇など。天の模樣。天氣。天象。月の表面は峨々たる岩石の荒野に過ぎず、凡ゆる氣象現象や生物等は一つも無い。大氣が無いから日中太陽の近傍に恒星は燦々として輝き、從つて薄明現象も無く突如日が上れば世界は光明界と化し、日沒と成れば俄然暗黑界と成る。月は全く死の世界である。　**調節**　物の釣合を適度にとゝのへること。程よ

く取扱つて過不及の無い樣にすること。又器械の運轉等の釣合を整へ、具合よく適度の働を爲さしめること。　**昔から月程やさしい、平和な氣持を**　故芳賀博士は言ふ、むかし顯基中納言といふ人は、〝罪なくて配所の月を見ばやゝ〟といつた。月夜の玲瓏隈なき光は俯仰天地に愧ぢることなき心を以て眺てこそ、肝膽相照らす友である。眺められる月に一點の曇もなく、ながめる我が心に一塵の汚もないうるはしさ。良心の眞澄の鏡は卽ち皎然たる月の光に外ならぬ。ぬば玉の闇の世の中、澄み上る一輪のさやけき光は我が心に對しての唯一の照鑒者である。月の面を往來する浮雲よ、動ともすれば、我が心を亂さうとする誘惑では無いか。天地間の萬物は皆多少の濁りを帶びて居れば、何物を見ても恥ぢるを知らぬ人でも、一片皓月の明光に對しては、自ら襟を正さゞるを得ない。一切の邪念・あらゆる忘想は、これに對して拂ひ去られるのである。若し心の底に何等かの疚しい點があれば、月に對して懺悔しなければならぬ。罪ある人の目で此の影に對したならば、清淨の光は恐らくは後悔の涙に宿るであらう。慈悲の色も却つて焦熱の炎かと思はれるであらう。嗚呼今の世の汚れた世の中に、よしや配所に行かず、獄窓に入らずとも、獨り自ら顧みて、月に對して耻ぢない人は幾人あるか。心靜かに月を見て、心靜かに月を樂しむ人は、世に一人の友もなく一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天地に愧ぢない人である、と。　**月と文學**　月に關する歌や詩や俳句は數限りも無い。試みに其の重立つたものを幾つか拾つて見る。久方の天行く月をつなにさし我が大君〃きぬがさにせり（柿本人麿）海ならずたゞよふ水の底までも淸き心は月ぞ照らさん（菅原道眞）久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな（菅公の母）あをうな原ふりさけみれば春日なる三笠の山に

出でし月かも（安倍仲麿）都にて山のはに見し月なれど波より出でて波にこそ入れ（紀貫之）照りもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき（大江千里）君すめばこゝも雲井の月なれど尙戀しきは都なりけり（左馬頭行盛）世のうさにひとかたならずうかれゆく心定めよ秋の夜の月（西行）うれしとやまつ人毎におもふらん山のはいづる有明の月（西行）ふけにける我が身の影を思ふまにはるかに月の傾きにける（西行）たび人の同じ道にや出でつらむ笠うちきたる有明の月（阿佛尼）あさみどり花も一つにかすみつゝおぼろにみゆる春の夜の月（菅原孝標女）心にもあらでこの世にながらへばこひしかるべき夜半の月かな（三條天皇）かくばかり經難くみゆる世の中に羨ましくもすめる日かな（多武峰少將）思ふこと無くてぞみましほの〳〵と有明月の志賀の浦波（花山院師賢）なか〳〵に心つくしの浮雲も光を添ふる在明の月（本写春庭）曇りなき心の月の薩摩潟沖の波間にやがて入りぬる（月照）曇りなき月を見るにも思ふかな明日はかばねの上に照るやと（吉村重卿）今日もまた知られぬ露の命もて千年も照らす月を見るかな（久坂通武）去年今夜侍清凉、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香（菅原道眞）霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、遮莫家鄕憶遠征（上杉謙信）鶴鴿原遠月孤明、欲出關門且駐行、應惜平生廣陵散、鋏衣風露夜吹笙（賴山陽）月明如晝宴嘉賓、老兎寒蟾助主人、欲及露晞天向曙、未曾投轄滯銀輪（島田忠臣）殘月滴露濕人袂、曉風吹面覺秋冷、勿驚大蛇當路橫、拔劍欲斬老松影（月田蒙齊）月上花梢清影移、分明水墨寫瓊姿、坐來更借短娥手、添得窓間三五枝（山梨稻川）牀前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故鄕（李白）金爐香盡漏聲殘、剪々輕風陣々風、春色惱人眠不得、月移花影上闌干（王安石）

春宵一刻直千金、花有清香月有陰、歌管樓台聲細々、秋鞦院落夜沈沈（蘇東坡）獅子舞の酒屋を出たり春の月（宗讃）波先や勢田の水行く朧月（猿雖）月涼し荒瀨をころぶ石の音（彩雲）野の末や刈葱畑を出づる月（鬼貫）月天心貧しき町を通りけり（燕村）中秋や潮より低き芋畑（公卿人）猪の寢に行く方や明の月（去來）夕月夜行燈消して暫し見ん（卜枚）ひたひたと夕月よする蘆邊かな（斗人）秋もはや下弦の月の曇りかな（萬籟）初月や雲に夕榮の名殘あり（竹湍）新月に蕎麥打つ草の庵かな（凡董）十六既望淋し芒流るゝ加茂の水（水巴）半ば讀む明石の卷や居待月（幸日）後の月瑞穗の國の夜なりけり（鬼城）荒鷹の身ぶるひ鑿く澄む月夜（護物）我庭の月に糊する隣あり（露月）啄木鳥の月に驚く木の間かな（樗堂）芋狩や頭を擧れば峯の月（燕村）冴えきつて小さき月や海の上（五明）この木戸や鎖のさゝれて冬の月（其角）寒月や里を離れて蘇鐵寺（梧月）聲かれて猿の面白し嶺の月　其角）女郎花臥すや夢野の晝の月（鳴雪）

月がなかつたら　芳賀矢一博士の　〃月雪花・やうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月はながめて親しみ易い。太陽が一たび出ぬば群靄皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破される光景であるが、月輪は萬象を一つに包んで貴賤貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈悲の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の影・寒地の氷の家、眺

める人の心々は違ふであらうが、限なく世界を照す月光の人心の胸懷に必み渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。〝うち向ふ月は一つの影ながら浮ぶは千々の思ひなりけり〟〝千萬里外音爭於吾家之光〟のである。東西古今、喜悲・苦悶の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を嗟嘆し、之を吟咏した詩歌の感吟は世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者は曰ふ、月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊であると、此の冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか。又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である、と。蓋し本課も此の邊を參考したものであらう。

指導精神

前卷の〝星の話〟と好一對の教材で、說明の行屆いた點や童心にぴつたりと觸れた點等、全く此の筆者の獨擅場である。觀點は望遠鏡に依る月の觀察と、月と人生とを交渉させ幼稚乍ら宇宙觀の芽生を培つた點に在る。題材の月は太陰とも言ひ、地球に最も近い天體で其の平均距離は三八四、四〇四粁。地球が太陽を中心として公轉すると同じく、月は又地球を中心として公轉する。斯く惑星の周圍を廻轉する天體を總て衞星と言ひ、月も其の一つである。月が地球を一周するには二十七日三分の一を要し、其の間に自らも一回自轉する。卽ち月の公轉と自轉との週期が同一なわけである。月の赤道直徑は三、四七六粁で、其の容積は地球の五十分の一、質量は約八十一分の一、比重は水を一として地球が五・五で有るのに對し、月は三・四である。月の表面には大氣も水も殆ど無く、唯荒凉たる凸凹起伏の連續で、凡ゆる氣象も現象も無く、勿論生物等も棲

息して居ない。大氣が無いから鮮明現象も無く、突如日が上れば世界は光明界と化し、日沒と成れば俄然暗黑界と成る。滿月の夜に月面を觀望した際、種々の薄暗い斑紋が有るのは古人が考へた樣な海では無く、唯岩石の色彩の黑いのが布置されて居ると言ふに過ぎない。又所々に噴火口を認るが、之は古代噴出した遺跡で、月は今全く死の世界である。

月が天球に畫く軌道を白道と言ふ。白道が黃道と爲す角度は五度八分餘で、地球を一周する時間と自身が一回轉する時間とは何れも二十七日七時間餘であるから、月は常に同一の面を地球に向けて居るわけである。然し自轉は一樣だが周轉には遲速があるから、多少の動搖が有つて裏面を幾分現すものである。此の現象を秤動と稱して居る。尙月は太陽の光を受けて輝くので有るから、それと關係的位置に依り形貌を異にする。太陽と同方向に在る際は見えず、之を朔と言ふ。尋いで新月と成り、九十度を距てれば上弦と成り、正反對の位置を占めれば全圓卽ち滿月と成る。之を望と言ふ。斯くて更に下弦と成り再び新月と成る。此の一周期の平均の長さは二十九日十二時四十四分二秒八である。若し軌道が黃道と合致して居たら、朔每に月が太陽を掩うて日食を起し、又望每に地球の影に入つて月食を起す理であるが、實際は傾斜がある故、唯交點の附近で朔若くは望と成る場合にのみ食を起すのである。本課は既習の『僕の望遠鏡』や『星の話』と連絡させて取扱ふべき教材で、之に太陽の話が加はれば宇宙に關する天文學的智識は一通り整理される譯である。

指導形態

指導上の認識點

1　本課の指標は既習の『僕の望遠鏡』と關聯させ、作業を中心とした天體觀測に依る科學趣味を發ふと同時に、我々の生活に至大の關

係ある月を科學的に又文學的に知らしめる點にある。

2　形式的方面では前半から生活文の趣を、後半からは解說文の風格を覺はせ、表現態度を養ふと共に科學愛好の念を培ふ事に力を用ふべきであらう。

3　尙既習の『星の話』と連繫させ天體一般に對する關心を深め、氣宇を廣大にし且つ幼稚乍らも哲學的宇宙觀の芽生を培ふ事も見逃し難き指標の一つである。

4　本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。

▽月に關する既有觀念を確め、月の美觀や傳說等月と人との交渉點を先づ明かにする。

2　自由學習。

▽各自にプランを立て自由に研究させる。

3　ノート作業。

▽讀後の印象や文の觀點等を纒めて記帳させる。

4　話合。

▽前項の印象や感想を中心に。

5　質疑應答。

▽新出文字は其の都度輔導して字書を索引させる。

測　視　滴　險　常

▽難語句は先づ類推させてから指導する。

天體望遠鏡　半月　觀測　三脚　お手製レンズ　口振　視野　肉眼　生々しい　あひづち　表面　あばた　說明　噴火口　直徑　火山　險しく　天體　死火山　斑點　熔岩　氣象現象　證據　調節　こげつく　美觀　平和な氣持　大きな慰　文學　死の世界　生きがひ　永久に

6　默讀。

▽文の觀點や興味點を記帳させる。

7　月の特性を擧げ、それに對する所感を述べさせる。

▽科學的な月・文學的な月。

8　挿畫の觀察。

▽月の何を見せたものか、書物に何ら出て居るか、何う思ふか等。

9　指名讀。

▽前半と後半を別々に。

10　低音讀。

▽ゆとりを持たせて反覆讀誦させる。

11　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

（1）學校の門

（終業の鐘が鳴る。ランドセルを負つた主人公は仲好の正雄と連立ち、歸を急ぐ人波にもまれてにこ〳〵と門を出る。）

（正　雄）

『君、今夜うちへ來ないか。』

『にいさんが天體望遠鏡を……。』

『月がすばらしいよ。』

（僕）

『どうして。』

『ほう。』

（2）正雄君のうち

1　輪讀。

▽前半と後半とを尻取式に指名させて。

2　指名讀。

▽前半の『望遠鏡で見た月』を指名して。

3　話合。

▽讀後の印象や所感を中心に。

4　前半を逐次に研究させる。

▽頃合を見て次の筋書を謄寫して配付し、點線の箇所を補はせる。

（縁先に望遠鏡をすゑ附け、正雄とにいさんが代る〳〵觀測をしてゐる。長さ一米ばかりの望遠鏡が三脚の上にのつてゐる。）

（僕）　　（正雄）

『りつぱな望遠鏡ですね。』　　『これでにいさんのお手製なんだ……。』

『レンズは。』　　『買つたのさ……。』

『さあ、君ものぞいてごらん。』

（望遠鏡の圓い視野に、月がくつきりと浮出して見える。）

『きれいだなあ。』　　『きれいだらう。』

『でも、ずゐぶんあばたですね。』

（三人代る〳〵のぞきながら、兄のおもしろい説明を聞く。）

5　後半の場面を指名して讀ませる。

6　逐次研究。

にいさんの説明

あばたのやうに見えるもの　（大部分が火山で）

（1）噴火口
- 非常に大きい
  - 一番大きいの……直徑二百粁
  - 低いのでも……高さ三百米
  - 高いのは……高さ八千米（富士山の二倍）
- すつかり冷えて……死火山

（2）斑點
- 薄黑い大きな海といはれる部分
- 水一滴ないから　平原といつた方がよい
- 多分昔……熔岩が流れて固つたもの

（3）氣象現象
- 水ばかりか空氣も
- 從つて雲や雨やあらしも　（ない）
- 何時も晴天　（曇つた所がない）
- 光や熱の調節物がないから
  - 晝はこげつくやうな暑さ
  - 夜はひどい寒さであらう。

（4）月の世界
- 太陽に照らされた部分……目が痛い程光つて
- 陰になる部分……眞黑
- ごつ〳〵した火山が至る所に
- 眞黑な大空に突立つ　（恐ろしい景色）
- もちろん草も木もない

（5）月から見た地球
- 地球の直徑……月の四倍
- 月からは……我々の見る月の約四倍
- 大きな地球が……天にかゝつて　（美觀？）

（6）月のやさしさ
- 理科的に言へば……月は死の世界
- しかし昔から月程
  - やさしい
  - 平和な　氣持を

（青白い
親しめる光）我々に大きな慰を與へる

（7）月と文學

全く離れられない（歌
俳句
詩）月に關するものが多い

（月の都
天人の舞）……（美しい想像）

（8）月は心の友

（月がなければさびしい（峯の月
大海原の月
椰子の木陰の月）（生きがひ）
月は永久に（心の友であり
慰である）

7　全課を纏めて通讀させる。
▽個讀に自由讀を交へて。
8　話合。
▽理科的な月の世界と文學的な月の世界を對照させて。
9　指名讀。
10　低音讀。
11　ノートを纏めて提出させる。

第三次指導

1　輪讀。
2　會讀。
▽グループ毎に問題を作製させて。
3　話方練習。
▽前半は劇的に、後半は解說的に。
4　二場面に分けて脚本化させる。

▽學級總掛りで。
5　劇化實演。
▽背景や用具等を工夫させて。
6　學習事項の整理。
▽內容方面では科學的の月と文學的の月、形式的方面では前半に於ける生活文の趣と後半に於ける解說文の樣相等。
7　補充說話。

テスト問題

一、次の語句を順序よく並べなさい。

思ふでせう　言ひましたが
月は　一つもありません
何といつても　從つて雪やあらしや
殆ど　水がないと
月がなかつたら　さういつた我々地球上の
人間の心の友であり　空氣もないのです
生きがひがないと　氣象現象は
慰であります　水ばかりか
永久に　月には

▽天體觀測・月と人間との交渉・月に關する文學・月の傳說等。
8　朗讀練習。
9　視寫・聽寫練習。
10　文字語句の書取。
11　語句の應用練習。
12　テスト。

二、次の漢字を組合せて熟語を十箇作りなさい。

直　部　象　対　出
天　調　分　體　節
現　噴　反　說　徑
觀　世　明　測　內
緣　眼　界　先

三、次の熟語に振假名を附けて解釋しなさい。

1 望遠鏡　2 氣象　3 視野
4 天體　5 熔岩　6 觀測
7 俳句　8 調節　9 三脚
10 噴火口

第二十五　秋

極めて手短に纏まつた秋の小品詩である。盆石の樣に小さくは有るが、此の小さな詩の中に優雅で寂びた自然の姿があり象徴の絶妙さがある。我が國民性には斯うした小ぢんまりした短篇を好む通有性が多分にある。和歌既に然り、俳句又然りで小さくともピリッと味覺を刺戟する唐辛子の樣に、或は寶石の樣に小粒の故に却つて愛すべきであらう。

『ちんちろ』『ぎんぎら』『とろ〳〵』の此の三つの形容が各聯の初五に冠せられ、如何にも秋らしい三場面が調和好く對立して居る。一聯は蟲の聲、二聯は露の玉、最後の聯は栗の匂ひ、三種三樣、野趣横溢、宛然新傾向句に接したかの感がある。

蓋し前課の月の科學と、後に續く鐵眼の大事業と、此の二つの大物の間に一寸息抜きと言ふ形で挾まれたのが此の小品詩である。繪に譬へたら氣の利いたカットか色紙に書かれた淡彩畫である。本卷の全貌から見ても小粹な此の詩の配材が如何に全體を引立ゝ居るか、さうした微細な點に迄留意した編者の心遣の程も察すべきでは有るまいか。

文字語句

新出文字

ナ　ジ

語句と其の解說

ちんちろ　松蟲の聲。松蟲は直翅類中、蟋蟀科に屬する小蟲。多く松林に棲むを以て此の名がある。秋夜叢中に鳴く、其の聲チン、チンチロリンと聞え、一種の趣ある爲、人捕へて飼養する。體色は普通赤褐色で、腹部は稍黃色を帶ぶ。古へは之に鈴蟲の名を當て、今日の鈴蟲を却つて松蟲と稱し、名稱が全く今日と相反して居た。古今集の〝秋の野に道もまどひぬ松蟲の聲する方に宿やからまし〟等は今日の鈴蟲を歌つたものである。鈴蟲の女性的なリ、リ、リンよりも、松蟲の稍男性的なチン、チロリンの方が野趣が有つて面白い。

きんぎら　葉末に宿る露の玉がギラ〳〵光るさま。ギラギラはキラキラを强めて言つたもの。どちらも煌々の漢字を當てる。

月かげ　葉末の露に宿る月影。結局露の玉が月の光に耀くのであるが、之はそれを美的に言つたもの。

ぬれにけり　ぬれるは滿るの連用形で、ぬれること。水氣が染みとほる。うるほふ。しめる。〝ぬれにけりの〝けり〟は過去の意を表す助動詞。感歎又は推定の意にもいふ。ぬれにけりと置いた邊り、萬葉調の香氣も偲ばれ、措辭の旨さがたまらなくいゝ。

とろく　ゆるやかなさま。とろくさい樣子。こゝのとろ〳〵はトロトロ火の意で、とろび（漫火）又はぬるび（緩火）を言ひ、火の勢なく燃えるさまにいふ。

はぜて　はぜは爆ぜるの連用形で、脹れ裂ける。ふくれはじけること。栗はぜては栗がとろ〳〵燃える火の中で、パンと音を立てゝはじけること。はぜて裂け開くこと。

其のにほひ　燒栗の匂ひ、野趣滿々。（一）は草叢にすだく蟲の聲、（二）は月下にきらめく露の玉、（三）はとろ火にはぜる燒栗の匂ひ、三種三樣、之で田家の秋は言ひ盡されて遺憾がない。

指導精神

既出の作品を見た眼で此の詩を眺めると、形式がグッと壓縮され、恰も新傾向の俳句にでも接した思ひがする。新傾向句は在來の俳句の形態を破壞し、自由律に依るリズムを以て俳句的表現を爲さうと試みたものであるが、此の詩は之と逆に、ともすれば冗漫に陷り勝ちな在來の詩形を壓縮して、新傾向句に近い新しい詩形に到達して居る。作者は恐らく在來の舊い型を破つて、新しい表現へと轉換を試みたものと想察される。

此の詩の內容は解かずとも明かであらう。卽ち端的に言へば秋の感觸とでも言ふべきで、第一聯は草むらにすだく蟲の聲、第二聯は月影を宿す露の玉、最後の聯は焚火にはぜる栗の匂ひ、たつた二十字足らずの間に山村に於ける秋の氣持は立派に言ひ盡されて居る。如何にも山村らしい土の香高い秋の感觸を寫して餘蘊なき作品で、平明ではあるが細緻な表現が目立つ。殊に最後の聯などは、簡明にして然も自然の背景が其處に限りなく繰りひろげられた思ひがある。俳句の〈五（七）五〉に對して（五）〈五）の四句も珍しいが、句法や措辭の旨さも見逃せない。初五の『ちんちろ』『ぎんぎら』『とろ〳〵』の聲喩や示唆が此の詩に童謠風の打寬いだ感觸を持たせた點や、結句の『日は落ちて』『ぬれにけり』『其のにほひ』に句法の變化を見せ、俳句的風格を思はせた點など、味ふべき箇所が少くは無い。取扱は讀誦本位に讀みを反覆させ、芭蕉の所謂舌頭千轉して詩境を味はせる心構が肝要であらう。

指導形態

指導上の認識點

1　草叢にすだく蟲の聲・月影を宿す露の玉・焚火にはぜる栗の句、三種三樣野趣滿點。蓋し此の床しい田園詩の風格と洗煉された表現美に觸れ、生活感情を純化するのが本課の着意であらねばならぬ。

2　各聯の想と全課の詩境とを構想上から對照吟味させ、尙既習の詩形と比較させ創作意慾を旺盛にするのも觀點の一たるを失はない。

3　詩心の味到から自然觀照の態度を啓培する事も大切である。

4　本課は形式も容易であるから、一時間そこらで指導を終る樣立案し得よう。

第一・二・三次指導

1　題目の指導。
▽板書して讀ませ秋の季節感を念頭に置いて直に讀みに入るが良い。

2　全課を自由に通讀させる。
▽讀後の印象其の他は記帳させる。

3　不明の箇所を質問させる。
▽讀んで分る事は態と敎へずに置く。
草むら　露の玉　ぬれにけり　とろ〳〵
はぜて

4　反覆讀誦させる。
▽全詩が釀す想やリズムの掴める迄。

5　話合。
▽讀後の印象や詩情を中心に。

6　指名讀。
▽特に聲調美に留意させて。

7　詩意の直觀。
▽各自に詩心を掴ませて記帳させる。

8　全課の聽寫。
▽讀合と同時に觀點に注意させる。

9　詩形の吟味。
▽既習の詩形と比較させ創作意識を旺盛にする。

10　歌謠化練習。
▽各自感情本位にリズムを附けさせて。

テスト問題

一、次の箇所を讀んで後の問に答へなさい。
とろ〳〵と
もゆる火に
栗はぜて
其のにほひ
(1)　どんな景色が見えるか。
(3)　はぜる栗の句はどんなか。
(5)　分り易く散文に直せ。

二、次の一聯を讀んで其の樣子を俳句にしてごらん。
ちんちろと
蟲の聲
草むらに
日は落ちた
『作例』　日は落ちてちんちんちろと虫の聲

(2)　とろ〳〵のわけを言へ。
(4)　こゝを讀んでどう思ふか。

11　全課の暗誦・暗寫。
12　語句の書取・應用練習。
13　テスト。

第二十六　鐵眼の一切經

鐵眼和尚の一切經刊行は我が印刷文化史上に燦然として輝く一大文化事業であつた、一切經の出版が當代未曾有の大事業であつた計りで無く、其の間に起つた窮民救濟の大難事をも敢行し、之を兩立させ成功させた處に鐵眼の鐵眼たる偉大さがある。今日の如く印刷文化の進んだ時代でも、あれ丈の內容のものを活字に組み校正をし紙型に取るのは可成の大事業で有るのに、當時の幼稚な印刷術では一々之を薄紙に淨寫し、一頁毎に版木に彫らせねばならぬ。斯かる大事業で有つたればこそ、唐土渡來の原本は有つても誰も之を刊行しようと志す人は無かつた譯である。然しそれでは折角の佛道普及に支障を來すと言ふので、敢然と此の大難事を企て、不撓不屈、不退轉の勇猛心に依り幾多の障害を乘越え、遂に之が完成を見せた鐵眼和尚の行績には、國民齊しく叩頭敬服の外はあるまい。

元來當時に於ける木版印刷は難事中の難事で、鐵眼の時代にも活字も有れば印刷機も有るには有つたが、手刷でもあり不完全なもので有つて、其の困難は想像すべくも無い。我が國最初の活字印刷記錄は文祿二年閏九月の事で、"時慶卿記"に據ると、六條有廣・西洞院時慶等十二人に勅命があり、孝經を活字印刷に附する爲、植字を始めたと言ふ記錄がある。卽ち鐵眼が一切經の飜刻を思立つた寬文八年から六十五年も前の事である。此の活字は豐臣秀吉が朝鮮征伐の際分捕品の一つで、銅鑄造の活字數萬個があつた。又當時肥前の天草では切支丹宣教師ヴァリニャーニが齎した活字印刷機も有つて、耶蘇敎の布敎には此の便利な印刷機

や活字を用ひ刷物を頒布したものである。然し前記の銅活字と言ひ、天草の活字印刷機と言ひ、鐵眼等の預り知る處では無く、一方は宮中（其の後府中）に秘藏され、又一方は肥前の異敎徒中に內密に使用されて居たので、印刷に附するには矢張一頁毎に薄紙に淨寫し、之を版木に彫るより外に方法は無かつた。鐵眼の苦心思ふべきである。本課は實に此の難事業を敢行したのみで無く、再度の窮民救濟と言ふ三重の難事を敢てした日本偉人傳中の美談として、其の名は永遠に國民敬仰の的と成るであらう。他宗門の行誡をして"鐵眼は一生に三度一切經を出版せり"と感歎させたのも宜なる哉である。文の觀點も亦茲に在るは言ふ迄もない。

挿畫の印象と其の說明

百七十四頁の寫眞は大阪の鐵眼寺に安置されて居る鐵眼の木像で、佛德圓滿な溫容の間にも一脈犯し難き氣魄が閃いて居る點に着目すべきである。蓋し其の溫容は彼の大慈大悲の佛相を現し、其の人に迫る氣魄は彼が金剛不壞の大努力心を思はせる。鐵眼の像も數種あるが、此の木像が最も彼の面目を躍如たらしめて居る。像は着色の塗像で、曲彔（キョクロク）に腰掛け白衣の上に墨染の袈裟を着け、右手に拂子（ホッス）を持ち脚に木沓を穿つ。拂子は多くハグマ（支那產の犛牛と稱する獸の尾白色で光澤がある）の毛を束ねて作り、佛前を淨め惡魔を退散させると言ふ意味合で禪宗（鐵眼は黃檗僧）では今も用ひられる。梵語では之をチャマラと言ふ。

百七十七頁の寫眞版は京都府宇治郡宇治村黃檗宗の大本山萬福寺境內にある一切經の納庫を見せたもの。左方の建物は四間に十間半・右方の建物も四間に十間半・中央は四間に十六間半、三棟共倉庫で中に版木が山と積んで秘藏してある。總數無慮六萬枚。中庭に在る堂は壽塔と稱し、鐵眼と其の高弟寶洲の石碑を納め

て居る。五尺の六角塔で天和二年の建立とある。塔の周圍に在る植木はカナメヒバ（檜の一種）前面柱の藍に見えるのは石燈籠である。

文字語句

新出文字

貴版資効保

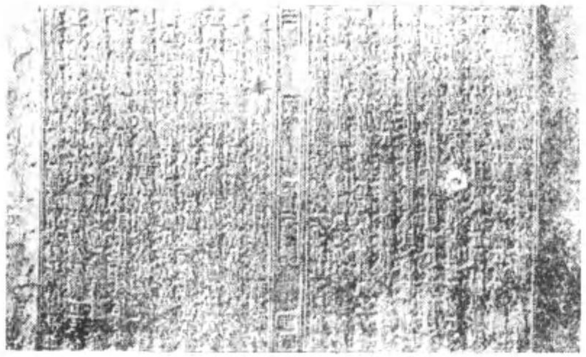
讀替文字

渡（新出は卷四、ワタシ）　存（新出は卷五、ソンジ）　巡（新出は卷九、ジュン）
調（新出は卷八、シラベ）　捨（新出は卷六、ステ）　救（新出は卷十、スクフ）
費（新出は卷九、ツヒヤス）　奮（新出は本卷、フン）

語句と其の解說

鐵眼　黃檗宗の高僧。號は道元、俗姓は佐伯氏。肥後益城郡の人。寛永七年正月生。十三歲、郡の海雲法師に投じて經論を學習。明暦元年秋、長崎東明寺の隱元に參謁、隱元攝津普門寺に入るに隨ひ、尋で隱元の高足木菴の資と成る。寛文三年春、肥後禪定寺、四年筑前妙光寺に於て楞嚴・法華の兩經を講筵。大藏經の鏤刻を企圖。觀音寺妙宇道人、此の擧を讚して白金一千兩を寄す。萃で黃檗山に登り、隱元の製讚を得、支那藏本及び藏版所を附與され、又印房を京師に開き、先づ數十函を版刻。尋で江戸に出で專ら募財に盡瘁。寛文十年春、大阪檀信徒藥師寺に重修し、師を請うて中興の祖とな

す。延寶二年春、熊本侯城中に師を請ひ、法義を聽聞し、毎年黃金千錠を喜捨し、刻藏の助資とした。秋、薩州の福昌に應錫。四年春、木菴より心印を親承し、天和元年大藏鏤板の功大成。表章を製して後西院上皇及び將軍綱吉に獻ず。鏤刻より開板まで十有七年。鐵眼版或は黃檗版藏經と呼ぶ。天和二年畿內飢饉荒歉し、錢穀を以て救恤に努む。天和二年三月寂、年五十三。昭和七年寶藏國師の諡號を賜ふ。



木版の版眼鐵

一切經　佛教典籍の一切を總稱。即ち經とは經・律・論・章・疏・鈔・傳等の一切佛典を意味す。尤も狹義には三藏經又は大藏經と同義。然し三藏經は本來印度成立の經・律・論の三藏。大藏經は支那譯三藏又は支那成立の章・疏類の勅定に依つて大藏に攝められたもの、一切經は一層廣く佛教典籍の一切を意味したものと解して良い。從つて一切經の內容は必ずしも各時代・各場合を通じ一定でない。例へば我が奈良朝の一切經でも養老七年（七二三年）に一六九七卷、天平十一年（七三九年）に五〇四八卷、同十三年に三五六五卷等の不同があり、乃至現代の大正一切經刊行會の大藏經總數は一一、九七〇卷の如きである。

鐵眼の一切經　所謂鐵眼版の大藏經（一切經）即ち黃檗版を言つたもの。一切經の鏤刻は既に吉野朝の頃五部大乘經を開版したが、大藏經の全部を開版するに至ら

なかつた。慶長・元和の頃に、伊勢常明寺の宗存が活字版で大藏經の印刷を計畫したが半途で中止し、寛永十四年（一六三七年）に著手した天海の活字本大藏經（天海版）は十二年の後に完成した。活字本は印刷部數に制限があつて普及性に乏しい所から、寛文九年（一六六九年）鐵眼更に方册本大藏經の飜刻を企て前後十七年にして完成した。所謂黃檗版で本課はそれを指して言つたもの。

佛敎　印度のマカダ國の人、釋迦牟尼（淨飯王の子、悉達太子）を敎祖とした一種の宗敎。主として亞細亞の東部に行はる。其の流派が頗る多い。ほとけの敎へ。佛法。　**書籍**　書物・本。ふみ・しよじやく・書卷・書册。　**一大藏經**　種々の書册を集めて大部册としたもの。一大の一は接頭語、他の名詞に冠らせて、或る・全き・同じき・悉く等の意を表す。　**無二の寶**　無二は無レ二の音讀。二つと無いこと。他に求め難いこと。竝び無いこと。此の上もない。無双。無比。無類。　**出版**　文書・圖畫等を印刷して、發賣又は頒布すること。版行。印行。刊行。　**渡來**　海を渡つて來ること。外國から船で來ること。舶來。

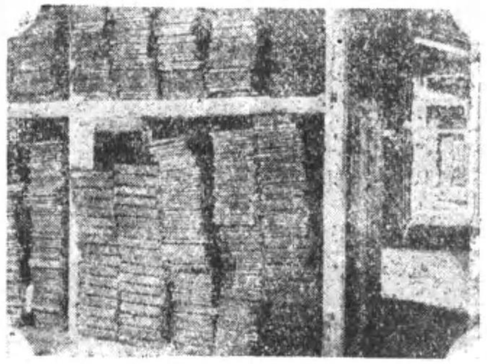
黃檗山萬福寺　黃檗宗の大本山。京都府宇治郡宇治村に在る。萬福寺は寺號で黃檗山は其の山號。隱元の開創。承應三年、歸化した隱元は洛南大和田の勝地を賜はり、寛文元年より伽藍を建てた。寺觀全く明の遺制に倣ひ、異域の風致を備へ、寛文八年工を終る。尋で多く歸化僧相繼ぎ現在も尙遺風を存す。寺域は舊時宏大であつたが、現時四萬三千餘坪。塔頭・子院も三十三坊から減じたが、尙一大名刹たるを失はない。本堂（佛殿）天王殿・齋堂・禪堂・伽藍堂・祖師堂・鐘樓・鼓樓・三門・總門及法堂・東方丈・西方丈等主要建造物は國寶。境內に十二勝あり、背後山腹に黃檗版（卽ち鐵眼版）版木を藏し、門前に普茶料理の白雲庵がある。菊舍尼の句

に〝山門を出れば日本ぞ茶摘歌〟等とある。　**一代の事業**　其の人一生涯の事業。卽ち自分の生涯に於ける最も重要な仕事の意。　**ちかつて此の企を成し遂げんと**　ちかつては此の場合では將來にかけて必ず成就させようと心に固く思ふこと。企はもくろみ。考を定めてする仕事。必ず此の仕事を成就しようと。　**資金**　資本にあてるお金。特定の用途に當てられる金錢。資本金。もとで。

たまく　思ひがけず。ふと。ふいの。ふつてわいた。ゆくりなく。はからずも。偶然。　**大阪に出水**　延寶二年六月十三日の事で、大阪は大洪水の爲に市街一面泥の海と化した程の大慘事、死傷者は殆ど數へ切れないといふ慘憺たる有樣であつた。尤も此の慈善事業に就ては年代の上に根據を持つた議論から、一切經出版の後であると言ふ說と、出版進行中の出來事であると言ふ說との二樣の相反した意見がある。然し何れにしても鐵眼が慈善を施した點には聊かも間違は無い。　**路頭に迷ふ**　路ばたにさまよふ。路頭は路上。卽ち生活を立て得ずして流浪すること。零落してあちこちさまよひ歩くこと。　**目擊**　まさしく見ること。直接に見ること。卽ち人づてに聞いたのでは無く實際に見ること。　**つらく思ふ**　つらくは念を入れてする狀にいふ。つくづく。よくよく。ねんごろに。　**ひつきやう**　畢竟。つまるところ。つひには。つまり。結局。　**喜捨**　喜んで佛寺に供養又は寄進し、或は貧者等に施すこと。ほどこし。　**救助**　すくひ助けること。　**歸する所**　歸はおもむき。歸向。趨向。歸着。歸するは一つ處に落ちあふ。歸着する。歸向する。つまるところ。ひつきやう。　**一にして二ならず**　歸一を分けて言つたもの。同じ事でちがつた事でない。歸一は分れて居るものが一つに歸着すること。　**出版費**　出版に要する費用。出版のもとで。　**蒐集**　つのり

集めること。あちこちからよせあつめること。　着手（チャクシュ）　手をつけ始めること。とりかゝること。しはじめ。　効果（カッカウ）　できばえ。できあがり。しあげ。又しるし。ききめ。功能。効驗。　宿志（シュクシ）　かねてからの志。年來の志望。宿望。宿心。のぞみ。　近畿地方（キンキチハウ）の大飢饉（オホギキン）　此の飢饉は大阪の洪水以上で、飢に泣く人々の悲慘さは言語に絶した。毎日大勢の死人を出す慘狀を見て、鐵眼は看過する事が出來なかつた。苦心に苦心を重ねて二集度めた資金を又惜氣も無く投出し、多數の窮民を救助する爲に一錢も無い樣に成り、金が足らず或る資産家に相談して金策迄して努力した。施行門と言ふ記錄に據ると、此の時鐵眼に救助された窮民は初日に二千人、第二日目に六千人、第三日目からは一萬餘人に及んだとある。其の頃山崎半右衛門といふ資産家に充てゝ金の借用を申込んだ書面が今も尙大阪の鐵眼寺に殘つて居る。　飢饉（キキン）　五穀が實らず人々が飢ゑ苦しむこと。米穀の實らぬのが飢、野菜の出來ぬのが饉。　深大（シンダイ）　深くて大きいこと。どれ程大きいか、どれ程深いか計り知れぬこと。廣大。甚深。　初一念（ショイチネン）　思ひ立つた最初の一念。一念は一向に思ひ込むこと。一心。執意。　製版（セイハン）　印版木を拵へること。之が一番の大仕事で、萬福寺に保存されて居る版木を見ても、其の努力の程が思はれる。　印刷（インサツ）　文書・圖畫等の版面にインキや墨や繪具等を附けて紙面におすこと。繪や文字を紙にすること。　天和元年（テンワグワンネン）　靈元天皇の御宇。即ち最初計畫の年から十七年目に一切經の刻版が竣功したのである。精神一到何事か成らざらん、流石の大事業も彼が名の鐵の如き意志に依り遂に成就したが、其の間の苦心は實に名狀すべからざるものがあつた。　六千九百五十六卷（クワン）　此の數字は調査者に依つて多少の相違はあるが、黃檗硏究の權威吉永雪堂は鐵眼の直弟子寶洲の言として「事刻

藏に係る死すと雖も顧みず、云々」といふを擧げ、其の足跡を印する所、西は薩州より東は奥羽に及び、其の歡化に應じた有緣の道俗は四十餘國に亘り、刻藏の板約六萬、經卷六百七十七函、千五百八十六部六千七百七十一卷、後更に續藏經五十七部五百六十三卷を加へ、我が邦に於ては前古未曾有の厖大なる數を示した刻版印刷を成就したのであるが、其の精力の絶倫なる蓋し多く比肩すべき者が無いであらう、と。　三樣（サンヤウ）の倉庫（ソウコ）　此の倉庫は萬福寺の背後、山腹に在る。此の版木はもと黃檗山内の寶藏院（開祖隱元が一切經版木の倉庫敷地として山内の一部を分與した地に建てた寺）に在つたが、大切な板木が火炎に罹る樣な事が有つては取返しがつかぬと言ふ懸念から、當時山内の東林院に居た大眉と云ふ歸化僧が、火災に安全な自分の立派な東林院と寶藏院とを交換した。それは恰も鐵眼入寂の年、即ち延寶元年の事であつた。　福田行誡（フクダギャウカイ）　淨土宗近代の名僧。俗姓は福田、武藏國豐島郡の人、文化三年に生る。六歲小石川の傳通院で剃髮。明治維新に際し諸宗の高僧と同盟會を組織、



一切經版木の内部

教法の維持を圖り推されて盟主と成る。明治五年政府の僧侶肉妻許可の令に反對して警告、翌年神佛合併大教院の教頭と成り、同十年傳通院主、十二年增上寺主兼淨土宗東都管長、增上寺重營の爲諸國巡錫、十五年活字本大藏經刊行を主宰、十八年深川本誓寺に隱遁、淨土宗統一の制定るや京都知恩院

主と淨土宗管長を兼ね。同年病みて寂、年八十四。酒脫の性格から羅漢行誠の異名を取り、和歌を能くし高崎正風・稅所篤子と交遊、著書に行誠全集がある。

一生に三度　行誠の此の講辭は後半が削除されて居る。從つて之を補へば其の意味がハッキリする。即ち〝始の二度は生きたる一切經にて後の一度は死したる一切經なり〟と言ふのである。之で此の鐵眼評は明瞭であるが、然し此の生死の意味が面倒である。編者も恐らく其の點を顧慮して削除したものであらう。此の生死は禪の所謂靜動で、靜中に動、動中に靜、之が禪の極致である。即ち一切經を刊行するのも佛道を弘め人を救ふ爲、又人の難儀を救ふのも結局は一切經の趣旨である。佛敎から言ふと兩者は全く一にして二ならずと言ふので有つて、此の見地から眺めると飢饉や水害で難儀して居る人を救ふのも一切經の刊行と同一である。然も一切經は死物で有つて其の精神を呑込むことが出來なかつたら、佛萬卷の書を讀んでも論語讀みの論語知らずで何等得る所が無い。所詮は死したる一切經である。人の難儀を見、人の苦しむを見て、其の儘看過する事の出來なかつた鐵眼の慈悲心こそ、一切經の精神であり生きた一切經であらねばならぬ。從つて鐵眼が水害に惱む人々を救濟したり、飢饉で苦しんで居る人達を救助したのは結局一切經を事實の上に刊行したものと言つて良い。行誠上人は其の點に着眼して〝始の二度は生きたる一切經にして、後の一度は死したる一切經なり〟と評したのである。之で初めて鐵眼は一生に三度一切經を出版した事に成る。一度の出版でも既に偉大である。實に大事業である。然も鐵眼は三度一切經を出版して居る。其處に本課の貴さがある。靜中に動、死中に活、それが本課の核心であらねばならぬ。

資料

教材の出所

鐵眼僧（野史）

鐵眼名は道光、族は佐伯、肥後の人なり。初め一向の敎を受けて妻を娶る。然れども其の宗法たる不學非德の人雖も寺例に因て上位に居るものあるを嫌ひ、去りて黃檗山に入り、業を木菴禪師に受く。妻氏追到すれども見るを許さず。妻乃ち黃檗の門前に寓居し、鐵眼の出るのを窺ふ。一日鐵眼の他に行くを見、妻遂に誘引して與に國に歸る。鐵眼拒む能はずして僧に行く。既に鄉に入るに迨び隙を窺て脫走し、復た黃檗に至りて法を繼ぎ、瑞龍寺を攝州難波に建つ。人寺を呼んで鐵眼と曰ふ。夙に一切經を刻するの意あり。緣を四方に募る。會々歲飢ゆ乃ち緣募金を携へ、市門に立ちて飢色ある者を視れば悉く之を頒與す。已にして復た緣を募る。歲復た飢ゆ。施與又初の如くす。而して後初て印刻功を奏し、之を山中に藏む。性辨才あり、說法を能くし士民を化度す。然れども終世謂らく、腕臂整はずと。故に法嗣を置かず、屬寺を法弟寶州に附し、天和二年を以て寂す。年五十三。

僧鐵眼（伴蒿蹊著、近世畸人傳）

僧鐵眼、諱道光、肥後國本願寺末下の寺に生れ、既に妻もありしが其の宗徒不德无才の人も、寺格により上位に居ることを甘心せず、黃檗山に登り木庵禪師に從ふ。其の妻なる人、尋ね登しかども對面せざるを慮りて、黃檗門前に旅宿して師の出づるを窺ふに、或日果して出でたるを强いて誘ひければ、止む事を得ず伴ひて故國へ歸り、其の鄉まで入りしが、ぬけて上京し、又黃檗に至る。法を嗣ぎし後、攝津國難波村瑞龍寺を建立せり。世人今猶鐵眼を以て其の寺を稱す。一切經の藏板を思ひ立ちて勸進せしに、其の料金集れる比、天下大に餓ゑしかば、師憐みて金を殘らず施し、又前の如く勸進せるに數年ならず又集りたるが、再び五穀

不熟にて餓死多ければ、此の度も此の金を施行に盡せり。されども德の至りにや、第三回の勸進にて藏經の印刻成就して、其の經を頒つ所の代金を本寺より已下一宗の寺々に配ること今に於て同じ。（同宗に錦袋圓といふ藥をうるも同じ勸學寮より一宗に金を頒つ）此の師佛學深く說法能辯にて、俗間に化度する事多けれども生涯建立門にかゝり、自の腕力十分ならずといひて、吾が法嗣を立てず、法弟寶洲に寺を附屬す。是又他の難き所なり。寶洲も佛學に長じ德業ありとぞ。

指導精神

本課の中心は勿論一切經の出版に在るが、文の觀點は結尾の福田行誠が、鐵眼は一生に三度一切經を出版せり" と感歎した鐵眼評に在つて、鐵眼が人の苦しむを見ては千苦萬苦して集めた資金を惜氣も無く、一度集めては散じ二度集めては又散じ、奮起一番遂に初一念を貫徹した大慈悲心と、其の堅忍持久の精神に共鳴共感させるに在る。本卷には此の種日本文化に貢獻した偉人の事蹟を紹介したものが多い。源氏物語に於ける紫式部、古事記に於ける大安萬侶、古事記傳の大成に努めた本居宣長、一切經の出版に傾倒した本課の鐵眼等、何れも時と事柄とは異つて居るが、我が文化の建設に貢獻した點は一である。殊に本課の如きは事佛教と言ふ俗人とは稍緣遠い方面ではあるが、彼が我が文化の水準を高めんと努力した功績の程は全く讃美・禮讚の外はない。然も天災に對して一再ならず資金を散した大慈悲に至ては洵に佛心を得たものと言ふべく、愛の權化として他宗の行誠が感歎したのも無理はない。取扱に際しては先づ其の中心と成つて居る一切經の如何なるものかを知らせる事に力を用ふべきである。

鐵眼は寛永七年正月朔日、熊本縣下益城郡小野部田村大字南部田に生る。父は淨信、母を妙觀と言ひ、生

家は眞宗の寺院であつたと言ふから、幼少の頃から佛教的感化を受けて居た事が想像される。彼は初め眞宗の教義を學び、後黃檗宗に轉じた。二十一才の時、同じ道を求める同志五六人と語らひ、佛道修業の爲京都へ上つたが、向學心に燃えた彼は其の頃の高僧智識と道交を結び、漸次研學の歩を進めた。當時支那から渡來して居た隱元禪師（黃檗山萬福寺の開山）が長崎に留まつて居たのを耳にし、海路長崎に渡り隱元に見へたが、隱元は鐵眼の樣子を一目見て直に其の非凡の人格を認めたと言ふ。其の時分長崎の福濟寺に隱元の弟子に當る有名な高僧木庵が駐錫して居たが、鐵眼は此の人にも師事して黃檗禪の修養を續けた。鐵眼は常に粗末な法衣に着け、粗末な食物を取つて唯一心に悟道を勵み、又方々に出掛けては難解な佛典の講說に寧日無き有樣であつた。此の緊張し切つた生活の間にも、彼の念頭に絕えず往來して居た問題は一切經の出版大藏經鐫刻と言ふ大事業であつた。

一切經は佛教に關する經典の一大叢書で、又大藏經とも言ひ、東洋文化の一大寶庫とも言ふべき浩瀚な佛典の總稱である。彼は修行の進むに連れ、我が國に一切經の版木が無いのは如何にも殘念である。何とかして自分の手一つで此の大事業を成遂げ度いと考へて居た。尤も鐵眼以前にも同じ志を立て、一部分は實行した人も有るには有つたが、それは部數も少く一般に普及される迄に至らなかつた。鐵眼も最初は支那から輸入させる途を考へたが、後には斷然志を立て之を我が國で出版し研究の自由を與へようと決心した。何しろ非常な大事業で、當時に在つては容易な問題では無い。然し極めて鞏固な意志の持主で有つた彼は、寛文八年の春、三十九歲の時、大阪に於て一切經出版の念願を發表した。即ち明の時代に出來た支那版の一切經（隱元が支那から持參したもの）を原本とし、先づ版木を拵へ、それから出版に取掛からう言ふ大計畫を立て

た。此の破天荒の計畫に勿論世人は驚いた。一介の雲水に過ぎぬ彼、言はゞ一貧僧・一寒僧に過ぎなかつた彼として、一切經七千卷と言ふ尨大な經典の刊行である。鐵眼は氣が狂つては居ないかと、其の企を聞いて馬鹿に爲る者もあり、其の冒險を憫笑する者もあつた。然し彼の人物を知る人達は、之を佛教界空前の大偉業として、此の美擧の成功を期待する者も少くは無かつた。就中彼が師父たる隱元の如きは深く此の擧を賛同し、"日本は由緒深き名刹もあり、名僧智識も數多く出て居るが、唯一つ一切經の無いのを遺憾とした。今此の偉大な企に依つて、日本佛教界の受ける功德は如何計りか"と支那から渡來する際持ち來つた宋版の一切經を與へて彼を感激させた程であつた。

斯くて鐵眼は大阪を策源地に充て、出版に要する資金の募集又は各所の講經勸化の爲殆ど全國に足跡遍く東奔西走、全く文字通りの席暖るに暇無き狀態を以て、連日目まぐろしい程の忙しい日を送り、辛酸に耐へ困苦を忍んで苦鬪の限りを極めた。當時彼が苦心慘憺の思を述べた詩に、"藏海を弘めんと欲して西東に泊し、幾度か春を迎へて紫紅を看る、世上は知らず無盡の福。朝來頻に祝す萬年の躬、千金拄げ費して塵外を逐ふ。毫末も何ぞ曾て法中に施さん、鬢髮辛を喫して雪の白きが如し、靈文何れの日か其の功を滿ぜん"とある。以て其の苦心の程が窺れる。偉業の完成したのは天和元年で、彼は先づ其の初版を後水尾太上法皇に奉獻した。尙其の後伊勢の大廟に奉獻し德川幕府にも獻上し度い意向であつたが、之は彼が示寂後に實行されて居る。法皇は深く喜賞し給ひ"法門の功臣である"との有難い聖旨を賜はつた。

鐵眼は寛文八年初めて此の大業を計畫してから、天和元年全部の竣工を見る迄、實に十七年の長年月を要した譯であるが、其の間前後二回、意外な天災に遭遇して居る。即ち前は大阪の出水と後は近畿地方の大飢

饑である。大阪の出水は延寶二年六月十三日の事で、大阪は此の大洪水の爲市街一面泥の海と化し、死傷者は殆ど數へ切れぬ程の慘憺たる有樣であつた。家は流れ食糧は失はれる。彼は此の慘狀を見て、一切經の出版も大切だが人の命は更に大切だと、多年刻苦の間に集めかけた資金を惜氣も無く投げ出して仕舞つたのである。之は彼が大乘的見地から出た大慈悲の發露で、佛の化身と言はれるのも所以無き事ではない。後の近畿地方に於ける大飢饉は大阪の洪水以上で、日毎に多數の死者を出し飢に泣く悲慘さは言語に絶したと言ふ。彼は此の慘狀を見るに忍びず、再び資金を散じて多數の窮民を救助した。記錄に據ると、彼に依つて助けられた窮民は初日に二千人、第二日目に六千人、第三日からは一萬餘人に達したとある。斯くて彼は二度集めて二度散じ、第三回目の募集に着手したのであるが、曩に救助を受けた者は勿論のこと、一般の人々も我先にと、今度は進んで喜捨したので豫想外に早く纒まり、進行しかけて居た一切經の出版事業も、天和元年に至つて遂に竣工を告げたのである。大願成就の翌年、即ち天和二年二月二十九日鐵眼は俄に發病、三月二十二日五十三歲を以て遂に示寂した。葬儀に會する者無慮十萬餘人、鐵眼寺で茶毘に附し宇治黃檗山内の寶藏院に葬つた。遺偈に"七顚八倒、五十三年、妄に般若を談じて、罪犯天に彌る、優游す華藏の海、踏破す水中の天。"とある。鐵眼の一切經飜刻が我が佛教界に貢獻する事至大であつたのは言ふ迄もないが、其の竣功を見る迄、彼の足跡を印する所、西は薩州より東は奥羽に及び、其の勸化に應じた有緣の道俗は四十餘國に亙り、刻藏の版木約六萬、經卷六百七十七函、一千五百八十六部六千七百七十一卷、後更に續藏經五十七部五百六十三卷を加へ、我邦に於ては前古未曾有の厖大な刻版印刷を成就したのであるが、其の情力の絶倫なる蓋し驚嘆に値するものがあらう。

指導形態

指導上の認識點

1　一切經出版の大事業を前にし、人の惱むを見ては再度中止して之を救ひ、然も尙第三回目の喜捨に依つて遂に其の大業を敢行した鐵眼の博大な慈悲心と、萬難を排して初一念を貫徹した不退轉の努力とに感動せしめるのが本課の大眼目である。

2　尙表現形態の把捉として文の迫力が漸層し最後に光彩陸離たる大圓圓的クライマイクスを持つ文の模式的機構、並に含蓄豐かな文語の雄渾莊重さを熟讀玩味させ、文章觀の啓培と表現技巧の向上に資するも閑却すべからざる觀點の一である。

3　佛敎意識と一切經の內容に就ては若干の補說を必要とするであらうが、兒童の能力を考へ餘り煩瑣に渡らぬ樣注意せねばならぬ。殊に結尾の鐵眼評の如き、之を完全に理解させには普通人の尙難しとする靜動生死の禪學的知識を必要とし、到底幼稚の兒童の能くし得べき範圍で無い。指導者は宜しく此の點に留意し理解を將來に俟つ心構が肝要である。

4　本課は文語文であるから朗讀に於て其の聲調美の快感を、譯讀に於て口語と異なる獨特の風格や特に語尾の變化に注意させる等、凡ゆる方面に留意すべきは言ふ迄もない。

5　本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。

▽『の』のの助辭に注意を要する。一切經には支那版もあれば天海版もある。之は鐵眼版の大藏經卽ち黃檗版を言つたもの。從つて鐵眼と一切經では無く、鐵眼の一切經である。『の』と『と』を穿違へてはならぬ。

2　一度靜かに全課を通讀させる。

▽ゆつくり時間を與へて。

3　讀んで得た第一印象や感想等を記帳させる。

▽一切經とは何か・それがなぜ大切か・鐵眼の何處が偉いか・何う思ふか等。

4　指名讀。

▽適宜に句切つて、數名に。

5　再讀させて不明の箇所を摘出させる。

6　質疑應答。

▽新出文字は字書を輔導して索引させる。

貴　版　渡　存　巡　資　調　捨　救
費　効　奮　保

▽難語句は先づ類推させてから指導する。

書籍　一大叢書　志ある者　無二の寶
貴ぶところ　卷數　出版　容易の業　渡
來　世に存する　一代の事業　困難　企
資金　つのる　調ふる　着手　出水　死
傷　産を失ひ　路頭に迷ふ　目擊　つら
〳〵　ひつきやう　喜捨　救助　歸する
所　一にして二ならず　すなはち　同意
こと〴〵く　出版費　屈せず　募集　効
果　空しからず　宿志　大飢饉　困苦
こゝにおいて　及ぶ限り　深大　慈悲心
初一念　ひるがへさざる　感動　寄附
版木　保存　三棟

▽特に附說を要する個有名詞は一々板書して入念に指導する。

一切經　佛敎　山城宇治　黃檗山萬福寺
鐵眼　近畿地方　幕府　救小屋　天和元
年　福田行誠

7　重立つた文語を口語と比較させる。

▽特に語尾の變化に留意させて。

8　文の荒筋を摑ませる。

▽場所・人物・事の次第等。

2　文意の所在を探らせる。

▽摑んだ文意は記帳させて置く。

10　低音讀。

▽文語調の語感を味はせて。

11　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1　數回繰返して通讀させ、。
2　輪讀。
　▽大きく句切つて、座席順に。
3　範讀。
　▽一回範讀してから追讀させる。
4　話合。
　▽把捉した文意を中心に。
5　逐次研究。
　▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

6　話合。
　▽配布した文圖を前にして。
7　書取。
　▽板書事項を適宜に視寫させる。
8　低音讀。
　▽聲調美に乘せて文語の趣を味はせる。
9　譯讀。
　▽特に語尾の變化に注意させて。
10　話合。
　▽讀後の感想を中心に。
11　指名讀。
12　ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1　朗讀練習。
　▽文語調の語感に着目させて。
2　指名讀。
　▽中・劣生を主として。
3　對譯練習。
　▽特に難解の箇所を指摘して對譯させる。
　此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。されば古は支那より渡來せるもののわづかに世に存するのみにて、學者其の得難きに苦しみたりき。鐵眼大

いに喜び、まさに出版に着手せんとす。我が一切經の出版を思ひ立ちしは佛教を盛にせんがため、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんがためなり。喜捨を受けたる此の金、これを一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も殘らずなりぬ。其の効果空しからずして、宿志の果さるゝも近きにあらんとす。一切經の廣く我が國に行はるるは、實に此の時よりのことなりとす。福田行誡かつて鐵眼の事業を感嘆していはく「鐵眼は一生に三度一切經を出版せり。」と。

テスト問題

一、次の文を讀んで後の問に答へなさい。

二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、遂に奮つて第三回の募集に着手せり。鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、喜んで寄附する者意外に多く、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。

4　學習事項の整理
▽内容・形式の兩面に亙つて。
5　補充說話。
▽佛教の起原・我が國への傳來・宗門宗派等特に佛教意識の觸發を目的として。
6　話方練習。
▽主題を摑んで、劇的に。
7　視寫・聽寫練習。
8　暗誦・暗寫練習。
9　新出文字の書取。
10　語句の應用練習。
11　テスト。

(1)　鐵眼は何故資を散じたか。
(2)　鐵眼の慈悲心が深大であつた實例を言へ。
(3)　何が人々を感動させたのか。
(4)　三回目の募集が都合よく運んだのは何故か。
(5)　こゝを讀んで鐵眼の偉大な點を列擧せよ。

二、次の語句を解釋しなさい。

1　ちかつて　此の企を成し遂げん。
2　路頭に迷ふ者數を知らず。
3　更に必要なるにあらずや。
4　前の出水の比にあらず。
5　強く人々を感動せしめしにや。

三、次の書取をしなさい。

1　ブッケウ　2　ショセキ　3　トフイ
4　シキン　5　キウジョ　6　インサツ
7　ホソン　8　ムニノタカラ　9　ダイシュッバン
10　キシヤヲウケ

第二十七　空中戰

本卷第一の嶄新な教材で、恰も本卷編纂中に起つた今次の事變を捉へ、特に我が空軍の威力が語られて居る事は、何人も一讀してそれと氣付き胸打たれる事であらう。但し空襲に敵の飛行機を射落し、敵陣を粉碎して快哉を叫ぶのみが本課の趣旨では有るまい。百七十九頁第六行目に"整備員たちの不眠の努力が、すべての飛行機の調子よい爆音に現れて"と言ひ、百八十七頁第四行目に"今更のやうに、すばやい偵察機の報告や、勇敢な戰鬪機の掩護を感謝しながら"と言ふ邊りに、編者の心遣の程が想察されよう。即ち我が勇猛果敢な荒鷲部隊が一死報國相協力しつゝ目覺ましくも活躍する樣を知らせ、血湧き肉躍る近代空中戰術の一端を窺はせ愛國の熱情を鼓舞しようと言ふのが、當局の着意に違ひない。

素より這般の空軍活躍に就ては、軍當局の機密に屬するものも多々であり、又機密で無い部分にしても極めて高級な專門的智識を必要とする爲、本課の內容も當然限られた小範圍の記述に割愛された事は想像に難く無い。にも拘らず流石は現代の尖端戰術であり、列國脅威の的と成つた我が空軍部隊の實戰から得た尊い戰鬪記錄である丈に、全文これ血を以て綴られ、一語一句が讀者の胸を刻るであらう。殊に通信紙に報告文を認める邊りから手に汗を握らせ、愈々戰鬪開始と成つて一入胸のときめきを感ぜずには居られない。所謂近代藝術に於けるスリル、危機に富んだ表現法が、本課の中にも隨所に精彩を添へて居るのを發見するであらう。

挿畫の印象と其の說明

百八十一頁の寫眞は今次の事變に××基地を出發し編隊飛行中の我が空軍の新銳××式戰鬪機である。其の性能・構造は本文に發表された以上の事は機密に屬し、絕體に調査も發表も出來ない。昭和十二年八月十五日の嵐を衝いて、我が荒鷲部隊が突如南京を空襲し世界をアッと言はせた當時のニュースが、今更の樣に頭に浮ぶ。寫眞に見える三臺の飛行機は編隊飛行上の定石で、必ず"品"といふ字を橫に推廣げた樣な形と成る。五臺一聯の場合は之が更に兩足に廣がつて續く。先頭の一機は先導機で、即ち部隊長機である。遠くに見えるのは既に戰鬪隊形に入つて居る。恐らく敵機を發見したのであらう。

文字語句

新出文字

爆（バク）　麗（マク）

讀替文字

眠（ミン）（新出は卷四、ネムッテ）　弁（ちょう）（新出は本卷、ノボル）　速（ソクセン）（新出は卷八、ハヤク）

紘（ヒ）（新出は卷五、イト）　翼（ヨク）（新出は卷九、ツバサ）

語句と其の解說

空中戰（クウチウセン）　戰術家大場彌平少將は言ふ、今は大空襲時代だ。偵察機はもとより、襲擊機も苟も爆彈を携行し得るものは、其の全力を擧げて敵國と敵軍の上に爆彈を投下すべきだ。だから爆擊機は空軍の中

心を爲し、主力を爲し、各列强共に五割乃至六割を爆擊機とし、一大戰略的攻擊空軍を作つて居るのである。所が此の猛威を振ふ爆擊機共は、全くの意氣地無しで攻擊的戰鬪力は持つて居ない。唯敵の戰鬪機が攻擊して來た場合、それに抵抗する受身の守勢的な交戰力のみで、決してイニシアティフはとれないのだ。それなら絕對に攻擊を取れ無いかと言ふと、さうでもない。必勝を期し得る或る特殊の場合に於てのみ出來るのだ。それも其の筈、戰鬪機に比べ、お話にならぬ鈍重さを考へて見れば直ぐ分る。そこで爆擊機等の戰鬪は、對戰鬪機と言ふ事になる。其の戰鬪がたとひ俊敏性を持つて、上から下から右から左から、自由自在に攻擊するとは言ふものゝ、相手の爆擊機・偵察機は、四方八方に針鼠的火力放散の編隊を作つて對抗せんとする。それに對して何う云ふ戰法を以て攻擊するかだ。先づ第一に考へられる事は、爆擊機等が編隊を强固に組むことそれ自體が、一つの大なる戰鬪力でもあるから、戰鬪機が決死的猪突を以て、其の編隊中に突貫して、ガラ〳〵と引掻き廻し、敵の編隊をバラ〳〵に解體して仕舞ふことだ。此の戰法は歐洲大戰中、猛者共に依つて行はれた方法だが、中でもフランスのギンヌメル等は其の最たるもので有つた。其の次に考へられる事は、敵機が四方八方に擊ち出す火

破壞橋鐵德英綠漢綠粵軍空海

力を統制なきものに爲ることだ。それには大編隊に對し、前より後より右より左より、同時に猛烈に攻擊し、斯くて敵の機關銃手共をして爲す所を知らざらしめる樣にすることだ。斯うして畳いて更に猛烈果敢な攻擊を反覆すれば、擊墜し得ると言ふことに成るのである。そこで問題は現在の巨大な爆擊機、例へばソヴィエトのテーベー3型は旋回銃六挺（旋回銃とは銃架の上に機關銃がのッかつて居て、機關銃手が膂力を以てグル〳〵四方八方に旋回指向し得る樣に成つて居るのをいふ）も付けて居る。一機が六挺とすれば、五機編隊なら三十挺の機關銃となる。此の多數の實力に對し、戰鬪機の火力がどれ丈優勢を占めるかと言ふ火力問題になるのだ。單に機關銃の數、發射される彈丸の數から考へれば、巨大機の方は割は良いのだが、凡そ空中戰鬪に關する限り、精密・正確と言ふことが唯一の重要必勝條件である。だから巨大編隊群の方が必ずしも勝てるとは限つて居ないし、戰鬪機が畿ら俊敏だからと言つて、戰鬪機の方に軍配を擧げるわけにも行かない。第一回の南京空襲に續いての猛襲の度毎に起る空中戰の有樣を見よ。日本空軍は此の爆擊機ばかりの樣だが、之に對し支那の精鋭戰鬪機、カーチスホーク、ボーイング等は逸早く離陸し、好敵來るや遲しと待ち構へ、天晴にも敢然攻擊して來るのだが、我が旋回銃の威力の前に、犇の如く鯱の如き支那の戰鬪機は、ボロ〳〵槍玉にあがつて仕舞つたでは無いか。之で見ると、爆擊編隊が決然戰鬪機の猛攻に立ち向ふ時、もとより損害はあるが十分之と對抗し得る事を知り得たのである。其の他の偵察機・地上攻擊機對戰鬪機も、同じ要領だから重ねて言はない。とにかく火砲を單座戰鬪機に裝備する趨向の今日、重爆擊機等も火砲を裝備するに至るは當然だ。斯くて惹起する空中戰は何ういふ形態を演出するだらう。今や空中戰は、種

々な意味に於て過渡期と成つて居る。大所高所より見ての空軍機種の選擇、其の武裝、其の隊形、攻擊及防禦戰術等大に研究すべきだと思ふ、と。

爆音　プロペラやエンジン（發動機）の唸る音。特にプロペラの廻轉する音が高い。

飛行服　航空機乘員の着服。空氣の溫度は一粁上る毎に攝氏六度の割合で下り、一二粁以上の高度では溫度に變りが無いとされて居る。從つて高空飛行には乘員の防寒の爲毛皮裏を附け電熱配線を施した飛行服を用ひる。

そゞろ　何故となく心の進むさま。すゞろ。

爆擊　爆彈を投下して敵の軍事施設や市を爆破すること。

整備員　機體やエンジンの手入・調節に從事する係員。何時でも故障なく出發させる樣に整備する苦心は並大抵で無い。

緊張　心の强くひきしまること。はりきること。

一死報告　一死を以て國恩に報いること。一死は死ぬこと。

腹一ぱい　腹に飽き足るほど、滿腹するほど。思ふ存分に。たらふく。

爆彈　普通の爆彈は手で投げるものが多く、軍用では之を手榴彈といふ。此處の爆彈は航空機から投下する投下爆彈を言つたもの。投下爆彈は形狀に依り、茄子型・魚雷型・砲彈型の三種があり、魚雷型は空氣の抵抗が最も少いが、製造が困難な爲、大型には砲彈型が多い。砲彈型は頭部が尖り中部は圓壔形、尾部は細り、其の部に普通四枚の翼を附ける。何の型にも必ず尾翼を附け、落下中、彈道を安定の得る。或爆彈では尾翼を少し扭ぢ、落下中の空氣抵抗で爆彈を長軸の周圍に廻轉して普通の砲彈と同じ樣に安定を良くするものもある。使用目的に依つて、破片爆彈・地雷爆彈・破甲爆彈・特殊爆彈の四種があり、特殊爆彈にはガス爆彈・發煙爆彈・照明爆彈の三種がある。

ゆだねる　委ぬの口語。一切の處置を他にまかす。委任する。まかせる。一任する。

編隊群　空中戰も地上戰と同

じに單獨では用を爲さない。敵地を爆破する爆擊部隊が有れば、それを掩護する戰鬪機や耳目と成つて働く偵察機が之と協力して働かなければならぬ。從つて軍用機を空中戰鬪の上から見ると、（1）擊墜を目的とする攻擊一方の戰鬪機、（2）此の戰鬪機から攻擊された場合、已むなく受動的戰鬪と爲る所謂被攻擊機（爆擊機・偵察機）と、大體此の二つに分れる。是等が旨く編隊を組んで作戰目的を果さねばならぬ。斯くて數十の戰鬪機や爆擊機が鮮次形或は雁行形の堂々たる隊伍を組み、大空をのし歩く姿は勇壯其の物だが、あの隊形の儘を以て戰鬪するのでは無い。あれは敵の戰鬪機の大群を豫期する場合、より有利な隊勢を以て戰鬪しようと言ふのと、集中的大威力を發揮しようと言ふに外ならないのである。

僚機　同じ任務に在る飛行機を言ふ。仲間の飛行機。

小型單座機　空中で敵機を追ひかけ、之を引ッ捕へ、喰ひ付き喰ひ下つて擊ち落して仕舞ふと言ふ專門機は言ふ迄もなく戰鬪機だ。專門とする任務が斯樣に喰ひ下がり喰ひ付く戰鬪機だから、其の運動性は勿論輕捷絶倫、隼の樣でなければならぬ。此の擊墜戰鬪機、言はゞ若武者飛行機、空のライオン的存在は、輕捷を欲するが故に小型の一人乘たが、それ丈輕快性斷然他の飛行機の追從を許さない。

爆擊部隊　爆擊を目的として編隊を組んだ部隊。偵察機や爆擊機が編隊を組んで何うするかと言へば、甲の飛行機の弱點に敵機が突入して來た場合、乙の飛行機はそれを擊つてやる。それと同樣に乙の飛行機は甲の飛行機の弱點を護つてやると言ふ具合に、互に相助け相補ふ主旨である。あの偵察機や爆擊機が三機或は五機で編隊の單位とするのは、他に理窟はあるが實は戰鬪用の爲なのだ。だから彼等が編隊を組む時、四方八方に向ひ隙なく火力は放射され、從つて編隊と言ふ一團は針鼠の樣に主體的に隙の無いも

のに成るわけである。

通信手（ツウシンシュ）　無線電信・電話に依る通信事務を司る人。之で僚機や地上との連絡が保たれる。特に部隊長機との連絡を緊密にし、其の指揮命令に從つて一絲亂れぬ行動をとる。

快速偵察機（クワイソクテイサツキ）　足の早い偵察機。偵察機は偵察飛行機の略稱。敵情の偵察・寫眞撮影等に用ひる軍用機。複座又は三座、操縱者用の固定機關銃・偵察者用の旋回機關銃及下方機關銃・無線裝置等を裝備し、尙爆彈を積む。安全が良くて長時間の飛行に操縱者が疲勞しない事を要求され、胴體は一般に長く、速度は餘り大きく無い。遠距離偵察機・夜間偵察機・昼間偵察機等の種類がある。

格納庫（カクナフコ）　航空機を收藏する倉庫。我が霞ヶ浦の海軍航空隊飛行船格納庫は優に東京驛を收め得ると言ひ、伯林航空港テンペルホーフの格納庫は間口八八米、奥行三〇米、棟高八米。通常無柱。伯林のは引戸は電車のエンジンドアの要領である。永久的のものは鐵筋コンクリート建であるが、飛行機の進歩が速い爲、各國共現在では繼ぎ足し得る樣にしてある。床はアスファルト張を賞揚し、射光乾燥に關し特に注意されて居る。折疊み式で移動の容易なものを移動格納庫と言ひ、佛國ベリノ・獨國ユンケルス等が有名。又天幕を格納天幕と言ふ。

とびのやうな敵の數機（スウキ）　敵機を發見して勇躍する將士の躍る心が讀まれる。地名や固有名詞は省かれて居るが、恐らく今次の事變に於ける實感其の儘であらう。支那空軍の飛行機は、爆擊機ではマーチンダクラス、戰鬪機ではカーチスホーク、ノースロップ等、之れ皆なアメリカ製の世界優秀機だ。（最近ソ聯からも續々優秀機が送られて居る）然るに日本空軍の爲、ボコ〳〵槍玉に上つて仕舞つたのはそも何故だらう。萬里の波濤を越え、長驅遠征の避け得ない衰軀を以て戰はねばならぬ我が空軍に反し、彼は空襲來の警報に

逸早く飛行場を離れ、其の上空に於て陣形を取り、今や遲しと手ぐすね引いて待つて居ると言ふ戰術的利益が山程あるのに、然も我が方は空襲機といふ爆擊專門の飛行機で、空中戰鬪にかけては受動的戰力しか持つて居ないのに反し、彼は戰鬪機といふ輕快俊敏隼の樣なものだ。勝味は當然支那側に在るべきに、其の實際は何うだらう。無論我にも多少の損害はあるが、勝つべき筈の支那機はあべこべにやられて仕舞つて居るでは無いか。此處が空中戰鬪の實相と言ふべきもので、微妙さと精神力の激鬪を物語るもの、算盤通りには豫斷し得ない所がある。

高射砲（カウシヤハウ）　海軍用語では高角砲と言ふ。航空機を射擊するに用ひる加農（カノン）砲で、發射速度の迅速・彈道の齊一を主要點とし、口徑は三七粍・七、五糎・一〇、五糎等を最も廣く用ひ、砲架の種類に依り固定式・自動車式・被牽引式等の別がある。

敵機（テキ）**とからんで**　此の邊が本課の山で讀むからに快哉を叫ばずには居られない。單座戰鬪機が輕砲を付けて居ると居ないとに拘らず、此の戰鬪機同志の戰鬪はお互に輕捷絶倫、飛鳥其の儘の一上一下の亂舞格鬪、敵機の隙卽ち弱點に向つて突進、機關銃の猛射を浴せ掛けるのである。では其の弱點とは何處だ。それは戰鬪機の後方と下方だ。何故なら前方の一方向に對してのみ發射し得るが、それ以外にはサツパリ駄目だからだ。第一後方や下の方は一人乘りな丈に、たとひ敵機が其の方向から攻擊して來ても能く見えない。うつかりすると知らないで居る中にやられて仕舞ふ。それで其の見えない所には殊更頭を廻し、細心の注意を拂つて不意打を喰はぬ樣にする。若し敵機が後方から攻擊し來るよと見れば、忽ち其の輕捷性を利用して或は上昇の鮮かな旋回、敵をして空を突かしめる一方、我は變じて優勢の地位を占める。斯くして或は下、或は上の搦み合の格鬪戰が始まる。結局戰鬪

機對戰闘機の戰闘は、大空を舞ひ盡さんとする亂舞的曲線運動の猛闘だ。だから數機がかたまつて戰闘するわけには行かない。そんな事をしようものなら、空中衝突をして大變な事になる。それでたとへ堂々編隊を組んで行つても、いざとなれば各個バラ〳〵になり、相手の敵機と渡り合はねばならぬのだ。其の一機と一機の渡り合ふ空中戰闘は、飛行機を操縦し乍ら巧妙に機敏に敵機の弱點に付け入り、然も極めて精確な照準をして發射（ハンドルに添へてあるスキッチ裝置で發射する樣に成つて居る）しなければ命中しないのである。それも其の筈、敵の戰闘機も非常なスピードで、巧妙極まりなき曲線運動をやるからである。だから凡そ此の戰闘に關する限り、操縦の巧妙と練達、そして冷靜水の如き沈着を持つて、しかと照準して發射（大抵三百米以内に接近して發射しなければ命中は覺束ない）と言ふ異常な精神力を絶對要件とするのだ。それ故幾ら優秀な飛行機に乘つて居ても、此の要件が具備されねば勝てるものではない。長年月に亘る猛訓練と國民性がいざと成ると光り出すのが實にこれだ。あの支那の飛行家連中が、カーチスホークとか、ボーイングと言つた世界的優秀機に乘つて居乍ら、日本の荒鷲達の手玉に取られるのは、其の精神力と訓練不足で入神の技に這入つて居ない當然の結果だ。蓋し精神力の是程ビインと影響する戰闘は恐らく類が無いであらう。

炸裂（サクレツ）　はぜてさけること。炸藥によつて破裂すること。炸は火藥が發火するの意。炸發。

あふり　アオリと讀む。あふりは煽るの居體言。煽ふは風の爲に動く。吹き動かす。ひるがへる。扇などを動かして風を起すこと。あふりは其の波動。

生意氣（ナマイキ）　慣みの心が淺く、差出て振舞ひ又は誇り顔をする性質。なまじひに意氣がること。知らないで知つた樣な振りをすること。こしやく。知つたかぶり。きいた

ふう。

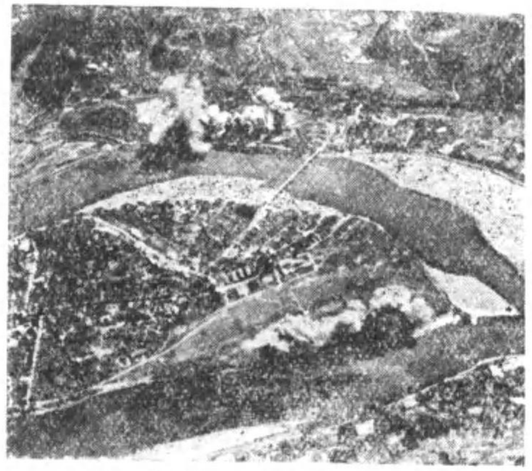
後方機關銃（コウハウキクワンジウ）　空の荒鷲とも言ふべき單座戰闘機の武力は、超快速力に加ふるに輕捷絶倫な俊敏性と、主に廻轉中のプロペラの透間を通して猛焔の如く吐き出す機關銃の威力との合作である。其の機關銃は操縦席の前に飛行機の中心線に並行して据ゑ付けてある。だから操縦者が敵機に對し自分の飛行機を正しく指向すれば、其の方向は即ち機關銃が火を吐き出す方向だ。從つて其の方向を敵機に向けると言ふことが、快速であり輕捷である丈に上空からでも下空からでも最も瞬間的に輕妙に行はれるあの電光一閃的突貫力を發揮し得る所以である。然も敵機を脚下に見る時、二千米くらゐ下の方に居るのに對しても、ビューンと急轉直下、眞逆樣に落ち來るよと見る間もあらばこそ、物凄い火を噴き付けるのだ。それが又眞上に見た場合でも、異常の急上昇能力を以て下から上への急猛射である。然も其の機關銃は大抵の空軍國では二挺だけ裝備して居るが、ソヴィエイトのそれに至つては殆ど皆な四挺を据ゑ付けて居る。それなら其の四挺を何處に据ゑ付けるかと言へば。他の二挺は翼の上或は胴體の兩側へ付けて居る。それらは皆な電導裝置一つに依つて同時に發射する樣に成つて居る。そこで其の發射速度はと言へば、一分間に數百發から千發の多きに及んで居る。だから今假りに七百發の發射速度とすれば、四挺ならば二千八百發と言ふ驚く可き多數の彈丸が同時に吐き出される事に成るのだ。そして機關銃には近頃口徑の大きいものを据ゑ付ける傾向が顯著で、從來七粍七位が普通で有つたのを、十二粍七位のものを用ゐる樣に成つた。佛蘭西の如きは斷然機關銃の代りに輕砲を裝備し、大きな砲彈を以て擊墜してやらうと言ふ結論に到達し、今ではどの戰闘機も輕砲を裝備して居る。此の輕砲はプロペラの軸を砲身として、プロペラとは關係無しに發射する樣に工夫してある。今

我が空軍と戰つて居る支那のボーイング戰鬪機には、機關銃が二挺付いて居るが、一挺は七粍級のもの、他の一挺は十二粍七の大口徑のものである。

一糸亂れぬ　絲一筋も亂れずの意で、物事の秩序正しく整頓すること。

右往左往　右に往き左に往き、ちり〳〵になる狀をいふ。秩序もなく亂れに亂れたさま。しどろもどろ。

胴體から離れた爆彈　地上の築造物を破壞する爆彈は地雷爆彈である。此の爆彈は爆發ガスの威力で築造物を破壞するのが目的であるから、爆藥量は全彈の六〇%にも達し、小型は少く五〇瓩以上、最近は二、〇〇〇瓩に達する大型もある。此の大型が地上に落下すると、直徑二〇米、深さ七米の漏斗孔を作り、一、二〇〇立方米の土を掘り返へす。人馬を殺傷するを目的とする爆彈は破片爆彈で、之は彈肉も相當に厚く、爆彈量は全彈の三〇%以下、三〇瓩以内の小爆彈である。此の外に軍艦や要塞のベトン等を目標とする破甲爆彈と言ふのがある。此の爆彈は堅固な頭部を有し、爆彈量も地雷爆彈に同じい。爆彈を飛行機に搭載するには、垂直に吊すものと水平に吊すものとの二法があり、大型は水平に、小型は極く稀に垂直に吊す。投下には唯止めを外す丈であるが、飛行機の速さがある故、水平方向に持ち去られ、結局彈道は拋物線と成る。地雷爆彈は又軍艦攻擊に有力な武器で、甲板上に命中しなくても其の附近に落下すると、水中爆發的效果を以て大破する力がある。



南支粵漢線の爆破（地雷爆彈）

隼　鷹の一種。小さくて力强く、動作の猛烈なもの。

鋭　無慚ななきがら。此處は滅茶々々に破壞されて骸骨に成つた敵の飛行機。

彈痕　たまあと。此處は投下された爆彈のあと。

機翼を連ねて　機翼は飛行機のつばさ。荒鷲部隊の凱旋のさまを思はせる。

指導精神

支那事變發生以來我が航空機の果敢なる活躍に漸次慣れて來た國民は、當初のやうに空爆・空襲等の報道に眼を見張らなく成つた。然し空中戰・敵機擊墜等と言ふ記事やニュースには　我知らず興奮を覺え血を湧かさずには居ない。空中戰の戰略上・戰果上の價値如何は別として、第一線に働く般空將士も、敵機と空中戰に干戈を交へん事を寢ても覺めてもひたすらに念願して居るかに見える。去る九月下旬（昭和十二年）南京大空襲に於ける敵味方數十機入亂れての大空襲戰には、我々は確に血と湧立つ興奮と、息づまる壓感を覺えたので有つた。國民は是迄飛行機に就て讀み聞き見て來た雜多な或は朧氣な知識を基礎として、空中に火を吐いて畫く喰ふか喰はれるかの格鬪の模樣を、各人各樣に想像して見たに違ひない。一上一下、左旋、右轉、上昇、下降、宙返り、錐揉み、反轉、横轉、倒轉等々、之が火と煙と音と唸りと彈丸と血の間に繰返されたのだ。是迄國民が映畫の世界位で見聞きして來た空中戰が、現實に南京の空で行はれたのだ。國民は銘々に、攻勢にも立ち、受身にも立つて見て、興奮と緊張の數刻を送つたに違ひない。そしてラヂオや電光ニ

ュースで我が軍の收めた優秀な戰果を知つて、恰も自身が空中戰を終へて飛行基地に歸還着陸した時の樣な安堵をしたに違ひない。此の興奮は本課に於ても恐らく同樣で有らうが、指導の任に當る者としては、航空機の性能や飛行性に就て一通りの豫備知識を有つ事は大切であらう。（以下飛行機專門の技術家の談に據る）

航空機の性能と飛行性と言ふ方面を研究する學問卽ち飛行機の運動學を飛行機力學と稱する。飛行機力學では其の研究の便宜上、空中運動の能力と特性を性能と飛行性に分けて居る。更に飛行性は安定性・操縱性・運動性に細別して考へて居る。

（1）性　能　飛行機の性能は、掻撮んで言へば水平又は垂直に一點から他點へ到達する速力又は時間と言ひ得る。以下本課と運絡を保ちつゝ性能の大要を說明する。其の順序は先づ某地で飛行機がプロペラを回轉し始めて離陸（離水）上昇し、前進して任務を終へ歸還着陸（着水）する迄の順序に依るのが便宜であらう。

離　陸　飛行機は成べく短時間に成べく短距離で離陸して呉れる事が望ましい。プロペラの回轉から出る牽引力は空氣抵抗と地面摩擦に打勝つて飛行機を加速する。速度が增せば主翼に働く空氣揚力が增し、離陸速度に達すれば、揚力と重量とが等しく成つて離陸する。是迄に要する時間及距離が離陸時間及離陸距離である。戰時で問題に成るのは飛行基地だ、前進根據地では十分廣い飛行場を得られぬのが當然だ。濕潤凹凸な地面は摩擦抵抗を增し、且離陸滑走中前後上下左右に不安定動搖を起させて離陸を困難ならしめるのだ。此の處で働く航空將士の苦心は並大抵では無い。

戰時で當然問題に成るのは任務の距離が長い爲にガソリンを臨時餘計に積込む必要に迫られる事だ。離陸距離は飛行機重量の二乘に比例する。狹い惡い飛行場でオーバー・ロードした飛行機を離陸させるのは非常に苦心を要する。

離陸着陸の操作は陸軍と海軍とでは少し異つてゐる。海軍では狹い航空母艦の甲板に離着陸（艦）することを常に念頭に置かねばならない。國內の飛行場ならば廣い飛行場と立派な滑走路が用意出來る。携行する爆彈の三・四倍ものガソリンを積込まねばならぬ遠距離爆擊機が離陸出來るのは此の御蔭だ。航空母艦に許された滑走路は百米前後だ。風を利用しても離艦し得る重量限度は大きくはない。輕爆擊機程度だ。カタパルトの滑走路は三〇米位だ。火藥の爆發力で助けても出發し得る飛行機は偵察機・戰鬪機級の小型のものだ。

上　昇　上昇の原理は汽車や自動車が坂道を上るのと全く同じだ。飛行機は空氣抵抗に、自動車は地面摩擦に、汽車はレールの摩擦（主として）に打勝つ馬力の外に、何れも各々の重量を垂直の方向に持上げて行く丈の餘計の馬力が必要だ。從つて馬力が大きくて機體が輕ければ上昇率（前進速度の垂直成分）は良い事が分る。發動機の發達に依り輕量にして大馬力が出る樣に成つたこと、プロペラが進歩したこと、機體が空氣力學的に改良された事、材料構造法の發達に依り機體が輕く出來るやうに成つたこと等で戰鬪機の上昇率の如きは三・四年の間に八米一秒から二五米一秒迄進んだ。五千米迄五分位で上昇するのである。驚くべき進歩だ。上昇率は高度が增すと共に減少する。發動機の馬力が空氣密度の減少と共に減少するからだ。人間の心臟力が高山に登れば減少すると同じだ。そして或る高度に達すると上昇率は零になる。卽ちそれ以上の高度には昇れなくなる。それを上昇限度と云つてゐる。上昇率の大きい飛行機は上昇限度も高い。上昇率と上昇限度は飛行機の上昇能力の尺度だ。空中戰の要件の一つは敵機より高位の位置を占めることである。蓋し、昇るは難く降るは易しの根本的且簡單な理由に依るのだ。

最近の發動機主として過給器の異常な進歩は、低空よりも數十米の上空で餘計の馬力を持續的に出しめるに至つた。それが爲に、戰鬪機として最も活躍し易い高度は數年前の三・四千米から五・六千米に向上した。上昇限度は一萬二千米と云ふ工合になつてゐる。

水平飛行　速度ばかりが飛行機の能ではない。奔馬の如き高速の戰鬪機を低速の偵察機がうまく操つて空

中戰で却て勝利を占める實例もある。然し、水平速度の速い飛行機は多くは上昇其他の能力も優秀であつて、水平飛行速度こそ飛行機の性能を判定する最大の尺度とされてゐる。時速四八〇粁秒速に直せば一三三米餘は戰闘機としては現在全く使ひこなした速度と成つた。一臺から最大一四〇〇馬力出る樣な優秀な發動機が實用されて來たから、次の時代の戰闘機は最大時速五二〇乃至五六〇粁と成るだらう。一般に見慣れてゐる飛行機は空氣抵抗に打勝ち乍ら空氣をかき分け前進してゐるかに見える。然し時速五〇〇粁近くにも成ると空中に飛行機と云ふ錐を猛烈に揷し込んで行くやうな感がするのもだ。勿論速度は、發動機に最大馬力を出させたときに最大である。然し戰闘機が基地より戰地に赴く途中は精々發動機を休ませ度い。又長距離爆擊機では出來るだけガソリンを節約し度い。それ故すべての飛行機は、發動機として樂な且燃料消費料の少い或馬力で普通は飛ぶ。此の馬力は最大馬力の六〇乃至八〇%である。此の際の速度を巡航速度と云ふ。巡航速度も最大速度の六〇乃至八〇%である。

降　下　降下の中にはグライダーの降下の樣な滑空も含んでゐるが、玆では實戰に必要な急降下に就て述べる。急降下は飛行機の逆落しだ。機首を下にして殆ど垂直に降りて來るのだ。いや落ちて來るのだ。地面に到達する迄に恢復することを豫期してゐるから墜落とは稱しないが、事實は垂直の墜落に外ならぬのだ。雨粒が落ちて來るのや野球のフライの球が落ちて來るのと力學的に全く同じだからだ。上り坂を喘ぎ喘ぎ上つてゐた自動車や汽車が下り坂に成つてホッと安心したかの樣に靜蕭且快速になるに似て、上昇飛行に於ける苦勞に比べれば降下の氣易さはまるで夢の樣だ。發動機の全馬力を以て漸く二五米一秒の上昇率を出した飛行機が一五〇米一秒の降下率を出すことは平氣だ。いや〳〵二〇〇米一秒位の速度でも降下するのだ。唯そんな速い降下率にしては水平飛行へ恢復する際に機體の强度も堪へられなく成るから、降下率に制限を附けてゐるのだ。

着　陸　垂直に上昇し垂直に着陸出來る飛行機を作つて吳れと一般の人から度々註文を受ける。これは我

我飛行機の專門家としても望む處なのだ。處が、幾多先人の貴重な努力と犧牲の歷史を顧みるとき、遺憾ながら現在及び近き將來に於ては、此の飛行機は全くの夢に過ぎぬのだ。それ故せめて短い着陸滑走距離で着陸出來る方法をと研究が進められたのだ。その爲には急角度で成べく緩速度で以て降りて來ることが大切だ。處が、飛行機の高速度化に伴ひ、逆に緩角度且高速度でしか着陸出來なく成つて、飛行機は着陸の問題で正に危機に瀕せんとしたのだ。これを救ふて吳れた發明が下げ翼だ。此の下げ翼に依つて高速度機も比較的急角度で地面に近づき、比較的低速度で着陸出來るやうに成つた。着陸すれば地面摩擦と空氣抵抗とで減速されて停止するに至る。接地してから停止迄の距離及び時間を着陸距離及び着陸時間と云ふ。

高速度機の着陸は下げ翼の御蔭の外に操縱術が進んだことに依ることを指摘せねばならぬ。數年前の着陸速度は九〇粁時であつた。現在の高速機・戰闘機では下げ翼を開いても尙一二〇粁前後、場合に依つては一三〇粁時に成つてゐる。こんな速い飛行機を前進根據地の悪い地面へ着陸させる操縱者の苦心は並大抵ではない。着陸後相當速度の落ちた處ではブレーキをかけて停止を早める。

（2）**飛行性**　飛行機力學の體系に從つて是迄說明を進めて來たので、一先づ着陸して仕舞つた樣な恰好に成つたが、これから空中戰の運動學に入る。

安定性　安定性とは飛行中の飛行機の落つき加減だ。即ち一定の速度で定常飛行中の飛行機の落つきの度合だ。だから變轉極まり無き空中戰に之を持出すのは聊か妙かも知れぬが、操縱性・運動性と重要な關係があるのだ。安定理論では飛行機の安定を縱の安定と横の安定とに分けてゐる。今一定速度で水平飛行してゐる飛行機が正面下方から上向の突風を受けたとしよう。飛行機は當然急に上方へ押上げられる譯だ。不安定な飛行機は、其の際早速に對策を講ずる。即ち昇降舵を操舵しなければ、そのまゝ顚覆する危險があるのだ。安定な飛行機は、その際何等の操作をしなくても、一度押上げられた後目然と下降して來て、少しく上下の波彩動搖は繰返すが、暫くすれば又元の水平飛行に復歸し得るのだ。これを縱の——眞正面内の安定と

稱してゐる。又、假に左なり右なりの横から突風を受けたとする。飛行機はその瞬間横及び左右に搖れるだらう。不安定な飛行機だと早速に對策卽ち補助翼及び方向舵の操舵をしなければ、そのまゝ更に横を向いて遂には錐揉みになつてしまふのだ。安定な飛行機であれば、その際別段に操舵しなくても、多少左右に機首を振つて蛇行したりはするが、結局又元の樣な直線飛行に戻つて呉れるのだ。之が横の安定だ。

操縱性　空中戰での重要な問題は飛行機の視界と射界だ。現今實用してゐる戰鬪機は多くは單座だ。從つて機關銃は機體に前向に固定してゐる。それ故、視界も射界も前方のみと云へる。爆擊機はその大小に應じて三人乃至八人位座乘し、機關銃も數挺積載出來るから視界も射界も廣い。それにしても後尾には尾翼等に遮られて普通は幾分の死角が殘り勝だ。空中戰で敵機を射落すには、敵の目と彈の行き屆かぬ死角をねらうのが第一條件だ。大體として敵機の後尾をねらふべきだ。纏れつ解けつ常に敵機の尻を追つて行けば勝てるのだ。

水平飛行中敵機が突然前上方に現はれたとする。操縱者は直ちに上昇飛行に移らねはならない。又敵機が左方へ進路を變へたとする、操縱者は直ちに左旋回の操作をしなければならない。操縱性は舵の利きと舵の重さに分けて考へてゐる。舵の利きとは操舵に對する飛行機の反應の遲鈍・敏速の度合を意味するのだ。例として、水平飛行より上昇に移るときを考へてみやう。願はくは、昇降舵角を僅とつたゞけで飛行機は何等の遲れ無しに早速に且大きく反應して急角度の上昇に入つて欲しいのだ。補助翼や方向舵の利きも同然だ。舵の利きの悪い飛行機は、操舵して暫く時間を經過しないと反應を始めて呉れぬのだ。又僅飛行機を變動させるにも大きな舵角を與へねばいけぬ樣なことに成るのだ。操縱卽ち操舵に應じて飛行機が鋭敏に且時間の遲れを生ずること無しに反應して呉れるので無くては、敵機の死角をねらうも何もあつたものではない。舵の重さは文字通り操舵力の大小のことだ。昔の飛行機には兩手で頑張らねば操舵出來ぬ樣なものも有つた。現在はそんな馬鹿な飛行機は無いが、操舵が重くも無いし輕くも無し、丁度手頃に成る樣に設計することは

仲々に難しいのだ。

運動性　運動性とは飛行機の空中に於ける運動の自由さを表はす、もう少し明確に云へば、空中に畫く各種圖形か如何に小半徑に如何に短時間に又如何に容易に行ひ得るかの度合を示すのだ。

既述の通り、極度の小半徑と極度の短時間とを要求しなければ、優秀な戰鬪機等は吾々が想像し得る如何なる圖形をも空中に畫き得るものだ。けれど、其の基本運動はそんなに數多いものではない。卽ち普通は、垂直面内に於ける代表運動として宙返りを、水平面内に於ける代表運動として旋回を、機體自身の廻りの廻轉運動の代表として横轉を考へる事にしてゐる。蓋し宙返り・旋回及横轉・或はそれ等に近似したもの丶一部又は全部を適當に組合せれば、大概の空中運動は構成し得るからだ。宙返りに關するものを縱の運動性と云ひ、旋回に關するものを横の運動性と稱してゐる。宙返りが成べく小半徑に、成べく短時間に然も容易に且平滑に實施し得るならば、縱の運動性は良いと云ふ。垂直面内の代表運動として宙返りを撰んだ譯は、宙返りは水平飛行からの急上昇と急降下からの引起しと云ふ重要な二運動を含んでゐるからだ。水平飛行から昇降舵をぐつと引いて急昇に入る。やがて宙返りの頂上に達して後は機首を下げて急降下となる。此處で機首を再び上げて急速に水平に引起すのだ。計算でも實際飛行でも分るが、宙返りに入る前の水平速度が早過ぎると、宙返りの半徑は大きく成り時間も長くなる。それ故高速度の飛行機は少しく速度を落してから宙返りに入る樣にしてゐる。然し、余り低速度で有つては宙返りの頂上に到達し得ずに途中で變な恰好に成つて落下して來ることになる。

茲で一言すべきは、その機體本來としては十分の宙返りや急旋回をなす能力は有り乍ら、卽ち、本來は優秀な運動性を持ち乍ら、該機の操縱性が足らぬ爲に、折角乍ら之が發揮出來ぬことが有り得ることだ。舵の利きが足らず、又は舵が重過ぎて其の爲操縱が思ふ樣に行かぬでは遺憾千萬だ。優秀な運動性の前提條件として優秀な操縱性が要求される次第だ。

運動性は發動機の馬力に大いに左右される。馬力の如何は操縱性に大なる影響があるのは勿論だ。空中運動のもう一つの要素は横轉だ。飛行方向を軸にして機體が一回轉する運動だ。緩横轉・急横轉がある。横轉が容易に行はれる爲には何よりも補助翼の利きが大切だ云々と、適宜參照して教材精神を徹底させて欲しい。

指導形態

指導上の認識點

1　今次の事變で我が荒鷲部隊は世界戰史に誇るべき燦たる武勳を耀かしたが、其の勇猛果敢な活躍振を童心に刻み附けようと意圖したのが卽ち本課である。飛行機は既に卷九に『飛行機の發明』があり、更に旅客機に依る『空の旅』もあるが、壯烈な空中戰は之が最初である。感激の坩堝の中に在る今日、兒童も必ずや胸を躍らす事であらう。

2　本課の指標は我が空軍の精鋭荒鷲部隊の活躍振に直面させ、其の意氣を鼓舞し愛國の熱情をたぎらせ一死報國の決意を强固ならしめるに在る。

3　指導に際しては先づ各飛行機の性能と協同作戰の絕妙さに就いて知らせ、空軍活躍の素晴しさに感謝感激せしめる。

4　戰爭文學の華たる本課を味到させ、其のきびきびした筆致と壯快至極な展開描寫に傾倒させるのが形式方面の眼目である。

5　尙本課は假想的に場所も部隊名も一切記入されて無いが、今次の事變から取つた眞新しい題材丈に童心に深い感銘を與へるに違ひない。

6　本課は大體四時間見當で指導を終る樣立案すべきであらう。

第一次指導

1　題目の指導。

▽題目が既に興味百パーセントである。挿畫と對照して讀心を唆るが良い。

2　讀心を利し直に全課を通讀させる。

▽讀後の第一印象は大切に記帳させて置く。

3　ノート學習。

▽題材が題材であるから成べく干涉を避け、ノートを中心に力の限を盡して自學させる。

4　不明の箇所を質問させる。

▽難語句は前後の關係を考へ、先づ類推させてから指導する。

明方の夢　爆音　飛行服　軍刀　壓する
そとろ　爆擊　整備員　不眠の努力
全員　部隊長　慈愛　緊張　一死報國
腹一ぱい　愛機　ゆだねる　出發信號
離陸　編隊群　高度　西十度　時速
僚機　小型戰鬪機　爆擊部隊　掩護
頼もしい　地上部隊　戰線　またゞ中
通信手　快速偵察機　報告文　行動開始
格納庫　機上無線電話　爆擊目標　當分
こもゝ　高射砲　からんで　こしやく
突進　炸裂　あふり　機關銃彈　生意氣
後方機關銃　一絲亂れぬ　もがいて
右往左往　爆擊開始命令　胴體　絲を引く
一瞬　ものすごい　全彈命中　痛快
隼　墜落　悲鳴　勇敢　殘骸　彈痕　あわてふためいて　しり目　機翼

▽新出文字は字書を輔導して索引させる。

爆　壓　眠　昇　速　綱　翼

5　低音讀。

▽息詰る場面の雰圍氣に浸らせて。

6　指名讀。

▽適宜に句切つて、輪讀式に。

7　挿畫と文とを照合させる。

▽何處を畫にしたものか・文に何う出て居るか等。

8　文の荒筋を摑ませる。

▽梗概を時間的に記帳させる。

9　話方。

▽前項の梗概に感想を交へて。

10　ノートを整理して提出させる。

第二次指導

1 一回靜かに通讀させる。
2 問題學習。
▽グループに分れ問題を作製させる、話合。
3 ▽作製した問題を中心に。
—何時頃出發したか。
—整備員の任務は？
—部隊長の注意は？
—編隊群の高度は？ 時速は？
—小型戰鬪機の性能は？
—快速偵察機の任務は？
—部隊長の命令は？
—敵機は？ 其の數は？
—空中戰の壯烈さは？
—爆擊の物凄さは？
—爆擊後の敵狀は？
—任務を終つた我が編隊は？
4 逐次研究。
▽軍隊語や戰術語に注意させて。
5 書取。
▽前項と連繫し文の中核を成す重要な箇所を選んで。

午劍二時、明方の夢は爆音に破られた。二十數機の爆音が高らかに響いて、廣い場内一面を壓する。 全員整列して部隊長の注意を聞く。 腹一ぱい爆彈をかゝへた愛機に身をゆだねると、やがて出發信號の下に滑り出す。 時に午前二時三十五分。部隊長機を先頭に離陸して、ぐん〳〵上昇する。 千米から千五百、二千と高度がふえる。 遂に四千米の高度に達して、厚い飛行服の上から寒さがしみ込む。 眞南から西十度の方向を目ざしながら、時速四百粁、ほの暗い空をたゞ一直線に飛んでゐるのだ。 突然通信手の顏が緊張した。 やがて通信紙にしたゝめた報告文が機内に廻される。 すると部隊長機から追つかけるやうに、機

上無線電話による命令が傳へられた。同時に我が戰鬪機編隊群は矢のやうに前進し出した。 と見れば、はるか彼方にとびのやうな敵の數機、多分戰鬪機であらう。六機・八機・九機、刻々に其の數を增す。 忽ち我が編隊群の下方に、上方に、こも〴〵花火のやうな白煙が上る。戰鬪機は、何時の間にか編隊を解いて、自在の活動に移つた。 各機はそれ〴〵敵機とからんでの空中戰だ。 敵に直面しながら、我が爆擊編隊群は、一絲亂れぬ隊形を以て刻々目標に迫る。 飛行場は目前に來た。 『それつ。』とばかり、一彈・二彈・續いて第三・第四……。一瞬にして、飛行場にものすごい黑煙がうづ卷いた。 全彈命中。 天皇陛下萬歲。 萬歲萬歲。 戰鬪機の活動は、なほ續いてゐる。 隼のやうに飛遨ひ入亂れての一騎討。 はつとして思はず手に汗を握る。 黑煙晴れ行く眼下には、も

ゝ飛行機も格納庫もなかつた。 任務は終つた。 機翼を連ねていゝ〳〵歸途についた。

6 範讀。
▽文の觀點に注意させて。
7 話合。
▽讀後の所感を中心に。
8 指名讀。
▽大きく句切つて、輪讀式に。
9 低音讀。
▽活潑々地壯快至極な場面の雰圍氣に浸らせて。
10 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 通讀練習
▽聲を出して反覆通讀させる。
2 輪讀。
▽座席順に、又尻取式に指名させて。
3 指名讀。

▽中・劣生を主として。

4　話合。

▽文を中心に各自の見る所を話させる。教師も一員と成つて陸海軍機の現狀や事變に於ける活躍振等を感興深く話してやる。

5　文意の檢討。

▽文意の所在を確め表理面に即して例證させる。

6　學習事項の整理。

▽各種飛行機の性能・空軍の威力・愛國の熱情・空中戰の壯烈さ・爆擊の物凄さ等。

7　補充說話。

▽世界の空軍・英米獨佛伊の現狀・特にソ支空軍に對する關心等。

8　朗讀練習。

9　話方練習。

10　視寫・聽寫練習。

11　新出文字の書取。

12　語句の應用練習。

13　テスト。

テスト問題

一、次の熟語の類語又は反對語を書きなさい。

1　任務（　　）　2　掩護（　　）

3　無數（　　）　4　感謝（　　）

5　悲鳴（　　）　6　痛快（　　）

7　直面（　　）　8　緊張（　　）

9　編隊（　　）　10　戰線（　　）

二、次の語句に振假名を附けて解釋しなさい。

1　整備員　2　右往左往

3　高射砲

4　僚機　5　格納庫

6　彈痕

7　墜落　8　戰鬪機

9　殘骸

10　生意氣

三、次の語句を二つ又は三つ使つて短文五個を作りなさい。

矢のやうに　頼もしい　確實

報告　一面　突進

萬歲　報國　場内

歡聲　命令　爆音

一死　悲鳴　感謝

愛機　勇敢　命中

第二十八　日本刀

日本精神の强調を目的とし日本刀の特徴を擧げ、之と我が民族性の關係を叙した本卷掉尾を飾る絶好の議論文である。其の用語の周到な點と內容の充實した點に於て、恐らく類を絶した逸作と言へよう。我々は特色ある本卷の最後に此の雄篇を迎へ得た事を喜ばずには居られない。

近代工業は機械化して長足の進歩を遂げ乍ら、日本刀の鍛錬のみは今以て刀鍛冶を必要とするのは何故であらう。今次の事變に際しても出征將校の殆ど總てが古刀を探し求め、得々として戰地に臨んだ事實は果して何を物語るもので有らう。元來日本刀の原料は邦土の特產物たる砂鐵から採られた。尤も一時は外來の南蠻鐵を使用した事も有るには有つたが、結局中國地方から產する良質の砂鐵を以て最上とし之を炭火で精錬した。木炭の中には鐵に有害な物質は殆ど含まれて居ない。然し爐の設備が今日の製鐵法と比較し、著しく不完全で高熱が出せない。從つて低溫度の熱で鐵が造られる故、却つて不純物が鐵に雜る心配が無い。之が日本刀を優秀ならしめた根本原因である。　昔の刀鍛冶は急がず急かず、打延しては折り更に熔接する所謂"そらつけ"の作業を二三十回も繰返し、大鎚を以て打叩く數は一日二千回以上にも及ぶと言ふ。鍛錬の目的は鋼鐵の中の夾雜物を絞り出し、硬度を平等にし不純物の分布を平均させ、且つ刀劍の面上に現れる肌を美しくすると言ふ點にある。理想的に丹念に鍛錬された日本刀の鋼質は、顯微鏡で見ても質の均一なる事全く驚嘆に値すると言はれ、世界第一と誇る所以も亦此の點にある。鍛錬の度數が多ければ良いと言ふ譯では

無く、過ぎれば却つて役に立たぬ鋼鐵と成る。其の邊の呼吸は長い經驗者の第六感に依つて極められるので、言葉や文字では到底表現出來ないと言はれる。されば こそ神を祀つて仕事場を淨め、齋戒沐浴の上で仕事に取掛かり、心神を爽かにして不純な妄念を去り、透徹した傳統精神に凝つて此の作業を續けたものである。日本刀の優秀性が何んなに羨しくても、外國人に眞似の出來ないのは此の邊の事情に有らう。斯うして苦心慘憺精魂を込めて鍛へ上げた日本刀で有ればこそ、之を帶した武士の心意氣にも自然と嚴肅な特有の日本精神が籠るに至つたのは決して偶然では無い。本課は其の精神的方面に力を込め、傳來の日本精神や武士道の精華を特に强調されて居る。卷頭の吉野山と相呼應し日本精神で始め日本精神を以て結ぶ、其の間或は文化の源流を探り、或は文化の由來する所を確め、日毎に伸び行く現代日本の姿をまざ〳〵と心に描かせようとする。本卷は全く日本精神高揚の卷と言ふべきである。

文字語句

新出文字

鍛（タン）　練（レン）　値（ネ）　善（ゼン）

讀書六字

手（タ）（新出は卷二、テ）　殊（ヒト）（新出は卷八、コト）　價（カ）（新出は卷九、アタヒ）　舌（ザツ）（新出は卷七、シタ）　起（タツ）（新出は卷五、オキ）　鍛（キタヘ）（新出は本課、タン）

語句と其の解

日本刀（ニホンタウ）　我が國固有の鍛錬法に依つてきたへた刀劍。普通ニホンタウと言ふ。我が文獻に古くから見

えるのは、古事記上卷、大國主神「その汝（イマシ）が持てる生太刀（イクタチ）生弓矢」、同天孫降臨の條、「故（カレ）爾（ココ）に天忍日命・天津久米命二人、天の石靫（イハユギ）を取負ひ、頭椎（クブツチ）の太刀（九州系統の太刀といふ）を取佩き」、同須佐之男命、「横刀（タチ）及大鏡」、日本書紀、神功皇后五十二年、「久氐（クテ）等從二千熊長彦一詣（マチケリ）之、則獻二七枝刀（ナナツサヤノタチ）一口（今、石上神宮の寶劍、左右三枝の三叉鉾）・七子（ナナツコ）鏡一面、及種々寶重」。タチは卽ち今言ふ日本刀で、截・斷の義。ツルギ（劍・劒）は腰間に釣（ツリ）佩（ハ）くものと言ふ事から釣佩（ツリハキ）の約言であるとする。古事記上卷、須佐之男命の八俣遠呂智退治、「十拳劍（トツカノツルギ）（一に其の名を天羽々斬劍。十拳の拳は東で四本の指を竝べた長さ、長く立派な事を言ふ）中卷、倭健命東征の思國歌（クニシヌビウタ）「劍の太刀」・武德編年集成、「近衞院より源三位頼政に賜ふところの獅子王の劍」・金光明最勝王經二卷、夢見懺悔品、「願以二智劍一（チエノツルギ）爲二斷除一」等と見え、共に同じく日本人の魂としてカタナの名のもとに尊重されて居る。

鋭利（エイリ）　刀劍等の鋭くて切れ味のよいこと。鋭利は日本刀の大切な要素で、此の要素を缺いだ刀劍は鈍刀卽ちナマクラである。

源家（ゲンケ）　源姓を帶びた氏族。皇別の所謂源平藤橘の一たる名族。弘仁五年五月嵯峨天皇詔、朕（中略）男女稍衆、未識子道、還爲人父、辱累封邑、空費府庫、朕儁子懷、思除親王之號賜朝臣之姓、編爲同籍、從事於公、出身之初、一叙六位云々と、卽ち諸皇子の親王で無い者信（マコト）・弘（ヒロシ）・常（ツネ）・寛（ユタカ）・明（アキラ）・定（サタム）等に源朝臣の姓を賜ひ左京に貫し、信を以て戸主とした。これ嵯峨源氏で源姓の始。後、仁明・文德・

清和・陽成・光孝・宇多・醍醐・村上・冷泉・花山・三條・後三條・順德・後嵯峨等十餘流を生じ、清和源氏最も著れ、次で嵯峨・宇多・村上等が著名。白旗・白符を自家目標とし、常に平家と對立し、初、源氏は頼信・頼義・義家等出で勢隆盛であつたが、崇德天皇の頃から平氏擡頭、保元平治の亂後源氏の勢衰へ、平氏の壓迫に甘んじた。然るに驕る平氏は久しからず、頼政・頼朝擧兵、連戰連勝遂に壇浦に平氏を滅ぼし、頼朝は鎌倉に覇府を開き征夷大將軍を賜り、源氏一族常に武家頭領たる基は開かれた。後世征夷大將軍は源氏の出に限り、豐太閤すら之を望んで遂に得られ無かつたと言ふ。

鬚切（ヒゲキリ）　古來刀劍が尊重され神聖視された結果。我が國には之にまつはる種々の傳說物語が行はれ、後世の作者には絶好の材料を提供した。神話に散見する十束劍（トツカノツルギ）、素盞嗚尊が八岐大蛇を切つた天羽々切劍（アメノハヽギリノツルギ）、其の大蛇の尾の叢雲の立ち渡る所に得られたと言ふ天叢雲劍（アメノムラクモノツルギ）、此の劍が草薙劍と改名されるに至つた日本武尊の英雄譚など、廣く人口に膾炙して居る。そして此の劍が畏くも三種の神器の一として、皇位の繼承に缺ぎ難きものと成つたこと、醍醐天皇以來、皇太子に傳はる壺切御劍の事なども、國民に周く知られて居る。かやうに皇室に寶劍の傳來あるに倣つてか、臣下の名族にも傳家の寶刀を尊ぶ風が普く行はれ、それに就いて樣々な奇しき物語も傳へられた。平家物語や源平盛衰記に見える源平二氏の寶劍は、其の尤なるものであらう。卽ち源氏の鬚切丸・膝丸・小烏丸、平家の小烏丸・拔丸がそれである。鬚切丸・膝丸は源滿仲が名匠文壽に鍛へさせたもので、試斬の際一は罪人の鬚を加へ、他は膝を加へて斬つたので斯く名付けたと言ひ、頼光の時、渡邊綱が鬚切で戾橋（モドリバシ）の鬼女の腕を切つたの

で之を鬼切と改名、又頼光が己を惱ます大蜘蛛を膝丸で切つたので之を蜘蛛切丸と改稱した。頼光の弟頼信の嫡男頼義は、此の二劍の威靈を以て前九年役に安倍兄弟を平げ、更に義家は後三年役に武衡・家衡を討伐した。之が爲義に傳つた時の事、夜に入ると鬼切は獅の樣に、蜘蛛切は蛇の泣く樣に吼えたから、前者を獅子の子、後者を吼丸と改めた。後吼丸は鞏熊野別當教眞に與へたので、爲義は其の代りとして獅子の子に似せて之より二分程長い劍を作らせ、鳥の目貫に因んで小烏丸と命名した。或時此の兩劍を竝べて立てゝ置くと、突然カラ〳〵と仆れ、其の瞬間獅子の子が小烏丸を切つて同じ長さにした。そこで獅子の子を友切丸と改めたが、後此の名が祟つて自分は子義朝に斬られ、義朝は家來に討たれて、首と成つて小烏丸と共に平家の見參に入れられる事と成つた。斯くて八幡の神託で友切は舊名鬚切に返つたが、頼朝は敵に奪はれるのを恐れ一時熱田宮に納め、治承四年の旗擧に再び之を帶びて起つた。一方吼丸は壽永の春淺く、熊野の山から出され義經の手に入り、薄緣と改名されて其の佩刀と成つたが、後箱根權現に納められ更に曾我兄弟が之で父の仇を報じ、終には頼朝の手に歸した。さて平家重代の小烏丸といふは、平家の遠祖桓武天皇が偶々南殿に東天を御拜ある折柄、伊勢大神宮より八尺の靈烏が飛び來り、一振の劍を奉り、烏に因んで小烏丸と命名され內裏に傳つたが、貞盛の時下附あつて、爾後平家の重寶と成つたと言ひ、拔丸は伊勢の獵師某が太神宮に祈つて授つたもので、或時大樹に此の劍をよせかけて眠り、醒めれば不思議や彼の大樹が枯木と成つた奇蹟に驚き、木枯と命名したが、伊勢守忠盛之を聞き、年貢三千石に代へて取つた。或時忠盛が此の刀を枕頭に立てゝ午睡するうち突然其の仆れた音に醒めれば、池より大蛇が現れて忠盛を呑まうとして、刀

の威德に打たれて又水中に潛む所であつた。其の時刀身は鞘を脫して鍔が大蛇に向つて居たので拔丸と名付けられた。平治の亂に頼盛が捕はれんとして鏈金（クサリ）を切つて遁れたのも此の劍である。又太平記に北條時政の佩刀が仆れて、化けて時政を惱した火鉢の台の上の小鬼を斬り、鬼丸と名付けられて平氏（北條氏は平氏）累代の重寶と成つたが、之が中先代（ナカセンダイ）の亂に新田義貞に傳はり、更に足利高經より同將軍家に歸したとある。此の刀は信長・秀吉に移り、秀吉は本阿彌光德に預け、德川家も舊の如くし、一代に一度本阿彌家をして將軍の上覽に供へしめたと言ふ。今御物と成る。尙鬚切丸に就ては保元物語・源平盛衰記の〝劍の卷〟に詳しい。

波およぎ兼光（ナミカネミツ）　前項にも言ふ如く日本刀の中でも特に勝れた切味を示した名刀に對しては、種々なる異名を附して之を子々孫々に傳へ大切に秘藏して居る。各大名の家々にも其の祖先の武功を物語る名刀を襲藏し、之を傳家の重寶・お家の寶として尊重した。切味を想像させる名刀に鐵炮切兼光・泥丸・星切等の名があり。虎を切つた南山の太刀、兜を二つに切つた八八王、斬られた人が水中を泳いでから二つに成つたといふ波游兼光、三十六人を切つた爲に三十六歌仙等と、其の一つの刀に種々興味ある物語が附隨して、聞く者・見る者に無限の感化を與へて居る。是等の傳說は後世作者の材料と成り、例へば平將軍維茂が傳家の寶刀小烏丸で、戸隱山の鬼女を退治すると言ふ樣な趣向を生んだ。元來歌舞伎劇と刀劍とは、切つても切れぬ緣があり、拔けば血を見る村正や、正宗にからむ葛藤の數々、薩摩歌・阿波の鳴戸・福岡貢・鈴木主水に見る樣な寶刀の詮議にからむ人情又は刀傷噺、或は佐野次郎左衞門が吉原百人斬で名高い水もたまらぬ籠釣瓶、非人の仇討春藤次郎左衞門の快ゼリフ〝青江下坂二つ胴に敷腕、ずん

とよう切れます"の青江下坂等、枚挙に遑が無いが、近年流行の劍劇でも"今宵の虎徹は血に飢ゑて居る"と近藤勇がうそぶく時、大向は忽ちワッと湧くのである。尙波およぎ兼元に就ては人名辭書に"初世兼光は備前長船の刀匠左近將監長光の孫にして景光の子なり。孫左衞門と稱し又藤原を姓とし左衞門尉とも銘す。相州五郎正宗の門人にして嘉暦延元年間の人なり。延元の頃足利尊氏に俱せられ九州にても造る、或は云ふ上杉輝虎兼光の刀を佩ぶ。竹膝と號す。越後の三寶刀の一なり。輝虎の將竹膝三河守之を以て虎に獻ず。弘治中川中島の戰に敵將銃を以て輝虎を伺ふ。輝虎馬を躍らし突進して之を斬る。併せて銃筒を斷つ。敵皆其の鋭利に驚く。景勝に至り之を京師に送りて磨かしむ。研成る、三河守熟視して曰く、是れ贋なり。彼刀鋒先に小孔あり、僅かに馬毛を貫くべしと。景勝乃ち竹膝を遣はし之を京師に索む。果して眞刀を獲たり。石田三成に請ふて贋工を窮治し十三人を斬る。後之を秀吉に獻ず。大阪滅するに及び所在明かならず。家康黄金三百金を以て之を求むるも獲ずと。又云ふ、豐臣秀次も亦兼光の刀を佩ぶ。嘗て人を水濱に斬る。其の人泳ぎて去り、岸に登りて乃ち兩斷す。因つて名づけて浪游兼光と云ふ。其の他名物の作刀少からず"とある。

優秀性（イウシウセイ）　他にすぐれまさつたもちまへ。優はすぐれたさま。秀はひいでる。ひいでたもの。性はうまれつき。もちまへ。天賦。たち。性質。

刀工（タウコウ）　刀鍛冶。刀劍が武士の魂否日本人の命と迄尊重された結果、鍛工を最も名譽ある職とし、百工の上席に置かれ、其の技術も神技として精進・潔齋して心靈を打込んだものである。從つて名工も多く輩出した。記錄に名を殘して居る者のみでも無慮二萬人の多きに達する。刀鍛冶の遠祖は天目一命（アマノメヒトツノミコト）といふ。反りある彎刀と成つてからは大和

の天國（アマクニ）を最古とし、伯耆の安綱は大同年間である。專門の刀鍛冶が出來たのは直刀から彎刀に移つた前九年・後三年の奥州征伐の戰爭時代と言はれ、出羽・奥州の鍛冶が俘囚と成つて大和・備前等に移住し刀鍛冶を始めたのを最初とする。卽ち大和では文珠を祖として千手院・當麻・手搔・尻掛等の各派が起り、專ら極日鍛への刀劍を作り、備前には永延頃から友成・正恒・包平・高平・助平等が一派を立てゝ最も繁榮し、元暦頃には一文字一派・長船派・畠田派等が起り、建武・應永頃には其の數最も多く、山城は永延頃の三條宗近を祖とし五條・粟田口・來（ライ）等の各派が起つた。相模は北條義時の時代に山城・備前等から名工を呼出し鎌倉府内で作刀せしめて居たが、正應頃に行光の子正宗が出て、新に相州傳を完成し前後百餘年間は相州傳が天下を風靡した。美濃は建武頃に志津又は關に於て刀工が起り、永正頃から戰國時代に掛けて孫六・兼元・兼定等が出て專ら兩手に持つて打振るに適當な刀を案出した。德川期に入つての刀は新刀と稱し、江戸・大阪・京・肥前・越前等に名人が出て、地鐵・形狀共に今迄に見ないものを作るに至つたが、是等は外國から輸入の南蠻鐵を使用したのと、戰爭の經驗が乏しく成り武藝が發達した結果である。刀鍛冶は總て其の製作術を極秘にし中にも燒刄の法の如きは一子相傳であつて、他人には容易に之を傳承しなかつたが、文化・文政の頃江戸に水心子正秀なる者が出て或點まで之を公開するに至つた。

特殊（トクシュ）　普通とちがふこと。他に類が無いこと。並々でないこと。特別。特異。

鑄錬法（タンレンパウ）　鍛錬は金屬をきたひれること。打ちきたへること。日本刀の鍛錬法は古くから研究されたもので、殊に我が國に於ける刀鍛冶は世界一と言はれる迄に進歩し、金屬の配合・燒き入れ・湯加減等、極祕として一子相傳のものであつた。最近

ドイツ人など日本の古刀を買收し、理化學的の試驗や分析を行つた結果、モリブデン・タングステン等の特殊金屬の配合されてあるのを發見し、製鐵・冶金術上に大なる改良を加ふるに至り、鐵合金に依り特殊の地金を發見する樣に成つた事は、我が古刀匠の譽でもあるが、之を知らずに外國人の爲に其の理論を究められ、他に利用されるが如きは現代人の恥である。　**百錬鐵造**（ヒヤクレンタンゾウ）　幾回と無く錬り鍛へて拵へる。百錬は百たびも錬磨すること。百錬の鏡・百錬の鐵等。刀の鍛へ方は古來幾多の變遷を經、且つ各派に依つて異なるが、大體之を分つて古法・今法の二つとする。古法は一に火鍛（ヒギタ〈）といふ。火鍛とは火熱を以て十分に鐵分を溶解し、鑪底に溜つた鐵で作るのである。だが此の方法は其の鐵性が非常に緻密と成り取扱が容易でない短所があるので、傳と共に廢れた。今法は之を鎚鍛（ツチギタ〈）と言ひ、一般に行はれる鍛法である。此の鍛冶法は鐵塊を鑪中に投じ、火熱を以て十分之を柔軟にし、鎚を以て打ち伸ばし、折返しては打ち伸ばし、適度の頃合を見計つて更に伸鏨（ノベワカシ）と稱して輕く燒いては打ち伸ばし、輕く燒いては又打ち伸ばすのである。之を枉鍛（マサギタ〈）と言ふ。板目・杢目等は伸ばした鐵を四つ五つに切り、縱横に重ね、又火熱を以て十分に燒き、又打ち伸しを爲ること四五回にして肌目の如何を定め、適度を計つて打ち伸すのである。此の伸鏨の際に大凡豫定の寸尺に打ち伸して置き、其の次には銑透（センスキ）と言つて鑪（ヤスリ）で寸尺や麥を思ふが儘に削るのだ。削り終れば粘土を全體に塗り、刃方の土だけは竹箆に落す。此の土の無い箇所が所謂刃文（ヤキバ）と成る。十分土取した後、刃渡（ヤキバワタシ）と稱して火を熾にし、**鋒元**（ハバキモト）から切先まで斑（ムラ）の無い樣に燒き、燒き終れば之を水舟に入れる。此の水

の冷温加減が頗る大切で、各鍛冶の流派に秘傳と成つて居る。それから鑪で恰好よく忠（ナカゴ）を削り、家傳の銘を懸け、舞錐で目釘穴を鑽（キ）る。最後に平鐵（ヒラタガネ）を以て銘を切り、之で先づ一本の刀は出來る事になる。　**柔かみを與へる鐵**（ヤハラカミ　ヨ　カネ）　日本刀は一種類の鋼では無くて、中に軟い錬鐵を入れる。（別項參照）其の原料と成る鐵を庖丁鐵と稱して、極く軟い和鐵である。此の硬軟の組合せ方が刀匠の秘法で、甲伏せ・三枚合せ・五枚合せ・九枚合せ・四方詰等、其の種類が三十種以上もある。此の複雜な組合せが有る故、日本刀は折れず曲らすと言ふ獨特の長所を持つて居る。

實用上の僅値（ジツヨウジヤウ　カチ）　實際に使用すると言ふ點から眺めたねうち。實用は實際にやく立つこと。又實際に用ひること。價値はねうち。あたひ。經濟學的には慾望に對する財の程度。　**一大特色**（イチダイトクシヨク）　一大の一は接頭語、意味を强めて言ふ。特色は特に他と異なつた所。他にすぐれた點。其のものにだけある特別のおもむき。　**反**（ゾリ）　彎刀の峰の弧狀を成した所。切先から關（マチ）の間で計り、反何分と言ふ。刀身の反は燒刃土の塗り方と、燒入の水の湯加減で直刀にも成り彎刃にも成る。反何分といふ計畫の下に燒刃土を塗り、燒入の水の溫度を加減すると硬い刃の方が延びて彎曲が出來て來る。　**物打**（モノウチ）　刀で物を切る際其の物に觸れる所。即ち切先から鋒元（ハバキ）に向つて、刀心の廣がり始める邊り。所謂切先三寸で最も大切な場所。　**切先**（キツサキ）　刃物の最上端。刀のほさき。刃先。鋒鋩。鋩。　**刃文**（ハモン）　ジンモン。又燒刃とも言ふ。刃の上にある波紋の如き模樣。其の狀に依り直刃・亂刃・のたれ等の名がある。即ち研磨された刀劍を見ると地肌は黑目に刃は白く、其の境界線は判然として居る。此の線を刃文（ハモン又はヤキバ）と言ひ、或は直線的或は曲線的であるが、直線的なのが直刃（スグハ）曲

繰的なのが亂刃（ミダレバ）と言はれる。何れも燒入の際に生ずるもの。兩者共其の形狀に依つて廣直刃・中直刃・細直刃・丁字亂・五の目亂・三本杉・鋸刃・箱形・耳形・矢筈形・濤瀾・簾・菊水等、種々の名稱がある。尙直刃の崩れて曲線に近付いたものを直刃ほつれと言ひ、亂れの程度に依つて大亂れ・小亂れの稱がある。　**直刃**（スグハ）刃文の一種。燒刃の廣狹に依り廣直刃・中直刃・細直刃・絲直刃に區別され、又直刃の所々ほつれたるを直刃ほつれ、足の入りたるを鼠足、所々亂れたるを直刃小亂れと呼ぶ。此のうち中直刃は最も多い形式で、各期・各派を通じて多い。　**筆舌**（ヒツゼツ）文章や言語。筆の力や口の働き。筆先や口先。

遜光彌阿本る入見に（景秀前備）刀名

氣品（キヒン）高尙なおもむき。きぐらゐの高いこと。けだかいさま。風韵。風趣。　**一脈**（イチミヤク）ひとすぢ。脈打つさまにいふ。脈々と躍動するさま。　**氣魄**（キハク）いきごみ。きほふ心の迫力。氣力。氣魂。精根。　**惰氣**（ダキ）怠る心。なまけてしまりのないこと。惰弱の風。なまけごゝろ。いやき。だれきみ。　**邪氣**（ジヤキ）よこしまな心。病魔を起すわるい氣。もののけ。　**一瞬**（イツシユン）一度またゝくこと。極めて僅かな間。一瞬の間。一瞬間。　**霧散**（ムサン）

霧の散り去るが如く消えて無くなること。霧の如く散ること。　**心氣**（シンキ）心もち。氣ぶん。　**清明**（セイメイ）清くて明かなこと。すが〳〵しく晴やかなこと。　**一道**（イチダウ）ひとすぢ。續いて起りたつ狀にいふ。　**至竇**（シトウ）至つてたふといたから。此の上も無い珍重なたからもの。　**清淨**（シヤウジヤウ）清くて穢れの無いこと。清潔でよごれぬこと。本來は佛語、煩惱・私慾・罪惡等の無く、心の清きこと。人我の執の清く脫したこと。此處も此の意味を込めて取扱つて欲しい。刀劍を以て武士の魂又士道の守本尊と迄に尊崇せる我が國に在つては、刀鍛冶の如きも又普通の職工と其の選を異にし、最も名譽の職として神聖の業務と見做され、其の工場の如きも清淨を旨とし、工人は皆淨衣を着け、精進潔齋して其の業に任じ、精魂を込めて刀を鍛へた。　**精進**（シヤウジン）佛語。精力を籠めて佛道を勤めること。轉じて身を淨めものいみすること。又野菜のみを食ひ肉食せぬこと。　**潔齋**（ケツサイ）いみきよめること。ものいみすること。精進。刀鍛冶は仕事に掛る前、數日間身を淨め、工場には注連繩を張り廻らし、女の炊いた飯を食はなかつたものである。　**精魂**（セイコン）たましひ。精靈。　**邪惡**（ジヤアク）邪はねぢけて居ること。まがつて居ること。道に外れて居ること。不正。惡はわるいこと。よこしまなこと。根性のまがつたこと。不善。不良。不道德。不德義。姦邪。姦惡。　**精神的意義**（セイシンテキイギ）精神的方面から見た意味あひ。精神的は精神上の事に重きを置いて言ふ語。又精神上の事柄に關して言ふ。物質的の對。意義はこゝろ。わけ。こゝろ。わけがら。意味。趣意。理由。　**威服**（イフク）威光に依り他を畏服させる。威力で服從させる。畏伏。威壓・斬るぞ威かすのでは無い、刀の威光に依つて自づと威服させるのである。　**性情**（セイジヤウ）性質と心情と。性と情と。心の本體と感情・意志。こゝろ。せいしつ。うまれつき。たち。　**正義觀**（セイギクワン）

正義は正常なる理義。正しきすぢみち。正道。觀はみかた。見解。例へば厭世觀・人生觀等。

のもの　其の物自體。それと指して言ふ。それそのもの。

資料

參考

強靭な古刀の切味　（日本特殊鋼管技師、工學博士鈴木千代藏）

日本刀を見ると何かしら不可思議な神秘的な力を感得する。これは日本刀が昔から武士の魂であると考へられてゐた傳統的思想が自然さう感じさせると共に、一方これが製作に精魂を打込んだ工匠の力が我々に反映するためであらう。かゝる精神的方面のみならず、科學的に見ても日本刀は極めて優秀である。滿洲事變支那事變によつて實證されたその威力の原因を探究すると共に、日本刀と洋刀、或は古刀と新刀（所謂昭和刀）の差異、日本刀の耐寒性等について科學的檢討を行つてみよう。

今日科學的に研究した色々の報告を見ると古來の名刀は斷然他國の刀に優れたものであり、その製法も昔の文獻乃至は傳說など信頼するに足るものから判斷して全く科學的根據に矛盾がないといふに至つては昔の名工の努力に自ら頭の下るのを禁じ得ない。

日本刀の優秀性は先づその原料の素晴しさによることを知るねばならない。日本刀の原料には昔は山陰・山陽地方に出來た玉鋼を主として用ゐた玉鋼とは當時小さい爐を作り、その底の方から風を吹き込んで木炭を燃燒し、その熱と、これから出る還元瓦斯乃至は直接赤熱木炭を以て爐の中に入れた砂鐵を還元熔解せしめて作るといふ極く原始的な製鐵法によつて出來た鋼である。

西洋は勿論のことだが、今日日本でやつてゐる製鐵法は工業的に大規模なものであつて、還元剤にはコー

クスを用ひ、普通の冷い風の代りに、熱容量を大きくするために熱風を用ひ、多量製產による生產費の低下に腐心し一般の需要に應じてゐるのであつて、このため爐内の熱度は非常に上り、從つて燃料コークス及び鐵鑛石等に含まれた不純物までが還元されて、鐵の中に必要以上に入る場合が相當に多い。のみならず風のため入る空氣の酸素乃至は窒素が鐵と化合して鐵を不良にする機會が先の小型の爐の場合より多くなる。この鐵を更に精煉して鋼にするのであるから、これが昔の玉鋼以上に出ないのは當然で、從つて洋刀や昭和刀が古來の日本刀に著るしく劣るわけである。又これ等鋼を原料にして作る日本刀は心金・側鐵等々何枚かの鐵片を粗合せ鍛へあげ、文字通り水火の鍛錬を繰返して作り上げるものであつて、名工によつて色々の型こそあれ、永年研究されてゐるのである。丸鍛へといつて、たゞ一本の鐵片を鍛へ延して作る今日ありふれた工業的刀劍とは自ら異ることは自明のことである。

鐵鋼には冷熱共に一時脆くなる特性がある。冷間脆性・熱間脆性と唱へられてゐるもので、熱間脆性はしばらく措くとして、冷間脆性とは零下二・三十度で急に脆くなる性質のことをいふのである。零下何十度の極寒で、刀が折れ易くなつて使用に堪へなくなるのは此の故である。之も古來の名刀がよく克服し得るといはれてゐるのは、先の鍛へ方の如何が問題となること勿論である。此の他日本刀で燒入の方法は、古來入神の技といはれてゐたが、今日の科學の力は適切なる解決を與へてゐる。此の故に古來の名刀に優るとも劣らぬ名刀が、科學の力によつて續々と製作され、日本精神のシムボルとして、又優秀な武器として使用されるのも近いことであらう。

指導精神

日本刀は大和魂の象徵で、昔は刀の手前と稱し神聖視したものである。日本刀が我が國民に偉大な感化を

與へ、他國人の想像し得ない程に尊重される所以は、尚武の國である事が最大の原因であらうが、建國以來の神話・傳說に既に刀劍尊重の思想を見受けるのは、遠い昔から刀劍尊重の血が流れて居た事を示す。其の遺傳　受けた國民の長い歷史に於いて、常に刀劍が武士道と隨伴して大和魂の完成に重大な役割を演じた事は、益々刀劍と國民精神の間に密接な關係を作り上げた。更に我が國民に取つて日本刀が世界一の優秀な物であると言ふ點が、國民的自負心に偉大なる滿足を與へて居る。日本刀以外他の文物の何を顧ても、大陸文明の感化を蒙らぬものは殆ど無いと言つても良い。然るに獨り日本刀が此の地球上に於いて日本獨特の精神なものである點が我が國民の絕大なる誇で、結局日本刀の優秀な點が日本人をして益々日本刀を尊重せしめる所以だ。日本刀が現代の進歩した科學の世の中に在つても依然として世界一の名聲を博する理由は、第一に其の原料たる中國地方の砂鐵が稀に見る良質の物であり、之が製煉方法は極めて幼稚ではあるが、然も良質の鐵を作る方法である事、及び其の鐵を取り來つて刀にする刀鍛冶の祕傳・口傳が冶金學上から見ても驚嘆に値す　程優れて居る事、其の彎曲の具合や厚さの加減が力學上から見て完全なものである事、並に研磨の方法が實に叮嚀至極である事、最後に之を使ふ劍道と使ふ人が大和魂の所有者である事等の諸原因から來て居る。だから之を外國で模倣しようとしても絕對に不可能である。此の獨有性を持つ日本刀の中でも特に優れた切味を示した名刀に對しては、種々なる異名を附して之を子々孫々に傳へ大切に祕藏して居る。源氏の鬚切・膝丸、平家の小烏丸を始め、北條氏は鬼丸、足利氏には篠丸、織田信長は一期一振と言ふ樣に歷史上名ある刀もある。各大名は勿論、舊家・名家等にも其の祖先の武功を物語る名刀が數多く秘藏されてある。それらの刀を見、其の物語を聞く時、我等日本人の精神は何か知ら刀から言はれぬ感化を受ける。我が

國民が秋水の如き刀を見る時、何人も其の皎々たる輝きに見惚れると共に、之に隨伴し來つた歷史を思ひ出さずには居られない。從つて日本刀を好まぬ日本人は一人も居ないと言つて過言では無い。

此の日本刀を作るには、刀匠は先づ齋戒沐浴をし、其の仕事場には嚴かに神を祀り、注連繩を廻らし、不淨の者の入室を禁止して精神を籠めて一心不亂に作るのである。其の順序は先づ中國地方の砂鐵から採つた最も純良な玉鋼を持つて來て、之を幾度も打延はしては折り、折つては又打延はして鋼の中の純にして純なるものを作り上げる。此の作業を鍛錬と稱し、其の折返す回數は十五回乃至十六回を普通とし、多いのは三十回にも及び、最初三貫目位の鋼は三百匁位に減じて仕舞ふ。其の折返しの方法にも一文字鍛へ・十文字鍛へ・捩り鍛へ・屛風鍛へ・鰐鍛へ等の諸方法がある。更に鍛へたものを小さく切つて、異つた成分のもの二三種類を混ぜ再び折返す方法もある。それには木の葉鍛へ・拆木鍛へ・短冊鍛へ等、各流各派に依る祕傳が存して居る。日本刀は一種類の鋼でなくて、中に軟い錬鐵を入れる、其の原料鐵は庖丁鐵と稱して、極く軟い和鐵で之を中に入れる。此の硬軟の鐵の組合せ方に甲伏せ・まくり・三枚合せ・本三枚・折返し三枚・五枚合せ・八枚合せ・九枚合せ・四方詰等、其の種類が三十種以上もある。此の複雜な組合せが有る故に、日本刀は折れず曲らずと言ふ長所を持つて居る。又一方に於て硬軟の鐵を種々に作る爲に卸し鐵と稱して、刀匠の意で硬軟夫々思ひの儘に自由なものを熔して作るのである。其の卸し鐵に銑卸し、鋼卸し・生鐵卸し等の祕傳があつて、之を鍛錬して同じく刀の原料とする。組合せたものを打延ばして、眞直な刀の形にして之に燒刃土を塗る、薄く塗つた所は燒が入つて刃文と成り、厚く塗つた所は赤熱して水に入れても燒は入らない。此の土は粘土・砥石粉・木炭等を種々の割合に調合して作られ、其の塗方で直刃に成り亂刃にも成つて來る。

燒入の水の溫度が"湯加減"の祕傳と稱せられ、刀匠の苦心する所である。燒入をすると硬い刃の方が延びるので初めて刀の彎曲が出來て來る。此の刀の燒戻しをして適當な刃の强さにし、荒磨きをして然る後に莖(なかご)の鑢をかけ、銘を切つて研師の手に渡す。研師は荒砥・伊豫砥・伊豫名倉・中名倉・細名倉・折曇・地艶・刃艶等の砥石で順々に叮嚀に研ぎ、最後に拭ひを掛ける。日本刀に出て居る綺麗な地肌卽ち鐵の色は、最後の拭ひで表れて來る。此の拭ひは多く鐵肌を細末にし、胡麻の油に混ぜて綿に附け、刀面を氣永に磨き上げるが、色々の拭ひの調合があつて夫々研師の祕傳とされる。日本刀の切斷面は刃が蛤を切斷した樣に成つて居て、決して平面では無い。之を蛤刃に研ぐのは中々の技術を要し、之あるが故に刀は良く切れるのだ。

日本刀が國民生活に如何に密接な關係を持つて居たかは、我々の日常語の中に語源を玆に發するものゝ多きを見ても知られる。例へば"正眞正銘間違なし"と云ふ言葉の如き刀の銘の正しい事から起り、"折紙附き"と言ふのは刀の鑑定に際して本阿彌家から出す折紙から出で、"反(ソリ)が合はぬ"といふ言葉は刀の反りと鞘の反りが合はぬ所からピタリと納らぬ事を意味し、"元の鞘に納る"と言ふのも刀から出で、"地金を出す"と言ふのは刀の中心部に入つて居る悪い地金が研ぐに從つて出て來る事から來て居る。又"土壇場に及んで"と言ふのは罪人が試し斬をされる時土壇の上に載せられる事を意味する。役に立たぬ人を"生くら"と言ふのは刀の刃の切れない事から出て居る。かやうに日常語に迄這入つて來て居る刀に對して、稍もすれば祟ると言つて恐怖して居る迷信家もあるが、此の思想は幕末に於て劇作家の手に成る演劇から出たもので、言はゞ町人階級の惰弱な根性から來て居る。日本刀が大和魂の表徵であるならば、我等の守護と成り國家の鎭護とも成るべきで有つて、祟る樣な事は斷じて無い。寧ろ鄭重に愛護して子孫にも誇るべきで、苟も取扱

を粗末にし之を錆びさせて置く事こそ戒愼すべきでは有るまいか。最近我が國軍に於ても戰時には洋刀を廢して日本刀を用ひ、今次の事變にも百人斬・百五十人斬と輝しい武勳を立てゝ居るのは、我々の意を强うする所である。日本刀は武士道の精、大和魂の宿る所、日本人は矢張日本刀で無くてはピッタリ來ない。

指導形態

指導上の認識點

1　堂々たる一種の議論文で、日本刀の鋭利さ・優秀性・氣品・氣魄・精神的意義等を知らせ、日本刀愛好の念を啓培すると同時に傳來せる日本精神の眞骨頂を感得せしめるのが本課の眼目である。

2　條理整然たる解說的議論文の風格を偲ばせ、用語の周到さと一語一句を苟もせざる嚴肅さを味到せしめるのが形式的方面に於ける指標である。

3　源家の寶刀鬚切、さては波およぎ兼光等日本刀に隨伴せる各種の傳說や、之が鍛造に精魂を打込んだ名工の逸話等は興味を込めて隨所に附說し、日本刀獨特の切味や氣品と氣魄に一段の神祕性を添加する心構が大切である。

4　本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する樣立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1　題目の指導。
▽日本刀に就ての既有觀念を一通りざつと確めてから通讀に移るが良い。倘能ふべくんば日本刀の實物を示し讀心を唆り通讀に入れば申分はない。

2　全課の自由學習。
▽ゆつくり時間を與て自力の限りを盡させる

3　讀後感を要領よく記帳させる。

▽思つたこと。氣附いたこと。感じた事等。

4 新出文字の指導。

▽字書を輔導して其の都度索引させる。

手　殊　鍛　錬　價　値　舌　起　鍛
善

5 難語句の指導。

▽質問を待つて隨所に指導し特に難解のものは一齊に指導する。

武士の魂　寸時　身邊　軍刀　鋭利
源家　重寶　鑄切　波およぎ　象光
平首　手綱　諸共　傳說　切味　優秀性
實用　刀工　特殊　鍛錬法　百錬鍛造
普通　實用上　價値　美觀　一大特色
反　物打　切先　底光り　直刄　亂刄
刄文　筆舌　刀劍　氣品　鞘　一脈
氣魄　りんとして　惰氣　邪氣　霧散
心氣　清明　鐵壁　一道　和氣　至寶
清淨　しめなは　精進　潔齋　ひたすら
精魂　邪惡　精神的意義　威服　優美
性情　正義觀　精神

6 默讀。

▽論旨の大體を掴ませる。

7 指名讀。

▽大きく區切つて、數名に。文の中心點を探らせる。

8 ▽ゆつくり默讀させて。

9 話合。

▽全課を立論・例證・論述・論斷の四體段に分たせ、機構の大體を吟味させる。

10 範讀。

▽如上の體段に即して其の都度息を休め、此處が議論の何に當るかを呑込ませ乍ら範讀する。

11 輪讀。

▽段落(體段)毎に句切らせ、尻取式に反覆輪讀させる。

第二次指導

1 一度靜かに通讀させる。

▽論旨の大體を頭に置かせて。

2 質疑應答。

▽重要な箇所は一度全級に確めてから指導する。

3 問題學習。

▽グループに分れ各個に問題を作製させる。

4 討議。

▽前項の問題を全級の討議に附し、各自の見解を忌憚なく戦はせる。

5 體段に即して逐次に研究させる。

▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配付する。

- (3) 論述……（又、本論）
  - 氣品
    - 一脈の氣魄（りんとして）をかすべからざる氣品
    - 起つて振へば〔惰氣〕〔邪氣〕（霧散）
    - 心氣自ら清明
    - 鋭さを包む一道の和氣
  - 刀工
    - 仕事場
      - 清淨にして
      - しめなはを張り
      - 神を祭り
      - 精進潔齋
      - （清らかな心）
    - 一槌々々精魂を打込む（魂）
    - 邪惡な心……捨てゝかへりみられない
- (4) 論斷……（又、結論）
  - 精神的意義
  - 武士が刀劍を帶する意義
    - 敵を斬るを目的とするのみではなく（平和）
    - 身を守り
      - 拔かざるにすでに
      - 敵を威服するに足る
      - （護身）
    - （こゝに存する）
  - 平和を愛し
    - 美を喜ぶ
    - 優美な性情
  - 善にくみし
  - 邪をにくむ
    - 正義觀
    - （日本刀の精神）

6 グループ學習。
▽グループに分れ配付した文圖とノートを比較對照して研究させる。
7 默讀。
▽日本刀禮讃の諸條件を確實に意識させて。
8 指名讀。
▽結論を最初から頭に置かせて。
9 範讀。
▽歩々論旨を嚴密に確め乍ら。
10 低音讀。
▽解説的議論文の風格を偲ばせて。
11 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 通讀練習。
▽聲を出して反覆通讀させる。
2 輪讀。
▽座席の順に。
3 指名讀。
▽中・劣生を主として。
4 話合。
▽讀後の印象や所感を中心に。
5 演習。
▽日本刀の見方・味ひ方を一目で分る樣文圖に作製させる。
6 學習事項の整理。
▽内容方面では日本刀の鋭利なこと、氣品・氣魄・精神的意義等、形式方面では解説的議論文の風格・用語の周到さ等。
7 補充説話。
▽日本刀の沿革（太古の直刀から近世の彎刀に至る迄）日本刀に關する興味ある傳説・刀鍛冶特に名工の逸話等。
8 朗讀練習。
9 視寫・聽寫練習。
0 新出文字の書取。
11 語句の應用練習。
12 テスト。

テスト問題

一、次の語句に讀みと解釋を附けなさい。

1　武士の魂　2　源家の重寶　3　手綱諸共に
4　優秀性　5　實用上の價値　6　刄文の美
7　一脈の氣魂　8　一瞬に霧散　9　精神的意義
10　精進潔齋

二、次の箇所を聽寫させる。

1　平和を愛し、美を喜ぶ我が國民の優美な性情と、善にくみし、邪をにくむ正義觀とは、まことに日本刀の精神共のものといふべきである、

2　刀は武士の魂である。古の武士は、寸時もこれを身邊からはなさなかつた。今の軍人も、軍刀には皆これを用ひる。

三、次の漢字に振假名を附けなさい。

句　跡　禁　施　錦　鎭　護　展　飾　華　恭　層　繁　才
假　漢　撫　拭　例　著　麗　莊　縮　慕　祕　朗　鈍　亂
戲　嫁　誌　專　曆　接　賞　綱　闘　距　熟　獲　凡　殆
簡　單　訪　坐　識　努　希　係　述　鐘　英　奮　斜　澄
褐　默　岳　永　適　龍　狀　留　緣　險　伴　吏　藥　穗
標　兆　陰　溪　奔　狹　紺　佳　透　象　倉　慰　昇　遣
式　盲　激　溯　視　貴　版　資　効　保　爆　壓　鍛　錬
値　善

教法精說　新讀本の指導精神（尋常科用卷十一）終

昭和十三年四月一日　初版印刷
昭和十三年四月五日　初版發行

教法精說　新讀本の指導精神　卷十一
定價　金貳圓九拾錢

東京市淀橋區戸塚町三丁目六一番地
著作者　友納友次郎
東京市京橋區入船町三丁目三番地
發行者　藤原惣太郎
東京市京橋區入船町三丁目三番地
印刷者　葛原秀一

發行所　東京市京橋區入船町三丁目五一三番　明治圖書株式會社

大賣捌所
東京　林平書店　東京堂
北隆館　東海堂
文林堂　文盛堂
大阪　合資會社　柳原書店
名古屋　川瀨書店
久留米　菊竹金文堂
福岡　大坪惇信堂
金澤　宇都宮書店

納本
不許